

茨城県教育財団文化財調査報告第31集

水海道都市計画事業・内守谷土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 2

奥山 A 遺跡

奥山 C 遺跡

西原 遺跡

昭和 61 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

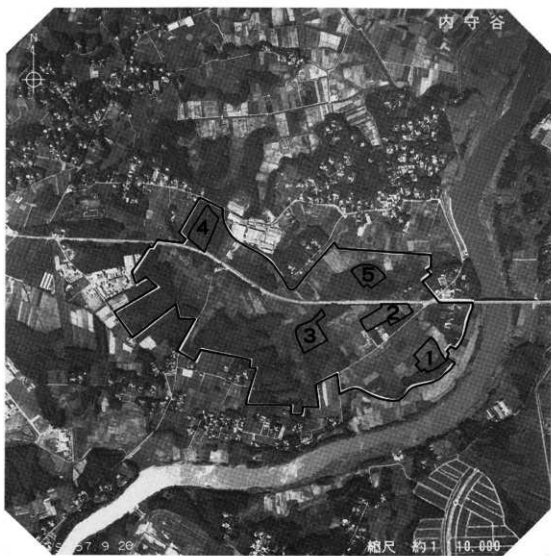
茨城県教育財団文化財調査報告第31集

水海道都市計画事業・内守谷土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2

おく	やま	A	遺跡
奥	山		
おく	やま	C	遺跡
奥	山		
にし	はら	遺跡	
西	原		

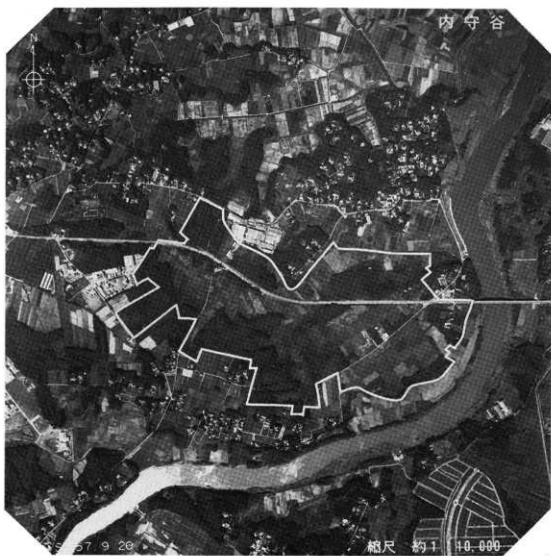
昭和61年3月

財団法人 茨城県教育財団



内守谷地区遺跡遺景

- 1 奥山 A 遺跡
- 2 奥山 B 遺跡
- 3 奥山 C 遺跡
- 4 西原遺跡
- 5 奥山下根遺跡



内守谷地区遺跡遺景

- 1.....奥山 A 遺跡
- 2.....奥山 B 遺跡
- 3.....奥山 C 遺跡
- 4.....西原遺跡
- 5.....奥山下根遺跡

序

水海道市南部の内守谷地区における「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業」が、住宅・都市整備公団によって進められておりますが、その事業地内には、5か所の埋蔵文化財包蔵地が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、昭和58年4月から埋蔵文化財発掘調査を実施し、今日に至っております。この間、当事業地内における奥山B遺跡、奥山下根遺跡の調査成果につきましては、昭和60年3月に報告書を刊行し、皆様に御報告をしたとおりであります。

今回、昭和59年度に発掘調査を実施した奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡の発掘調査報告書をここに刊行する運びとなりましたが、本書がより多くの方々へ研究の資料としてはもとより、教育・文化の向上のため広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である住宅・都市整備公団をはじめ茨城県教育委員会、水海道市教育委員会等関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

昭和61年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 竹内 藤 男

例 言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和59年度に発掘調査を実施した水海道市内守谷町に所在する奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 奥山A遺跡、奥山C遺跡、西原遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長		竹 内 藤 男	
副 理 事 長		川 又 友三郎	
常 務 理 事		綿 引 大 萩 原 藤之助	～昭和60年3月 昭和60年4月～
事 務 局 長		小 林 洋 堀 井 昭生	～昭和60年3月 昭和60年4月～
調 査 課 長		青 木 義 大	
企 画 管 理 班	班 長	市 毛 洋 一 北 高 健	～昭和60年3月 昭和60年4月～
	主任調査員	加 藤 雅 美	
	上 事	鈴 木 三 郎	～昭和60年3月
	"	田 所 多佳男	昭和60年4月～
	"	海老沢 一 夫	～昭和60年3月
	"	大曾根 山 崎 初 雄	昭和60年4月～
調 査 第 一 班	班 長	堀 川 計 三	昭和59年度
	主任調査員	小 河 邦 男	昭和59年度調査、昭和60年度整理・執筆
	"	入 見 暁 朗	昭和59年度調査
整 理 班 長		石 井 毅	昭和60年度

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、小河邦男が執筆・編集を担当した。
- 4 発掘調査及び出土遺物等については、埼玉県史編纂室係長増田逸朗氏、石器の材質鑑定は、茨城県立上郷高等学校教頭蜂須紀大氏に御指導をいただいた。
- 5 須恵器の胎土分析は、奈良教育大学教授三辻利一氏、山上炭化物の材質鑑定は、パリオ・サベエイ株式会社に依頼した。
- 6 本書に使用した記号等については、第3章第1節の遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。
- 7 発掘調査及び整理に際して御指導・御協力を賜った関係機関、各位に深く感謝の意を表します。

目 次

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	1
1 調査区設定	1
2 基本層序の検討	2
(1) 奥山A遺跡	3
(2) 奥山C遺跡	3
(3) 西原遺跡	3
3 遺構確認	4
4 遺構調査	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3章 奥山A遺跡	11
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	11
1 遺跡の概要	11
2 遺構・遺物の記載方法	11
第2節 調査経過	17
第3節 遺構と遺物	18
1 竪穴住居跡	18
2 遺構外出土の遺物	32
第4節 まとめ	37
第4章 奥山C遺跡	41
第1節 遺跡の概要	41
第2節 調査経過	41
第3節 遺構と遺物	45
1 集石	45

2	炉穴	51
3	土坑	60
4	遺構外出土の遺物	73
第4節	まとめ	113
第5章	西原遺跡	119
第1節	遺跡の概要	119
第2節	調査経過	120
第3節	縄文時代の遺構と遺物	124
1	炉穴	124
2	遺構外出土の遺物	126
第4節	古墳時代の遺構と遺物	134
1	竪穴住居跡	134
2	土坑	214
3	遺構外出土の遺物	217
第5節	その他	218
第6節	まとめ	224
終章	むすび	235
附章	自然科学的分析	237
1	西原遺跡出土初期須恵器の胎土分析	237
2	奥山A遺跡出土試料炭化材同定報告	239
3	西原遺跡出土試料種子及び材同定報告	241

第68図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)……140	第96図	第9号住居跡出土遺物実測図(6)……190
第69図	第2号住居跡実測図……141	第97図	第10号住居跡実測図……191
第70図	第2号住居跡出土遺物実測図(1)……145	第98図	第10号住居跡出土遺物実測図(1)……193
第71図	第2号住居跡出土遺物実測図(2)……147	第99図	第10号住居跡出土遺物実測図(2)……195
第72図	第3号住居跡実測図・遺物出土状況図……149	第100図	第11号住居跡実測図……197
第73図	第3号住居跡出土遺物実測図(1)……154	第101図	第11号住居跡出土遺物実測図……199
第74図	第3号住居跡出土遺物実測図(2)……155	第102図	第12号住居跡実測図……201
第75図	第3号住居跡出土遺物実測図(3)……156	第103図	第12号住居跡出土遺物実測図(1)……203
第76図	第3号住居跡出土遺物実測図(4)……157	第104図	第12号住居跡出土遺物実測図(2)……204
第77図	第3号住居跡出土遺物実測図(5)……158	第105図	第13号住居跡実測図……207
第78図	第3号住居跡出土遺物実測図(6)……159	第106図	第13号住居跡出土遺物実測図……209
第79図	第4号住居跡実測図・出土遺物実測図……161	第107図	第14号住居跡実測図……211
第80図	第5号住居跡実測図……163	第108図	第14号住居跡出土遺物実測図……212
第81図	第5号住居跡出土遺物実測図……164	第109図	第15号住居跡実測図……213
第82図	第6号住居跡実測図……167	第110図	第15号住居跡出土遺物実測図・ 遺構外出土遺物実測図(1)……215
第83図	第6号住居跡出土遺物実測図(1)……168	第111図	第3・4・5号土坑実測図……216
第84図	第6号住居跡出土遺物実測図(2)……169	第112図	第6号土坑実測図・出土遺物実測図……217
第85図	第7号住居跡実測図……171	第113図	第1号土坑実測図・出土遺物 実測図・第14号土坑実測図……219
第86図	第7号住居跡出土遺物実測図(1)……173	第114図	第1号井戸実測図……220
第87図	第7号住居跡出土遺物実測図(2)……174	第115図	第1・3号溝実測図……221
第88図	第8号住居跡実測図……176	第116図	第2号溝実測図……223
第89図	第8号住居跡出土遺物実測図……177	第117図	遺構外出土土器・礎分布図……224
第90図	第9号住居跡実測図……179	第118図	住居跡長軸方向……226
第91図	第9号住居跡出土遺物実測図(1)……185	第119図	住居跡の規模……226
第92図	第9号住居跡出土遺物実測図(2)……186	第120図	土師器分類……230
第93図	第9号住居跡出土遺物実測図(3)……187		
第94図	第9号住居跡出土遺物実測図(4)……188		
第95図	第9号住居跡出土遺物実測図(5)……189		

表 目 次

表1	奥山A・奥山C・西原遺跡周辺の道跡 一覧表……8	表6	拓影図掲載土器片出土小調査区名一覧表……111
表2	奥山A道跡土器片通一覧表……35	表7	集石された礎の数量……112
表3	奥山A道跡住居跡一覧表……36	表8	西原遺跡石器類一覧表……132
表4	奥山A道跡出土土器器種別推定個体数……40	表9	西原遺跡住居跡一覧表……225
表5	奥山C道跡土坑一覧表……60	表10	西原遺跡住居跡貯蔵穴一覧表……227
		表11	西原遺跡住居跡出土土器器種別一覧表……231

写真図版目次

奥山A遺跡

- PL 1 遺跡全景, 第1・2号住居跡
PL 2 第1号住居跡, 第1号住居跡遺構確認
第1号住居跡土層
PL 3 第1号住居跡遺物出土状況, 第2号住居跡
第2号住居跡遺物出土状況
PL 4 第2号住居跡遺物出土状況
PL 5 第2号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡
第3号住居跡遺物出土状況
PL 6 遺構外出土縄文土器片
PL 7 第1・2号住居跡出土遺物
PL 8 第2号住居跡出土遺物
PL 9 第1・2号住居跡出土遺物, 遺構外出土遺物

奥山C遺跡

- PL 10 遺跡全景
PL 11 第2・3・5・7・8・9・12・13号集石
PL 12 第2・22・25・33・34・35・41・43号土坑
PL 13 第45・61・63・64・71・72・75・77号土坑
PL 14 第2・3号炉穴, 第3号炉穴遺物出土状況
PL 15 第4・5・6号炉穴遺物出土状況
PL 16 第13号集石遺物出土状況, 片刃磨製石斧出
土状況, 土器尖底部出土状況
PL 17 第4号炉穴出土縄文土器片
PL 18 第5号炉穴出土縄文土器片
PL 19 縄文時代早期沈線文系土器片
PL 20 縄文時代早期無文土器片
PL 21 縄文時代早期沈線文系土器片(1)
PL 22 縄文時代早期沈線文系土器片(2)
PL 23 縄文時代早期沈線文系土器片(3)
PL 24 縄文時代早期沈線文系土器片(4)
PL 25 縄文時代早期沈線文系土器片(5)
PL 26 縄文時代早期沈線文系土器片(6)
PL 27 縄文時代早期条痕文系土器片(1)
PL 28 縄文時代早期条痕文系土器片(2)
PL 29 縄文時代早期条痕文系土器片(3)
PL 30 縄文時代前期前葉土器片
PL 31 縄文時代前期前葉~後葉土器片
PL 32 縄文時代前期後葉~中期前葉土器片
PL 33 石器類

PL 34 礎

西原遺跡

- PL 35 遺跡全景
PL 36 遺構確認状況, 第1号住居跡, 第1号住居跡貯
藏穴遺物出土状況
PL 37 第2号住居跡, 第2号住居跡遺物出土状況
PL 38 第3号住居跡, 第3号住居跡遺物出土状況
PL 39 第3号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡貯藏
穴土層
PL 40 第4・5号住居跡, 第5号住居跡遺物出土状況
PL 41 第6・7号住居跡, 第6号住居跡遺物出土状況
PL 42 第7号住居跡遺物出土状況
PL 43 第8号住居跡, 第8号住居跡遺物出土状況
PL 44 第9号住居跡, 第9号住居跡遺物出土状況
PL 45 第9号住居跡遺物出土状況
PL 46 第10号住居跡, 第10号住居跡遺物出土状況
PL 47 第11号住居跡, 第11号住居跡遺物出土状況
PL 48 第12・13号住居跡
PL 49 第13号住居跡遺物出土状況
PL 50 第14・15号住居跡, 第14号住居跡遺物出土状況
PL 51 第15号住居跡遺物出土状況, 第4・6号土坑
PL 52 第1号炉穴, 第1号土坑, 第1号井戸土層,
第1・3号溝
PL 53 縄文土器片(1)
PL 54 縄文土器片(2)
PL 55 第1・2号住居跡出土遺物
PL 56 第3号住居跡出土遺物
PL 57 第3号住居跡出土遺物
PL 58 第3号住居跡出土遺物
PL 59 第3号住居跡出土遺物
PL 60 第5・6号住居跡出土遺物
PL 61 第7号住居跡出土遺物
PL 62 第8・9号住居跡出土遺物
PL 63 第9号住居跡出土遺物
PL 64 第9号住居跡出土遺物
PL 65 第9号住居跡出土遺物
PL 66 第9・10号住居跡出土遺物
PL 67 第10・11号住居跡出土遺物
PL 68 第12・13号住居跡出土遺物

PL 69 第14·15号住居跡出土土器

PL 70 石製模造品、砥石

PL 71 土玉、炭化物

PL 72 奥山A遺跡出土炭化材顯微鏡写真

PL 73 西原遺跡出土炭化物写真

PL 74 西原遺跡出土炭化材顯微鏡写真

PL 75 西原遺跡出土炭化材顯微鏡写真

PL 76 西原遺跡出土炭化材顯微鏡写真

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

日本住宅公団は、昭和41年から茨城県取手市と下館市を結ぶ「関東鉄道常総線」の沿線に、常総ニュータウンの建設を進めている。この開発は、首都圏の人口や産業の集中を緩和するとともに、首都圏の膨大な住宅用地の需要に応え、良好な居住環境を備えた住宅用地の供給と、周辺都市との有機的な結合をめざした調和ある新しい町づくりを目指しているものである。

この一連の開発として、茨城県水海道市内守谷町に、開発総面積66haに及ぶ「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業」が計画された。

開発に先立ち、昭和56年2月、日本住宅公団は、茨城県教育委員会に開発地域内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会したが、これに対し、茨城県教育委員会は、開発地域内の遺跡分布調査が必要である旨を回答した。その後、昭和56年10月に日本住宅公団と宅地開発公団が統合して、住宅・都市整備公団となった。

昭和57年5月、住宅・都市整備公団から茨城県教育委員会に対して、開発地域内の分布調査の依頼があり、茨城県教育委員会は、同57年12月に試掘を実施した。その結果、開発地域内に、奥山A遺跡・奥山B遺跡・奥山C遺跡・奥山下根遺跡・西原遺跡の埋蔵文化財包蔵地が確認され、この取り扱いについて、茨城県教育委員会、水海道市教育委員会及び住宅・都市整備公団の三者が協議を行った結果、現状保存は困難であることが判明し、記録保存の措置を講ずることとなった。

茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し、昭和58年4月から2か年の計画で発掘調査を実施することとなった。昭和58年度には、奥山B遺跡、奥山下根遺跡の発掘調査を実施し、昭和59年度には、前記2遺跡の整理と、奥山A遺跡、奥山C遺跡及び西原遺跡の発掘調査を実施することになった。

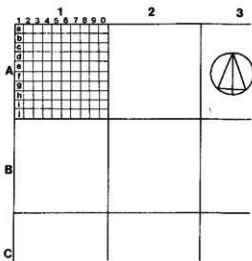
第2節 調査方法

1 調査区設定

発掘調査を実施するにあたり調査位置を明確にするため、各遺跡の調査基準点および調査区の設定には、日本平面直角座標系・第IX系座標を使用した。奥山A遺跡における調査区設定方法は、X軸(南北)−2,440m、Y軸(東西)12,580mの交点(座標値)を基準点とし、この点から東西・南北に各々40mずつ平行移動して一辺40mの大調査区を設定するという方法をとった。

大調査区の名称は、北から南へ「A」、「B」、「C」……、西から東へ「1」、「2」、「3」……と大文字を付し、「A1区」、「B2区」、「C3区」と呼称した。この大調査区を4m四方の小調査区（グリッドと呼称）に100分割し、北から南へ「a」、「b」、「c」……、「j」、西から東へ「1」、「2」、「3」……、「9」、「0」と小文字を付した。小調査区の名称は、大調査区の名称と合わせた4文字で表記し、「B3a2区」、「C2j0区」のように呼称した。

奥山C遺跡の基準点の座標値はX軸-2,320m、Y軸12,100mで、西原遺跡は、X軸-1,840m、Y軸11,660mであり、調査区の設定はいずれも奥山A遺跡と同様である。なお、測量杭打ちは社団法人茨城県建設コンサルタントに委託した。

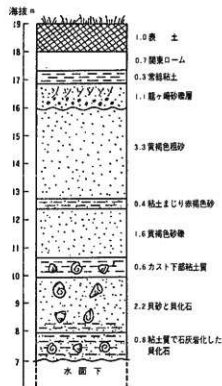


第1図 調査区名称図

2 基本層序の検討

奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡の所在する台地の地質を、奥山A遺跡から北東へ約400mの鬼怒川右岸に露出した玉台化石床での柱状図で説明する⁽¹⁾。

台地の基盤は、15～6万年前の古東京湾の堆積物から成る成田層であり、9m以上の厚さに堆積している。成田層の下部には貝化石を含む化石床が堆積している。成田層の上の層は、竜ヶ崎砂礫層で赤褐色の砂礫と粘土が約1.1mの厚さに堆積している。竜ヶ崎砂礫層の上には青灰色粘土の常総粘土層が約30cmの厚さに堆積している。常総粘土層は、下米古ロームで箱根火山の内輪山の火山灰が水中で風化したものと考えられている。この上に、関東ローム層が約70cmの厚さに堆積している。関東ローム層は2層に分けられ、下層が黄褐色をした武蔵野ロームで、



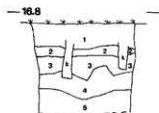
第2図 玉台化石床柱状図

上層が立川ロームで赤褐色又は褐色をしており、その間に黒色バンドが挟まれている。関東ローム層の上部に表土が約1m堆積しているが、これは、関東ローム層に腐植土の混じった層である。

次に遺跡ごとに土層の特徴を記載する。

(1) 奥山A遺跡

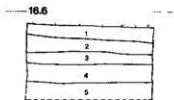
古墳時代の住居跡の検出された台地縁辺部から西方へ40mほどの、D1c0区で調査した土層が第3図である。1層は表土で、畑として利用された暗褐色耕作土であり、34~40cmの厚さに堆積しているが、この層は、住居跡の検出された台地縁辺部では、20~30cmである。2層は、暗褐色をしたソフトロームである。遺構はこの層から確認されている。3層は、2層より黄味の高い褐色をしたソフトロームである。2層と合わせてソフトロームは約30~50cm堆積している、この下層のハードロームとの境は、鋸歯状を呈している。4層のハードロームには、上の層のソフトロームが混じっている。5層はチョコレート色をしたハードロームで、かなり締まっており、更に下へと続いている。地表から80cmほどの深さまでトレンチャーにより部分的に攪乱されている。



第3図 奥山A遺跡
テストピット土層図

(2) 奥山C遺跡

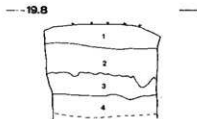
第4図は、縄文時代早期の土器片と礫が多量に出土した台地突端部から奥(南東)へ寄ったC2i1区で調査した土層である。1層は暗褐色の表土層で、ローム粒子が多量、炭化粒子が少量混入し、締まりがやや弱い。この表土層は、B区の北西斜面部では40~60cmと厚く、C区・D区・E区の西斜面部では、10~30cmと薄く堆積している。2層は褐色土で20~30cm堆積しており、ローム粒子と焼土粒子少量を含んでいる。3層は、縄文早期の遺物が多量に出土した台地の突端部にだけみられる層で、10~20cmに堆積しており、赤味の強い褐色をしている。2層の下部から3層にかけて縄文早期の遺物が含まれていた。4層は、ソフトロームで30cmほど堆積している。5層から下がハードロームである。



第4図 奥山C遺跡テストピット
土層図

(3) 西原遺跡

遺跡南西側斜面部F3a1区で調査した土層が第5図である。1層は、暗褐色をし、30~40cmの厚さに堆積している。木根が密に入り込んでいる。2層は、ソフトロームで締まりがある。この層の上面で遺構



第5図 西原遺跡テストピット土層図

を確認した。3層は、2層より黒味の強いハードロームで、かなり締まっている。2層との境は鋸歯状になっている。4層は3層より黄味の強いハードロームで、3層と同様かなり締まっている。

3 遺構確認

遺構の確認方法は、奥山A遺跡では調査区域の4分の1のグリッドを試掘し、遺構の有無を確認した。奥山C遺跡、西原遺跡では、調査区域の8分の1のグリッドを試掘した段階で、遺構の存在が確認されたので、調査区の、全域を重機で表土除去し、遺構の有無を確認した。

4 遺構調査

住居跡の調査は、遺構の中央部で直交するように土層観察用ベルト2本を設定して四分割し、それぞれを掘り込む四分割法で実施した。地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。炉穴及び土坑の調査は、長径方向で二分割して掘り込む二分割法で実施した。調査の記録は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面（完掘）写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行った。

土層は、土質、色相、含有物、粘性等を観察して分類の基準とした。色相を決定するにあたっては、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社発行）を参考にした。

遺物は、原則として、出土位置、遺物番号、標高（レベル）等を遺物出土状況図に記載しながら取り上げた。遺構の観察では、床の状態、壁の立ち上がり具合、炉の状態、柱穴等に注意をした。

平面実測は、小調査区設定の基準線をもとにした水系方眼地張測量で行った。また、土層断面・遺構断面の実測は、標高を測って水系を水平にセットし、その水系を基準にして実測した。

なお、遺構番号は、遺構の種類に分けてそれぞれ調査順に付した。土坑などは調査中に土坑以外の遺構と判明したときは、その遺構に新たな番号を付し、旧番号は欠番とした。

注

(1)水海道市史編さん委員会『水海道市史』(上巻) 昭和58年

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

奥山A遺跡は、関東鉄道常総線小絹駅から西へ約1.2kmの水海道市内守谷町宇奥山5,738の1ほか4筆に所在する。奥山C遺跡は、奥山A遺跡から北西へ約0.5kmの同市同町宇奥山5,565ほか4筆に所在する。西原遺跡は奥山A遺跡から北西へ1.1kmの同市同町宇西原4,900ほか7筆にそれぞれ所在する。

水海道市は、関東平野の中央部、茨城県の南西部に位置し、市域は東西約14km、南北22kmで、北を石下町、東を谷田部町、谷和原村、西を岩井市、南を守谷町および利根川を挟んで千葉県野田市と接している。南北に細長い市の東端を小貝川、中央を鬼怒川が蛇行しながら南流している。鬼怒川を境として東部は沖積低地を形成し、肥沃な水田地帯となっており、西部は、古河市方面から取手市方面へ延びる平坦な猿島台地で、谷津が樹枝状に入り込んでいる。台地は、平地林の点在する畑作地帯となっている。

水海道市は、中央部を取手市から下館市方面へ通じる国道294号線と、関東鉄道常総線が鬼怒川と並行して走り、これらに交差して、県道土浦野田線が東西に走る交通の要衝となっている。また、昭和56年に、常磐自動車道が谷田部インターチェンジまで開通し、昭和59年11月には関東鉄道常総線の取手駅と水海道駅の間が複線化され、ますます首都圏との交通の便がよくなり、昭和60年に開催された国際科学博覧会では、西の玄関口となっている。

当市は、稲作中心の田園都市であったが、首都50km圏内という地の利にあわせ最近の交通機関の発達により、台地部の人生郷、内守谷、坂子に工業団地が造成されて、変貌しようとしている。特に、水海道市南端の内守谷地区は、急激に開発の進んできている地域である。また、市街地は、江戸時代から明治時代にかけて鬼怒川水運の河岸として栄えた所で、隣接町村を商圏とする商業地域となっている。

内守谷地区は、鬼怒川右岸の標高18～20mほどの平坦な猿島台地で、この台地には、谷津が樹枝状に入り込んでいる。当地区東端を南流する鬼怒川は、江戸時代の初め、利根川へ直接入る現在の流路が開削されるまで、町の北東の端で東へ流れを変え、谷和原村寺畑を通過して小貝川に合流していた。そのため古代の内守谷地区周辺は、鬼怒川の氾濫原となっていて、谷津は湿地となっていたと考えられる。

奥山A遺跡は、内守谷工業団地から東へと延びる舌状台地の南側縁辺部にあり、遺跡の北東側に谷津が入り込んでいる。遺跡の標高は13～16mで、南東方向へなだらかに傾斜している。調査面積は、10,218㎡で、現況は畑である。



第 6 図 内守谷地区遺跡位置図

奥山C遺跡は、奥山A遺跡と同一台地の上に位置し、北西方向へ突き出た台地縁辺部に所在している。遺跡の標高は12～17mで、北西側と南西側は谷津に向かってなだらかに傾斜していて、水田との比高は約8mである。調査面積は8,642㎡で、現況は山林である。

西原遺跡は、奥山C遺跡北側の谷津を隔てた舌状台地の南西側縁辺部に位置している。遺跡の標高は18～20mで、南西側は谷津に向かってなだらかに傾斜し、水田との比高は8mである。調査面積は12,740㎡で、現況は山林である。

第2節 歴史的環境

水海道市内守谷町は、利根川水系の生活・文化圏に属し、縄文時代早期以降、人々の生活舞台となった所で、台地上には多くの遺跡が存在している。ここでは主な遺跡について時代を追って記載することにする。

氷河時代以降、海進と海退が繰り返されたが、縄文時代早期末から前期初頭にかけて、海進が頂点に達したといわれている。早期末の³⁴氷河の只塚である大日山只塚が、奥山C遺跡〈26〉より内陸部の水海道市大輪町に形成されているので、当時、内守谷地区の谷津は海になっていたと考えられる。この時期に属する遺跡としては、奥山C遺跡から北東へ600mほどの同一台地にある奥山下根遺跡〈29〉また、南東へ1.4kmほどにある谷和原村の西下宿遺跡〈19〉などがみられる。奥山下根遺跡からは、早期中葉から後葉に属する炉穴19基および土坑37基が検出され、撫糸系文、沈線文系、条痕文系の土器が出土している。西下宿遺跡からも、早期後葉に属する住居跡状遺構1基、炉穴24基が検出され、早期中葉から後葉にかけての土器が出土している⁽²⁾。

縄文時代前期中葉以降、海退が進み、前期後葉になると、鬼怒川流域には、釧水系の只塚は形成されなくなる。前期の遺跡としては、水海道市の北部に所在する大生郷遺跡、坂手日之王神遺跡〈11〉がみられ、坂手日之王神遺跡は発掘調査が行われておらず不明であるが、大生郷遺跡からは、黒浜期の住居跡が10軒検出されている⁽⁴⁾。縄文時代中期の遺跡としては、内守谷地区の鬼怒川対岸の同一台地に大谷津A遺跡〈20〉、大谷津B遺跡〈21〉、筒戸A遺跡〈22〉、筒戸B遺跡〈23〉が所在している。これらの遺跡からは阿玉台1b期から加曾利EⅣ期までの住居跡と遺物が多数検出されている。後期の遺跡としては、内守谷館ノ台遺跡〈12〉、菅生古谷遺跡〈8〉が所在している⁽⁹⁾。

弥生時代の遺跡は、現在のところ水海道市では確認されていないが、古墳時代になると遺跡数も多くなり、前期の遺跡としては、前述の奥山下根遺跡、岩井市上出島古墳等がある。奥山下根遺跡から住居跡が2軒検出されている。中期の遺跡としては、大生郷遺跡、谷和原村の海坂畑遺跡³⁰、大谷津A遺跡³¹、守谷町の仲原遺跡³⁴などがみられる。大生郷遺跡からは住居跡12軒と土坑1基

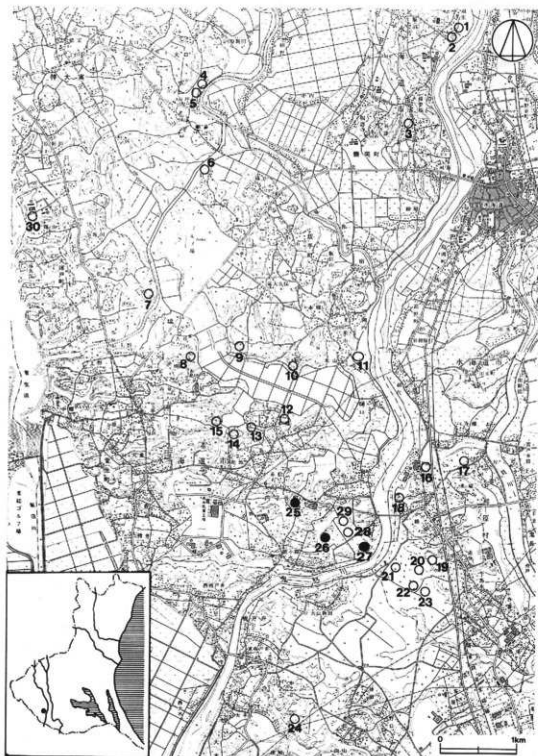
が検出され、出土した壺や甕、坏の中には西原遺跡出土のものに類似したものがある。⁰⁹大谷津A遺跡からは竪穴住居跡が3軒検出され、西原遺跡では出土していない埴や高坏も出土している。仲原遺跡からは竪穴住居跡が19軒検出され、この内15軒からは、双孔円板、勾玉、剣形品、白玉、紡錘車などの石製模造品が出土しており、祭祀的な色彩を帯びた集落と考えられている。後期の遺跡としては、大塚戸篠山古墳群<30>、七ツ塚古墳群<2>等がある。大塚戸篠山古墳群は、前方後円墳4基、円墳22基からなり、調査された古墳には、箱式石棺が納められ、この中から各種玉類、鉄錐等が検出されている。⁰⁶七ツ塚古墳群は、前方後円墳1基、円墳6基からなり、主体部は、埴に構築されたものが多く、粘土槌、竪穴式石室、箱式石棺と多様である。1号墳の下から古墳時代前期の住居跡1軒が検出されている。⁰⁷西原遺跡の北西1.1kmほどにある内守谷本郷遺跡<13>からは古墳時代中期から平安時代までの土師器、須恵器、羽口、鉄滓、砥石、木炭などが出土しており、鍛冶遺構の存在が考えられるが発掘調査は実施されていない。

律令制以後、内守谷町は下総国相馬郡に属した。承平5年(935年)にはじまった平将門の乱では、水海道市も表舞台となって荒廃し朝廷の統制から離れ、相馬郡には相馬御厨がおかれた。⁰⁸中世の城館跡としては、大塚戸城跡<7>、菅生城跡<15>がある。

※遺跡名の次の〈 〉内の数字は、第6図の箇中番号である。

表1 奥山A・奥山C・西原遺跡周辺の遺跡一覧表

箇中 番号	遺跡名	遺跡の時代					箇中 番号	遺跡名	遺跡の時代				
		先土器	縄文	弥生	古墳	その他			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
1	椎現塚古墳				○		16	茶畑古墳				○	
2	七ツ塚古墳群				○		17	京坂畑遺跡	○				
3	豊岡古墳				○		18	浅間山貝塚	○				
4	船戸遺跡					○	19	西下宿遺跡	○				
5	馬立遺跡				○		20	大谷津B遺跡	○				
6	坂手貝塚遺跡	○					21	大谷津A遺跡	○				
7	大塚戸城跡					○	22	筒戸A遺跡	○				
8	菅生古谷遺跡	○					23	筒戸B遺跡	○				
9	坂手御時遺跡				○		24	大木遺跡				○	
10	坂手交場貝塚	○					25	西原遺跡					当遺跡
11	坂手口之天神遺跡	○					26	奥山C遺跡					当遺跡
12	内守谷館ノ台遺跡	○					27	奥山A遺跡					当遺跡
13	内守谷本郷遺跡	○			○	○	28	奥山B遺跡	○				
14	内守谷向地遺跡	○			○		29	奥山下宿遺跡	○			○	
15	菅生土城跡					○	30	大塚戸篠山古墳群					○



第7図 奥山A・奥山C・西原遺跡周辺遺跡位置図

注

- (1)D 「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」奥山B遺跡・奥山下根遺跡 茨城県教育財団 昭和60年
- (2)茨城県教育財団『年報1』昭和57年 『年報3』昭和59年 『年報4』昭和60年
- (3)X000007 水海道市史編さん委員会『水海道市史』(上巻) 昭和58年
- (4)D9 「大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書」大生郷遺跡 茨城県教育財団 昭和56年
- (5)D3 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」大谷津A遺跡 茨城県教育財団 昭和60年
- (6) 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」大谷津B遺跡 茨城県教育財団 昭和58年
- (7) 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」筒戸A・B遺跡 茨城県教育財団 昭和59年
- (8) 茨城県史編集委員会監修 『茨城県史＝原始古代編』 茨城県 昭和60年

第3章 奥山A遺跡

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

調査の結果、当遺跡から古墳時代前期の竪穴住居跡3軒が検出され、住居跡からは、古墳時代前期五領式土器に弥生式土器が共伴して出土している。

3軒の住居跡は、標高16mほどの台地東側縁辺部南北42m、東西17mの範囲に検出され、大形の住居跡を中心に、小形の住居跡が北東に1軒、南東に1軒谷津に向かって弧状に配置されている。3軒の住居跡はともに隅九方形を呈し、床面中央部から北寄りに炉が設置されている。大形の2号住居跡は、1辺約6.5mで4か所の支柱穴と壁溝および東コーナーに貯蔵穴が検出されている。小形の1・3号住居跡は1辺4m前後で、柱穴と壁溝は検出されなかった。3軒とも炭化材が多量に出土しており、焼失家屋と思われる。

住居の床面および床面直上から弥生式土器の壺形土器・椀形土器・高環形土器、土師器の甕形土器・台付甕形土器・小形器台形土器・手捏ね土器、土玉および砥石などの石製品が出土している。

遺構確認時のグリッドの表土層からは、縄文時代早期野島式、同前期黒浜式・諸磯式、同中期五領ヶ台式・阿玉台式の土器片が少量出土している。これらの遺物に伴う遺構は検出されなかった。

2 遺構・遺物の記載方法

本書で使用した遺構・遺物の記載方法は、次のとおりである。

(1) 使用記号

①遺構	名称	住居跡	集石	炉穴・炉	土坑	溝	ピット
	記号	SI	SS	F	SK	SD	P

②遺物出土状況図使用記号

遺跡	記号	●	○	■	□	▲	△	★	☆
奥山A	壺形土器	甕形土器	壺形土器	高環形土器	器台形土器	手捏ね土器	土玉	石製品	
西原	環形土器	甕・壺形土器	壺形土器	椀形土器	手捏ね土器	その他の土器	土玉	石製品	

(2) 遺構・遺物実測図中の表示

 = 焼土化した床  = 焼土域  = 赤彩土器

(3) 土層の分類

当遺跡で検出された遺構の土層の色調は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著・日本

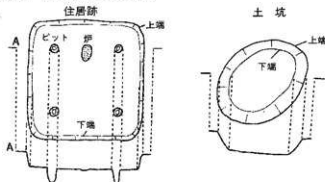
色研事業株式会社)を使用し、次のように分類した。また、土層中に含まれている含有物も分類し、記号化した。なお、攪乱をうけた部分は土層断面図の中に「K」と記入した。

番号	土色名	色相	明度/彩度	番号	土色名	色相	明度/彩度		
1	暗褐色	5 YR	$\frac{3}{4}$	5	黒色	7.5 YR	$\frac{3}{4}$		
		7.5 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$			6	暗赤褐色	2.5 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$
		10 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$					5 YR	$\frac{3}{2}$ $\frac{3}{2}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$
2	褐色	5 YR	$\frac{3}{4}$	7	赤褐色	7.5 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$		
		7.5 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$			2.5 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$		
		10 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$			5 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$		
3	にぶい褐色	7.5 YR	$\frac{3}{4}$	8	明赤褐色	5 YR	$\frac{3}{4}$		
4	黒褐色	5 YR	$\frac{3}{2}$	9	にぶい赤褐色	5 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$		
		7.5 YR	$\frac{3}{2}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$			10	赤色	7.5 YR	$\frac{3}{4}$
		10 YR	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{2}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{2}$					10 YR	$\frac{3}{4}$

記号	a	b	c	d	e	f	g	h
含有物	ローム粒子	ロームブロック	焼土粒子	焼土ブロック	炭化粒子	炭化物(材)	黒色土	粘土

*含有物の量については、少量(5~10%)検出されたものを基準とし、やや多く見られるもの(11~25%)については「 \cdot 」を、さらに多く認められるもの(26%以上)については「 \circ 」をアルファベットの右上に付加して表示した。(例…… a^{\cdot} 、 a°)。

(4)遺構実測図の作成方法及び掲載方法



- 住居跡等の遺構の図版は縮尺20分の1の原図をトレースし、版組み後、縮尺3分の1で掲載した。
- 住居跡からの出土遺物は、平面図に位置を器種別に記号化したドットで落とした。また、必要に応じて断面図に出土のレベルを落とした。
- 水糸レベルはm単位で記載した。

(5) 遺物実測図の作成方法及び掲載方法



- 土器の実測は、中心線を挟んで左2分の1に外面、右2分の1に内面及び断面を图示した。
- 土器片拓影図は、右側に断面を图示した。また、表裏二面を掲載したものについては断面を中央に配し、左側を外面、右側を内面とした。
- 遺物の版組は、3分の1あるいは2分の1に縮尺したものを掲載の基本とした。

(6) 表の見方について

住居跡一覧表

住居番号	位置	方向	平面形	規 模		壁 溝	炉 敷	柱 穴 数	貯 蔵 穴 数	火 災	出 土 遺 物	時 期
				長軸×短軸(m) 距離(m)	壁高(m)							

- 位置は、小調査区(グリッド)名で表示した。他の調査区にまたがる場合は、遺構の占める面積の割合が大きい小調査区名をもって表示した。
- 方向は、長軸(主軸)が座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを、角度で表示した。例えばN-20°-Eは、長軸(主軸)が北から東へ20度傾いていることを表している。
- 平面形は、掘り込み上端面の形状を記した。
- 規模の長軸×短軸は、平面形の上端面の計測値、壁高は残存壁高の計測値を記した。
- 柱穴数は、その住居跡に伴うと考えられる柱穴の数を記した。
- 火災は火災をおこしている住居跡のみ有と記した。
- 出土遺物は主な遺物名を記した。
- 時期は、出土遺物などから時期判定の可能な範囲で、土器型式によって記した。

土坑一覧表

番号	位置	方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					

○土坑・竪穴一覧表については、住居跡一覧表の項目には準じた。

・壁面は、底面からの立ち上がっている状態によって、次のとおりを表した。



○底面形状は、次のとおり分類し表記した。



出土遺物解説表

番号	器種	産出地	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
----	----	-----	-------	-------	----------	----

○番号は、実測図中の番号と同じ番号を記した。

○法量は、口径-A、器高-B、底径-Cとし、単位はcmである。なお、()は推定値である。

○胎土・色調・焼成の欄は、上から胎土、色調、焼成の順で記した。焼成については、良好、普通、不良に分類し、焼き締まって硬いものは良好、焼成があまりく手でこすると器面が剥落するものを不良とし、その中間のものを普通とした。色調については、前節の上層の分類と同じ土色帳を使用して記した。土器が焼成以後に焼かれていた時は二次焼成と記し、更に土器使用後に焼かれていた時は三次焼成と記した。

○備考は、一段目に完存率と接合点数を記した。二段目に出土位置を記し、覆土から出土した時はX、床面から出土した時はYとした。三・四段目に赤彩や付着物について記した。

なお、この表で解説できない遺物については、本文で解説した。

石器類一覧表

番号	器種	出土地点	全長cm	幅cm	厚cm	重量(g)	石質	備考
----	----	------	------	-----	-----	-------	----	----

○出土地点は、出土した遺構あるいは小調査区名を記した。

○全長や厚さは、それぞれの最大値を記し、()を付した数値は欠損石器の実測値である。

○備考には、特徴等を記した。

(7) 写真図版について

○遺物写真の右下の番号は、本文中における遺物の番号であり、2-1とは第2号住居跡出土遺物番号1の遺物を表わしている。

第2節 調査経過

奥山A遺跡は、昭和58年12月に調査面積の8分の1に当たる90グリッドの表土を除去し、遺構を確認したところ、C3d3区に竪穴住居跡と思われる落ち込み1か所が検出された。他のグリッドからは、住居跡と思われる落ち込みが検出されず、出土遺物も少量であることから当遺跡は遺構の薄いことが予想された。その後、奥山下根遺跡の調査を先行するため、調査を一時中断した。昭和59年4月に調査を再開し、6月12日に一切の調査を完了した。以下、発掘調査経過の概要について半月単位に記述する。

4月前半 現場事務所を、谷和原村小畑から水海道市内守谷町西原へ移転し、発掘器材などの整理および調査の諸準備を行った。

4月後半 グリッド発掘を調査面積の4分の1まで広げ、C3区から周囲へ広げるようにグリッド発掘を続けた結果、新たにC3i2区とD3e4区に住居跡と思われる落ち込みを検出した。

5月前半 グリッド発掘による遺構確認作業は終了しなかったが、遺構確認作業と並行して、検出された3か所の落ち込みの調査を開始することにした。C3d3区のまわりの表土を除去し、住居跡のプランを検出、これを1号住居跡と命名した。グリッド発掘はB2・B3・C2・C3・D2・D3区を実施した。

5月後半 15日、1号住居跡の確認面までの土層の実測を行い、掘り込みの準備をした。16日、1号住居跡の掘り込みを開始した。本日、水海道市立菅生小学校6年生が遺跡見学に訪れた。23日、C3i2区およびD3e4区のまわりの表土を除去し、それぞれ住居跡のプランを検出し、前者を2号住居跡、後者を3号住居跡と命名した。25日、1号住居跡の平面図を作成して調査を終了し、2号住居跡の掘り込みを開始した。29日、3号住居跡の掘り込みを開始した。グリッド発掘はD2・D3・D4区を実施した。

6月前半 1日、3号住居跡の平面図を作成し、調査を終了した。2号住居跡は、8日に平面図を作成し、調査を終了した。遺構確認のためのグリッド発掘をD3・D4区と進めたが、新たに遺構が検出されず、出土遺物も少量で遺構につながるような出土状況ではなかった。このため4日、調査面積の4分の1に当たる160グリッドを表土除去した段階で、グリッド発掘による遺構確認作業を終了した。12日、遺構の全景写真を撮影して奥山A遺跡の調査を完了した。なお、遺跡の航空写真撮影は10月24日に実施した。

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第1号住居跡（第9図）

本跡は、台地の北東端にあたるC3f4区を中心に確認された竪穴住居跡である。本跡の北東側は谷津へ傾斜しており、南西側11mには第2号住居跡が隣接している。

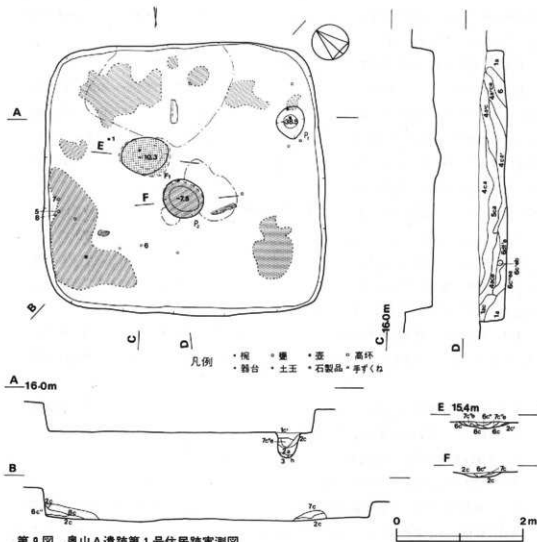
平面形は、長軸4.4m・短軸4.2mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-41°-Wを指している。本跡は、ローム層を60cm掘り込んで構築され、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は検出されていない。床面は平坦であるが、北東壁側から中央部にかけて硬く踏み固められごつごつとしている。炉は、床の中央部からやや北西壁寄りに位置し、平面形が長径74cm・短径62cmの楕円形を呈し、皿状に10cmほど掘りくぼめられている。炉の中には焼土が8cmほど堆積し、炉床が赤色に硬く焼けている。

ピットは2か所検出されているが、柱穴と考えられるものは屋外も含め検出されていない。P1は南東壁の東コーナー寄りに位置し、平面形が長径50cm・短径42cmの楕円形で、深さが39cmで、底面は皿状を呈している。P1の覆土の上層は焼土を多量に含み、底面から青灰色粘土ブロックが出土している。P1は貯蔵穴と思われるが明確にすることはできなかった。P2は炉の南側15cmのところ位置し、平面形が長径65cm・短径57cmの楕円形を呈し、深さが8cmほどで、底面が皿状になっている。このピットは覆土が焼土であり、炉からかき出した灰を一時ためるのに使用されたものと思われる。

本跡の覆土は、焼土粒子、炭化粒子を含む黒褐色土を主体とし、自然堆積の状況を示している。炭化材が床面の中央部へ向いて10数点検出されており、大きな炭化材は直径12cm、長さ40cmほどである。炭化材の出土状況から本跡は火災に遭ったものと思われる。壁ぎわから中央部へ傾斜して堆積した焼土域が、コーナー部など7か所に検出されている。北コーナー部の焼土域は、長径1.8m、短径1mの規模で、厚さ20cmの焼土が覆土中位から床面直上へ傾斜して堆積している。これらの焼土は住居の焼失によるものか、投棄されたものかは判然としない。

遺物は、縄文土器片18点、弥生式土器片13点、土師器片42点、石及び石器が6点出土している。弥生式土器は壺形土器と高環形土器で、土師器は壺形土器、甕形土器、手捏ね土器の各器種が見られる。土器は小片が多く、図化できたのは、壺形土器1点、台付甕形土器の台部3点である。弥生式土器と土師器は床面もしくは床面直上からの出土で、出土状況に差異が認められず、いずれも本跡に伴う遺物と思われる。

縄文土器片は小片で著しく磨減していて、覆土中位以上からの出土であるので、本跡の埋没時に流れ込んだものと思われる。



第1号住居跡出土遺物 (第10図 1~8)

弥生式土器 壺形土器と高環形土器が出土し、壺形土器の口縁部片は3点出土している。

1は、西コーナー部焼土の中から出土した壺形土器の口縁部片である。口縁部は複合口縁で、折り返し部の外面に細かな単節縄文が羽状に施されている。口唇部にも縄文が施されている。縄文の施された口唇部と折り返し部の外面を除きヘラミガキ調整が施され、赤彩されている。胎土は細砂を含み、焼成は良好である。

2は、覆土から出土した壺形土器の口縁部片である。口縁部は複合口縁で、折り返し部の外面に横位のナデ調整、他の面にヘラミガキ調整が施されている。折り返し部下端に板の木口を押圧したキザミ目が施されている。折り返し部の外面を除き、赤彩されている。胎土は細砂を含み、

焼成は良好である。図示できなかったもう1片の口縁部片は無文の単口縁である。高坏形上器は小片であり図示できなかった。

〔七師器〕 変形土器、甕形土器などが出土した。

4は甕形土器で、炉の北側床面から16片に割れた状態で出土し、口縁部から胴部上半にかけて完形に復元された。口縁部から胴部上半にかけての外面に、縦位のハケ目調整後、縦位の幅の伏いヘラナデ調整が施されている。口唇部と口縁部の上端に弱いヨコナデ調整が施されている。内面は口縁部に、横位または斜位のヘラナデ調整、胴部にナデ調整が施されている。胎土は砂を含み、焼成は良好である。色調は橙色で、口径は、14.1cmである。

台付甕形土器の台部が3点(5・7・8)、北西壁ぎわの焼土域の中からかたまっても出土した。3点とも台部が八の字に広がり、端部は粘土が内側へはみ出した雑なつくりである。

5は、外面の上部はヘラ削り、下部はハケ目調整後、横位のナデ調整が施されている。内面はヘラナデ調整が施されている。胎土は細砂・スコリアを含み、焼成は良好である。色調はふい橙色で、底径は9.3cm、現存高は4.9cmである。

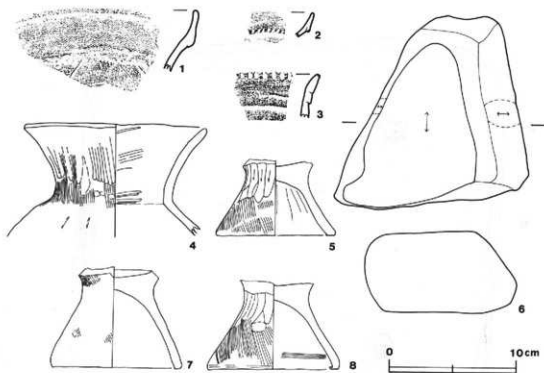
7は、外面にハケ目調整後ナデ調整、内面にナデ調整後端部のみ横ナデ調整が施されている。上部はかなり強く二次焼成を受けている。胎土は、礫・細砂・スコリアを含み、焼成は不良である。

8は、外面の上部はヘラ削り、下部はハケ目調整が施されている。内側は、ヘラナデ調整後、端部に横位のハケ目調整が施されている。上部は二次焼成を受けている。胎土は砂・スコリアを含み、焼成は普通である。底径は10.3cm、現存高は7.0cmである。

甕形土器は口縁部片が5点出土しているが、小片なので拓影図で図示した。

3は、覆土から出土した甕形土器の口縁部片である。口唇部にキザミ目が施され、口縁部外面に明瞭な輪積み痕が認められる。外面はナデ調整、内面はハケ目調整が施されている。色調は外面が黒褐色、内面がふい褐色である。外面には、煤が付着している。胎土は砂を含み、焼成は良好である。手押お土器は全体の器形を窺えるものが出土していないが、2号住居跡出土の同形の土器に類似している。

6は床面から出土した礫石で、大きな礫の破片を利用したものである。表面は滑らかで、側縁には縦方向の凹みがあって、やや滑らかになっている。石質は砂岩で、縦15.5cm、横15.3cm、厚さ6.4cmである。重さは1,700gである。石器類は、この他に、雲母片岩の縦13cm、横12cm、厚さ4cm、重さ1,300gの台形状をした石が出土している。



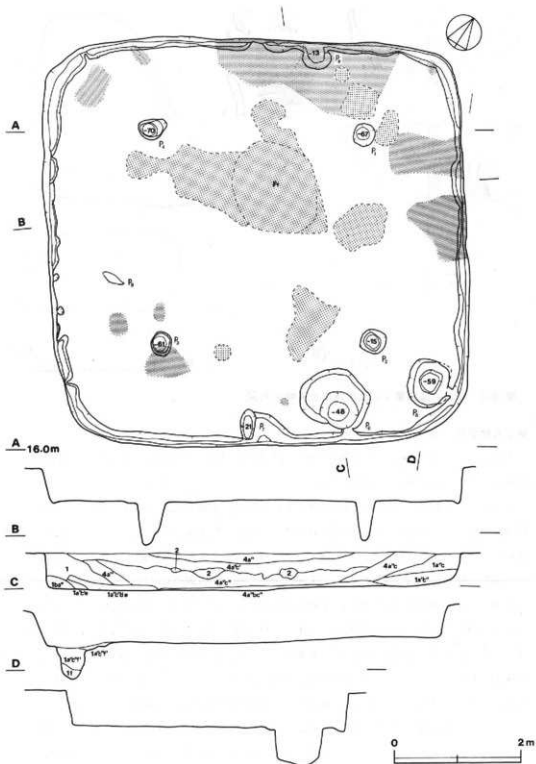
第10図 奥山A遺跡第1号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡 (第11図)

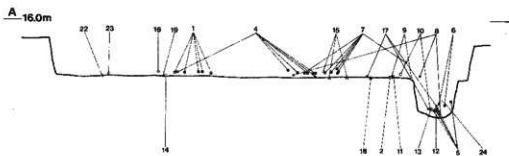
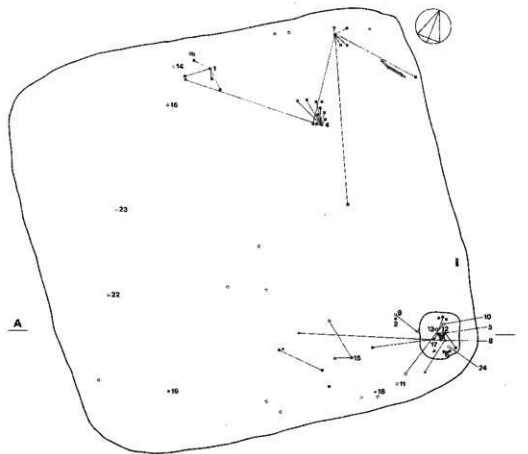
本跡は、C311区を中心に確認された竪穴住居跡で、本跡の北東側11mに第1号住居跡が、南東側20mに第3号住居跡が隣接している。

平面形は、長軸6.6m・短軸6.4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-34°-Wを指している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は54cmほどである。壁溝は、幅10~15cm・深さ4~6cmと小規模でしかも断続的に検出されている。壁溝の覆土の色は床面とほぼ同じ褐色であるが、軟らかくて微量の炭化粒子が含まれている。床面は平坦で硬く踏み固められている。炉は地床炉で床面の中央部から北西壁寄りに位置し、平面形が長径1.6m・短径1.3mの楕円形状を呈し、炉床が床面とほぼ同一レベルの地床炉である。炉床は赤色に硬く焼けている。炉から西へ1.7m、北へ0.7mの二方向に床面が焼け、また、炉の北東側に3か所、東側に1か所、南側に2か所、赤く焼けた床面が検出されている。これら焼土化した床面は、炉とくらべると焼け具合が弱いもので、一時的に炉として使用されたものか、住居が焼失する時に焼けたものか判然としない。

ピットは9か所検出され、P1・P2・P3・P4の4か所は、床面の対角線上にあって、深さも61~70cmと深く、底面が平坦に固められていることから、支柱穴と考えられる。支柱穴は、直径が31~34cm、底面径が20cmでほぼ垂直に掘られている。P5は東コーナー壁ぎわに検出された貯蔵



第11図 奥山A遺跡第2号住居跡実測図



凡例

- 穴
- 礎
- 礎
- 高坪
- 基台
- 土玉
- 石製品
- 手付(柱)



第12図 奥山A遺跡第2号住居跡遺物出土状況図

穴である。開口部は縦74cm、横60cm、底面は縦67cm、横53cmの隅丸方形を呈し、深さは48cmで東側がオーバーハングしている。また、底面中央部は長径36cm、短径30cmの楕円形状に更に11cm掘り下げられている。また、貯蔵穴の東壁の上部は壁溝とつながっている。P6は南東壁ぎわのP5西側に検出されたスリバチ状のビットである。直径60cm、深さ48cmで、底面は軟弱であり、用途は不明である。P7は、南東壁中央壁ぎわに検出された楕円形をしたビットである。長径46cm、短径20cm、深さ21cmで、底面は軟弱であり、用途は不明である。P8は、北西壁ぎわに検出された楕円形をしたビットである。長径45cm、短径38cm、深さ13cmで、壁溝とつながっており、用途は不明である。P9は、台石(22)を取り除いたところ、検出されたビットで、長径35cm、短径12cm、深さ6cmに床をV字状に掘り込んでいる。この台石を固定するために掘られたものと思われる。

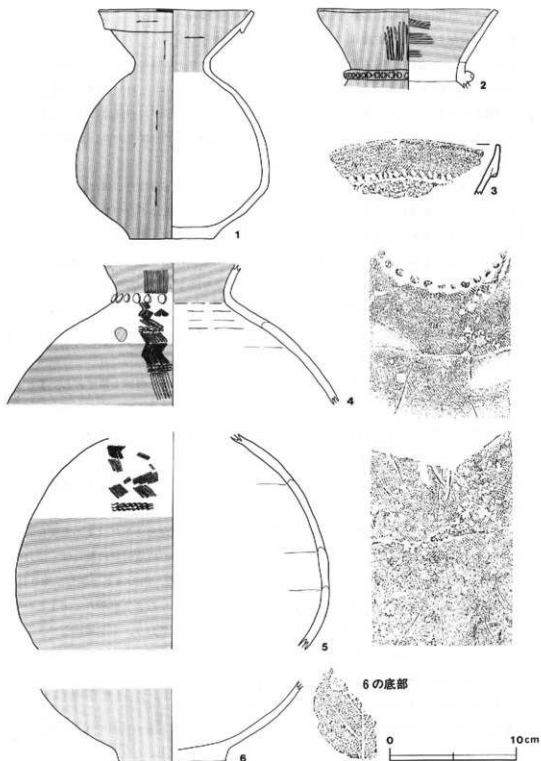
本跡の覆土は、黒褐色土が主体であるが、含有物により大きく4層に分けられ、自然堆積の状況を示している。2層から下の層には焼土粒子が多く含まれており、最下層の4層は8cmほどの厚さで、特に多くの焼土粒子を含んでいる。床面直上には長さ50cmほどの炭化材が検出されている。本跡は、炭化材の上上状況や、遺物の三次焼成を受けている様子から火災に遭ったものと思われる。床面の北西および北東壁ぎわには、焼土が厚く堆積しており、床面との間に8cmの厚さの暗褐色土を挟んで、焼土が20cmほどの厚さで、壁から中央部へ傾斜している。これらの焼土は住居の焼失によるものか、壁ぎわが少し埋もれてから投棄されたものかは判断し難い。

遺物は、縄文式土器片21点、弥生式土器片392点、土師器片188点、土玉2点、石製品及び螺11点が出土している。弥生式土器は、土師器に比べ磨減が著しく、小片に割れて出土しており、土師器より長期にわたって使用されていたことが窺える。弥生式土器は高環形土器、碗形土器が、土師器は壺形土器、台付壺形土器、手捏ね土器、小形器台形土器の各器種がみられる。これらの遺物は、北の北側と貯蔵穴内および貯蔵穴の西側に集中して出土している。貯蔵穴の中から、台部を欠損した台付壺形土器(13)が、胴部下半欠損の壺形土器の中に納まった状態で出土している。弥生式土器と土師器は、ともに床面もしくは床面直上からの出土で、出土状況に差異が認められず、いずれも本跡に伴うものと思われる。

第2号住居跡出土遺物(第13・14・15図 1~24)

弥生式土器 壺形土器・碗形土器・高環形土器が出土し、このうち壺形土器は、口縁部片や底部片も1点と数えると26点となり、本跡からの出土遺物では一番個体数が多い。

1は、北西壁ぎわ床面から31片に割れて出土し、ほぼ完形に復元できた壺形土器である。この壺形土器は無文の複合口縁を有し、胴部は下ぶくれの球形を呈している。外面と口縁部内面はヘラミガキ調整、口唇部は横ナデ調整、胴部内面は丁寧なナデ調整が施されている。内・外面は二次焼成を受け、斑点状に剝離し、特に内面が強く剝離している。外面と口縁部の内面に赤彩が施されている。胎土は砂・スコリアを含み、焼成は普通である。色調は外面が赤色、内面がこぶい



第13図 奥山A遺跡第2号住居跡出土遺物実測図(1)

褐色である。口径は11.9cm、器高は18.1cm、底径は6.5cmである。

2は、口縁部を上にして貯蔵穴の西側床面から胴部が押しつぶされた状態で出土した壺形土器である。胴部はぼろぼろにもろくなって復元できなかった。口縁部は半口縁で大きく外傾している。頸部に断面三角形の太い隆帯が巡っていて、隆帯上にはキザミ目が等間隔に施されている。口縁部の外面にはヘラミガキ調整、内面には粗いハケ目調整、口幹部には横ナデ調整が施されている。内・外面には赤彩が施されている。胎土は細砂・スコリアを含み、焼成は不良である。口径は13.9cmである。

3は、貯蔵穴内から出土した壺形土器の口縁部片である。口縁部は複合口縁で、折り返し部の下端にキザミ目が施されている。胎土は礫・砂を多量に含み、焼成は不良である。

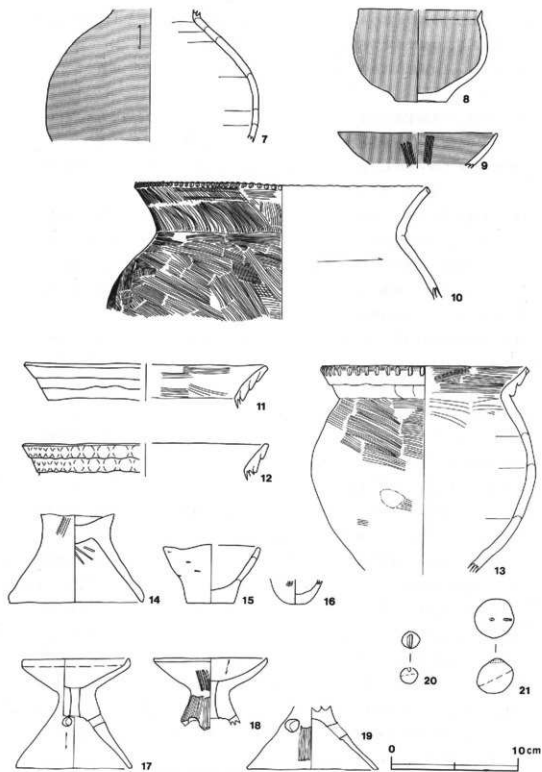
4は、炉の東側床面から13片に割れて出土した壺形土器で、胴部上半だけが復元できた。胴部上部に円形浮文が1条、結節文が2条巡っていて、これらの間にRL、LRの網かな縄文が交互に施文されて羽状になっている。この文様帯の中心に赤色の円形状斑点が等間隔に施されている。外面と口縁部内面はヘラミガキ調整、胴部内面はナデ調整が施されている。外面と口縁部内面は赤彩され、胴部内面の色調は浅黄褐色である。内・外面は斑点状に剥離している。胎土は礫・砂・スコリアを含み、焼成は不良である。

5は、貯蔵穴内から出土し、14片を接合して胴部上半の復元できた壺形土器である。5と6は同一個体で底部には6がつくと思われる。5の文様は4に類似しているが、4より簡略化されている。胴部の上部外面は、LR、RLの縄文が羽状に施文され、下端に結節文が巡っている。胴部の下部外面はヘラミガキ調整が施され、この上を赤彩されている。色調は外面の文様帯が浅黄褐色、内面が褐色である。内・外面は斑点状に剥離し、内面には煤が付着している。6の底部に木炭痕が認められる。胎土は砂・スコリアを含み、焼成は不良である。

7は1に類似した壺形土器で、12点を接合して胴部上半のみが復元できた。7の主要な破片は東コーナー部床面から出土し、接合できた破片は、この地点を中心に放射状に散らばっており、遠いもので約2.7m離れたものもある。胴部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施されている。内面に輪積み痕が認められる。主要な破片が出土した位置から2.7m離れて出土した破片は、三次焼成を受けていないのに対し、他の破片は三次焼成されており、7が破砕してから火を受けたことが窺える。胴部外面は赤彩され、内面の色調はにぶい褐色である。胎土は細砂・スコリアを含み、焼成は普通である。

椀形土器の出土は8の1点だけである。

8は、口縁部から底部までほぼ2分の1復元できた椀形土器である。接合できた破片は10片で、貯蔵穴内から大部分が出土し、そこから2mほど離れた床面から出土したものが接合している。口縁部は短く直立し、口幹部は内そぎを呈している。内・外面は赤彩されているが、二次焼成と



第14图 奥山A遺跡第2号住居跡出土遺物実測図(2)

磨滅のため部分的に赤彩が認められているだけである。色調は淡橙色で、胎土は細砂を含み、焼成は普通である。口径は推定で9.7cm、器高は7.3cm、底径は4.1cmである。

高環形土器は、口縁部片16点と少量の台部片が出土しているが、実測図に掲載できたのは、9だけである。

9は、貯蔵穴の北側床面から2の甕形土器にまじって出土した高環形土器である。内・外面ともヘラミガキが施され、赤彩されている。胎土は細砂を含み、焼成は普通である。

土師器 甕形土器・手捏ね土器・小形器台形土器などが出土し、甕形土器は、破片が122点と甕形土器について多いが、多くは小片で出土している。

10は、貯蔵穴内から出土した口縁部から胴部上半にかけての甕形土器で、胴下半部は出土しなかった。口唇部には棒状施工具によるキザミ目、外面にハケ目調整、内面にナデ調整が施されている。ハケ目調整には重なりが多い。頸部外面に輪積み痕が認められる。口縁部から胴部上半までの3分の2ほどが二次焼成を受けている。色調は外面が極暗褐色、内面が淡黄橙色である。胎土は砂・スコリアを含み、焼成は良好である。

11は、甕形土器の口縁部片で、外面に輪積み痕が3段明瞭に認められる。外面に弱い横ナデ調整、内面にハケ目調整が施されている。内面に煤が付着している。色調は橙色で、胎土は砂と多くのスコリアを含み、焼成は不良である。口径は推定で19.0cmである。

12は、甕形土器の口縁部片である。口縁部外面に明瞭な輪積み痕が2段認められ、この外面は、指圧されている。内・外面は強く斑点状に剥離され、内面に煤が付着している。色調は橙色である。胎土は大きめの砂を多く含み、焼成は普通である。口径は推定で19.8cmである。

台付甕形土器は、台部欠損の13と台部のみの14、このほか台部片が1点出土している。

13は、貯蔵穴内から出土した台部欠損の台付甕形土器で、13に接合する台部はみあたらなかった。口縁部の外面には、明瞭な輪積み痕が2段残っていて、この外面は軽く指圧されている。口唇部にはハケ目調整後、等間隔にキザミ目が施されている。口縁部外面は軽く横ナデ調整、同内面はハケ目調整が施されている。胴部の外面はハケ目調整後、下部のみヘラナデ調整、同内面にヘラナデ調整が施されている。胴部の下部は二次焼成され、胴部内面には煮汁が全面に付着し、米の炭化した痕跡も認められる。台部との断面はやや磨滅している。色調はにぶい褐色で、胎土は砂を含み、焼成は良好である。口径は16.1cm、現存する器高は16.1cmである。

14は、台部のみ現存の台付甕形土器である。台部は八の字に広がっていて、内部に絞り痕が残っている。外面はハケ目調整後ナデ調整、下端に横ナデ調整が施されている。内面にヘラナデ調整と、同下端に弱い横ナデ調整が施されている。胴部との断面は磨滅している。色調はにぶい橙色で、胎土は砂を含み、焼成は良好である。

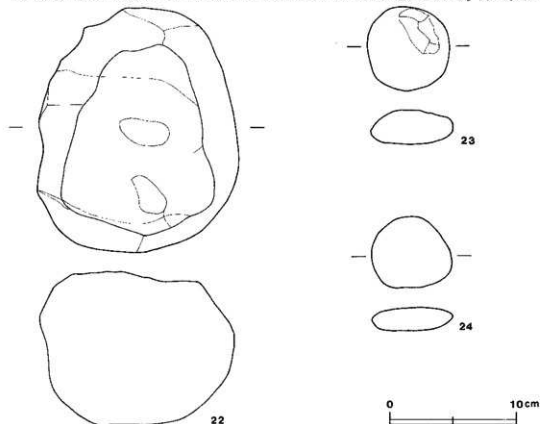
手捏ね土器は15と16の2個出土している。

15は、北側床面に出土した4片を接合したところ、口縁部から底部までの2分の1が復元できた手捏ね土器である。体部から口縁部まで外傾して立ち上がり、内・外面は凸門で、ナデ調整が施されている。二次焼成を受け、色調はにぶい橙色である。胎土は細砂・スコリアを含み、焼成は普通である。口径は推定で7.7cm、器高は4.6cm、底径は推定で3.8cmである。

16は上半分欠損の手捏ね土器で、北東壁付近の床面から出土している。底部は楕円形で、底径は18~20cmである。外面に縦位のハケ目調整がわずかに施されている。色調はにぶい橙色で、胎土は砂を含み、焼成は良好である。

小形器台形土器は9個出土し、脚部にあけられた貫通孔は、側面に3個だけのものと、他に中央孔のあいているものがある。

17は、貯蔵穴の覆土と、貯蔵穴の西側床面から出土した5片を接合して完形に復元できた小形器台形土器である。受部は外傾して立ち上がり、上位でわずかに直立している。脚部は円錐形で端部がやや尖る。孔は脚部の中央に1個、側面に3個貫通している。孔の直径は、外側は7mm、中ほどで6mmである。受部外面は、ハケ目調整後ナデ調整、同内面はヘラナデ調整が施されている。脚部外面は、幅の狭いヘラナデ調整、同内面にはヘラナデ調整が施されている。内・外面に



第15図 奥山A遺跡第2号住居跡出土遺物実測図(3)

少量煤が付着している。色調は橙色で、胎土は多量の砂を含み、焼成は不良である。口径は8.2cmで器高は8.6cm、底径は8.9cmである。

18は、P6の覆土上位に出土した小形器台形土器で、脚部の下半が欠損している。受部は内埴ぎみに立ち上がる。孔は脚部の中央に1個、側面に3個貫通している。中央孔は外側で10mm、中ほどで7mmである。外面と受部の内面に縦位のヘラミガキが施されている。断面部は少し磨滅している。色調は橙色で、胎土は細砂・スコリアを含み、焼成は良好である。口径は8.8cmである。

19は、西コーナー部付近の床面から出土した小形器台形土器で、受部が欠損している。脚部はハの字に広がり、端部に面を有する。孔は側面に3個、直径14mmの大ききで貫通している。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整後下部に横ナデ調整が施されている。断面部はやや磨滅している。色調はにぶい橙色で、胎土は砂を含み、焼成は普通である。底径は10.1cmである。

土玉は覆土から大小2点出土している。いずれもソロバン玉状で、縁の中央部に孔が貫通している。外面はナデ調整が施されている。また、いずれも色調はにぶい橙色で、胎土は砂・スコリアを含み、焼成は良好である。

20の大きさは、長径1.9cm、短径1.2cmで、孔径は1.5mmで端が欠損している。外面が赤彩されている。

21の大きさは、長径3.2cm、短径2.0cmで、孔径は2mmである。

石器類は、敲石2点、台石3点、チャートの剥片1点、軽石1点とその他に河原石5点が出土している。

22は、P9に据えられた台石である。表面は凸凹で、敲打のためと思われる剝離痕が認められる。大きさは19.4cm×15.8cm×12.3cmで、重量は6,150gである。石質は斑柵岩である。

23は、台石の22が据えられていた地点から北へ1.3mの床面から出土した敲石である。扁平な河原石を利用したもので、表面と裏面の中央部と側縁の全周に敲打のためと思われる痕跡が認められる。大きさは6.8cm×6.5cm×2.6cmで、重量は159gである。石質は硬砂岩である。

24は、貯蔵穴内から出土した敲石である。扁平な河原石を利用したもので、表面に同一方向の擦痕が、側縁に敲打痕が認められる。大きさは、6.5cm×5.9cm×1.7cmで、重量は82gである。石質は硬砂岩である。

第3号住居跡（第16図）

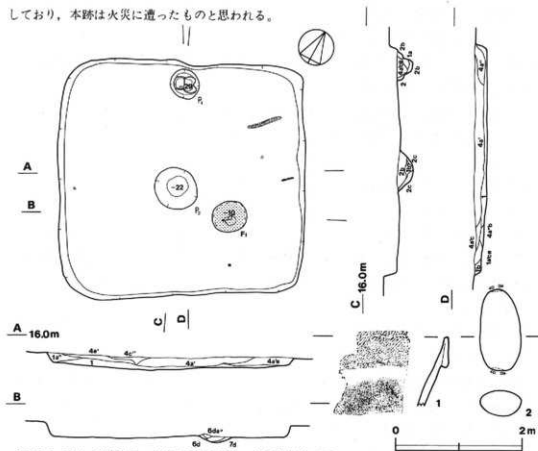
本跡は、D3e4区を中心に確認された竪穴住居跡で、本跡の北西20mに第2号住居跡が隣接している。

平面形は、長軸3.9m・短軸3.7mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-42°-Wを指している。壁はやや外傾ぎみに立ち上がっていて、壁高が15-24cmと低く、軟らかである。床面は平坦であ

るが、黒色土が斑点状に混じっていて全体的に軟らかである。炉は、地床炉で床の中央部から北東寄りに位置し、平面形が短径48cm・長径55cmの楕円形を呈している。焼土および焼土ブロックが10cmの厚さに堆積しているが、底面には焼けた部分が認められなかったので、炉は攪乱を受けたものと思われる。

ピットは2か所検出されているが、柱穴と考えられるものは住居の屋外も含め検出されていない。P1は北西壁ぎわに検出され、平面形が直径45cmの円形で深さが22~29cmと底面が凸凹になっている。覆土から壺形土器の胴片が出土している。覆土に攪乱と思えるところもあり、用途不明のピットである。P2は、床面のほぼ中央に検出され、平面形が直径70cmの円形で、深さは22cmで断面形はスリパチ状を呈している。底面はやや軟弱であり、覆土下層に焼土粒子が微量含まれている。覆土に攪乱を受けたと思えるところもあり、P1同様用途不明のピットである。

本跡の覆土は大きく2層に分けられ、上層は黒褐色土で15cmほどの厚さに堆積し、下層は暗褐色土で5~10cmの厚さに堆積している。覆土は自然堆積の状況を示しているが、部分的に木の根により攪乱されている。焼土はあまり検出されていないが、床面に長さ60cmほどの炭化材が出土しており、本跡は火災に遭ったものと思われる。



第16図 奥山A遺跡第3号住居跡実測図・出土遺物実測図

遺物は、縄文式土器片14点、弥生式土器片29点、土師器片15点、石2点出土している。弥生式土器は壺形土器、高環形土器、椀形土器で、土師器は甕形土器が見られる。いずれも実測のできないほどの小片である。弥生式土器と土師器は、ともに床面もしくは床面直上からの出土で、出土状況に差異が認められず、いずれも本跡に伴うものと思われる。縄文土器はすべてすりへった小片で、覆土上層からの出土であり、本跡が埋没時に流れ込んだものと思われる。

第3号住居跡出土遺物（第16図 1・2）

1は、弥生式土器の壺形土器口縁部片である。複合口縁の器面と、口唇部にRLの細かな縄文が施文されていて、内・外面は赤彩されている。

2は、覆土から出土した敲石である。長軸の両端部に敲打痕が認められる。大きさは、6.5cm×3.2cm×2.0cmで、重量は67g、石質は砂岩である。

2 遺構外出土の遺物

表面採集とグリッド発掘中に出土した遺物は、縄文土器片333点、弥生式土器および土師器片381点、土製品3点、石器類3点、礫48点である。縄文土器は、細片が多く、量的に少ないが、縄文時代早期野鳥式、同前期黒浜式、諸磯式、同中期五領ヶ台式、阿玉台式の土器片が出土している。その中で、黒浜式、諸磯式、五領ヶ台式の土器が比較的多く出土している。弥生式土器および土師器は、住居跡内出土遺物と同型式のものが多いと、そのうち遺存状態のよい3点のみ実測図に掲載した。土製品は、縄文土器片を利用した土器片鏃である。石器類は、磨石1点、敲石2点である。礫は、大部分が河原石を利用したもので、割れたものが多い。

(1) 縄文土器

縄文土器片は、文様や時期等から次のように分類した。

1群の土器（第17図 1）

縄文時代早期の土器で、1点だけ出土している。1は口縁部が波状を呈し、口唇部は平坦で、斜位に条状文が施されている。外面に縦位と横位の微隆起線文が施されている。胎土は細砂を含み、色調は浅黄褐色で、焼成は普通である。野鳥式に比定されるものと思われる。

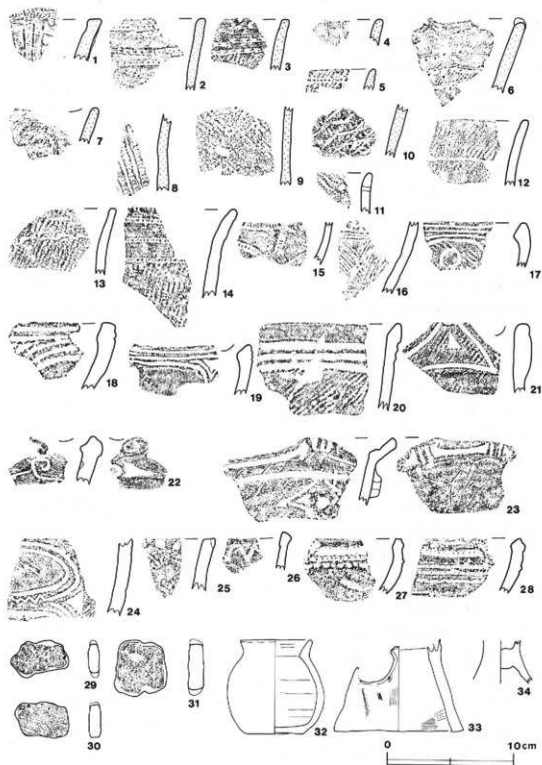
2群の土器

縄文時代前期の土器を本群とした。

1類（第17図 2～10）

文様が半截竹管による爪形文や刺突文、沈線文を主とした土器を本類とした。色調は橙色、暗褐色で断面部は黒色のものが多く、胎土は多量の繊維と細砂を含んでいる。焼成は普通である。本類は黒浜式に比定されるものと思われる。

2・3は、口縁部片が無文地に半截竹管による刺突文が横位に施されている。その下には縄文



第17图 奥山A遺跡遺構外出土土器・土製品拓影圖・土器実測図

が施文されている。4は、口縁部片で上端から斜位に半截竹管による沈線文が施文されている。5は、口縁部片で縄文地に半截竹管による爪形文が横位に施文されている。6は、口縁部片で口唇部に突起がつく。縄文地に半截竹管による沈線文が横位に施され、その沈線文にそって半截竹管による刺突文が施されている。7は、口縁部片で付加縄文が斜位に施されている。8は胴部片で、付加縄文が施され、胎土に砂が特に多く含まれている。9は、胴部片で粗い縄文地に円形竹管文と半截竹管による爪形文が施されている。内面はていねいにナデ調整が施されている。10は、胴部片で不整撫糸文が施されている。

2類 (第17図 11~16)

ゆるく外反する口縁と、文様に爪形文を主に施す土器を本類とした。色調はにぶい橙色が多く、胎土は細砂を多量に含むものが多い。焼成は普通である。本類は諸磯式に比定されるものと思われる。

11~13は、口縁部片で縄文を唯一の文様とするものであり、12には補修孔がみられる。13は、縄文地に結節文が横位に巡っている。14は、口縁部片で爪形文が無文地に3条横位に巡っており、その下には縄文が縦位に施文されている。15は胴部片で、爪形文を幾何学的に施している。12~15は、諸磯A式に比定されるものと思われる。16は、胴部片で横位の沈線間に沈線が弧状に施文されている。諸磯C式に比定されるものと思われる。

3群の土器

縄文時代中期の土器を本群とした。

1類 (第17図 17~25)

口縁部内面の上端が肥厚し強い稜をもつもの、文様帯に三角形の沈刻や沈線文を主体とするものを本類とした。色調はにぶい橙色が多く、胎土は礫、砂、雲母を含んでいる。焼成は良好なものが多い。本類は五領ヶ台式に比定されるものと思われる。

17は口縁部片で、沈線が横位に2条巡り、その下に2本単位の沈線で楕円形区画文が描かれている。楕円形区画内には縄文が充填され、その中央部に円形文が沈線で描かれ、内部は磨り消されている。18は口縁部片で、半截竹管による沈線文が横位に巡り、その下に沈線による曲線文が描かれている。19は緩い波状口縁で、上端に沈線が3条平行に巡っていて、上から3本目の沈線がV字状に落ち込み、その中央部に三角形の沈刻文が加えられている。20は口縁部片で、沈線が3条横位に巡り、その下に縄文が施されている。21は波状口縁で、沈線による三角形区画内に縄文が施され、中心部に三角形の沈刻文が施されている。22は波状口縁で、口唇部に突起を有し、上に浅いキザミ目か施されている。突起は内面に渦巻き、外面に隆帯による曲線文が施されている。口縁部外面は沈線による渦巻き文が施されている。拓影図の沈線には、刺突文が施されている。内面の上端は内そぎとなっており、沈刻による玉抱き三叉文が施されている。23は波状口縁

で、口縁部の上端と下端に沈線が巡り、口縁部の波頂部にキザミ目が施されている。内面の波頂部に縦位の角押文が2条施文され、この両側に長くのびた三叉文が施文されている。三叉文は角押文となっている。胴部は縄文地にドーナツ状の突帯が貼り付けてある。その両側に2個ずつ三叉状の沈刻が施され、玉抱き三叉文を表現している。24は、頸部付近の胴部片で、2条の沈線による栴形文の区画内にRLの縄文が施されている。この区画文の端には、三角形の沈刻文が施文されている。25は口縁部片で、口唇部には斜位に縄文原体が押圧されている。器面にRLの縄文が横位に粗く施文され、拓影図の下方には角棒状施文具による刺突文が横位に巡っている。

2類 (第17図 26~28)

文様が角押文を主体とする土器を木類とした。色調はにぶい褐色で、胎土は多量の礫・砂・茎母を含んでいる。焼成は良好である。本類の土器は阿玉台式に比定されるものと思われる。

26は口縁部片で、上端が内側へ肥厚している。外面には角押文が鋸歯状に巡っている。27は口縁部片で、上端の内面に稜をもっている。外面の上端に隆帯が横位に巡っており、その隆帯にそって低い隆帯が巡っており、その上下に角押文が巡っている。28は口縁部片で、口唇部が内そぎとなっている。外面の上部に隆帯が巡り、その隆帯の上下端に角押文が巡っている。その下に断面三角形の低い隆帯が巡り、その隆帯の両側にも角押文が巡っている。角押文の下に液状の沈線文が横位に巡っている。27と28は、阿玉台式に比定される。

土器片鉢 (第17図 29~31)

土器片鉢は3点出土している。いずれも無文の縄文土器の胴部片を利用したもので、対面する側縁に切り込みが2か所施されている。側縁は割れたままの状態での研磨されていない。

表2 土器片鉢一覧表

番号	出土地点 (区)	大きさ(mm)			重量(g)	切り込み間の長さ(mm)	形状	色調	胎土	焼成	備考
		長さ	幅	厚さ							
29	C3h1	44.6	28.4	9.0	11.5	22.0	不定形	にぶい赤褐色	砂・茎母	普通	切り込みは長辺にある。
30	D3e5	42.5	28.4	9.0	15.0	24.2	不定形	にぶい橙色	細砂・砂	普通	切り込みは長辺にある。
31	D3e4	45.1	42.0	12.0	26.5	36.0	方形	灰褐色	砂・茎母	普通	切り込みは短辺にある。

(2)土師器 (第17図 32~34)

32は、D3ds区から12片に割れて出土し、ほぼ完形に復元された小形壺形土器である。上げ底ぎみの平底で、胴部は球形で、最大径は中位にある。口縁部は短く、外傾して立ち上がる。外面はナデ調整、内面はヘラナデ調整が施されている。内面に輪拵み痕が認められる。色調はにぶい橙色で、胎土は細砂を多量に含み、焼成は不良である。口径は5.7cm、器高は7.5cm、底径は4.6cmで

ある。

33は、D3g2区から出土した台付裏形土器の台部である。4片に割れて出土したが、台部のみほぼ完形に復元できた。台部は八の字に広がり、直径3.3cmほどの円窓が1つあいている。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はハケ目調整およびヘラナデ調整が施されている。二次焼成を受けており、色調は明赤褐色である。胎土は砂を多量に含み、焼成は不良である。底径は10.2cmである。

34は、C3h4区から出土した高坏形土器の脚部片である。外面にヘラミカキ調整、内面にナデ調整が施されている。外面は赤彩され、内面の色調はにぶい橙色である。胎土は細砂を含み、焼成は良好である。

表3 奥山A遺跡住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁溝	柱数	柱穴数	貯蔵穴数	火災	出土遺物	時期
				長軸×短軸(m) 面積(m ²)	壁厚(m)							
1	C3f4	N-41°-W	隅丸方形	4.4×4.2 18.5	60	無	1	0	1	有	弥生式土器-壺・高坏、土師器-壺・甕・台付甕・手捏ね土器、磁石	古墳時代 五 福 期
2	C3j1	N-54°-W	隅丸方形	6.6×6.4 42.2	54	有	1	4	1	有	弥生式土器-壺・甕・高坏、土師器-甕・台付甕・手捏ね土器・小形器台、土玉、磁石、白石	古墳時代 五 福 期
3	D3e4	N-42°-W	隅丸方形	3.9×3.7 14.4	24	無	1	0	0	有	弥生式土器-壺・甕・高坏、土師器-甕、磁石	古墳時代 五 福 期

第4節 まとめ

当遺跡からは、古墳時代の住居跡3軒が検出されており、住居跡から土師器とともに弥生式土器が出土し、弥生時代から古墳時代への移り変わる時期の集落として注目される。ここでは、出土遺物を中心にまとめることにする。

1 住居跡について

3軒の住居跡は大形の第2号住居跡を中心に、谷津に向かって弧状に配置しており、いずれも平面形が隅丸方形で、地床が設けられた竪穴住居跡である。

第2号住居跡は、1辺が6.5mと3軒の中では、他の2軒に比べ2～3倍の床面積で、主柱穴、貯蔵穴、壁溝を有し、他の2軒の住居跡に比べ整った形態をしている。炉は中央部から北寄りに設置され、床面をそのまま使用した地床がで、良く使用された跡が認められた。貯蔵穴は東コーナー壁ぎわに設けられており、開口部の平面形は隅丸方形である。貯蔵穴の中からは、投棄された状態で甕形土器などの破損した土器が多数出土している。住居の床面には白石が据えられており、住居内で作業が行われていたことをよく示している。壁溝は貯蔵穴に連結している。復元された土器を観察すると、土器断面もよく焼けたいわゆる三次焼成された土器片と、三次焼成されない土器片が接合していることが認められた。このことは、土器を破砕した行為の後に、土器が焼けたことを示唆している。つまり、本跡の焼失前に祭祠的な行為が行われたことが考えられる。

また、第2号住居跡からは、580点の土器片が出土しており、これは3軒の住居跡を合わせた土器片総数684点の85%にあたる。第2号住居跡は、住居の配置や規模、形態、出土遺物等からも、当集落の中心的な役割りをしていたと思われる。

第1号住居跡と第3号住居跡は1辺が4m前後と小形の住居跡で、主柱穴と壁溝は検出されなかった。炉は、第2号住居跡と同様に中央から北寄りに設置された地床であるが、小規模であり使用されなかったと思われる。出土遺物は第2号住居跡に比べ極端に少ない。また、第1・3号住居跡の主軸方向がN-41°-W、N-42°-Wと同じであるのに対し、第2号住居跡の主軸方向はN-34°-Wと若干の差異が認められる。この主軸方向の差および住居の規模や形態の差異は、第2号住居跡が設置された後に、第1・3号住居跡が別棟的に設置されたことを示唆するものと思われる。

2 土器の分類と型式について

当遺跡の3軒の住居跡からは684点の弥生式土器および土師器が出土し、多くは第2号住居跡から出土している。完形で出土したものはなく、多くは破片で出土した。一番遺存状態のよいも

のは、2-13の台部欠損の台付甕形土器で、完形に復元できたのは、2-1の甕形土器と、2-17の小形器台形土器の2点だけであった。これらの土器を器形および文様、胎土などで分類し、土器型式を比定することとする。なお、2-1とは、第2号住居跡出土遺物番号1の遺物を表わし、実測図の番号と同じになっている。

甕形土器

A類 胴部の上半に目の細かな縄文と結節文を施文する土器を本類とする。本類の土器は第2号住居跡から4・5の2点出土しているが、いずれも胴部の上半を中心に復元できたもので、全体の器形をとらえることができなかった。5は胴部最大径が24.5cmと大形の甕形土器である。口縁部は出土しなかったが、胴部の形状が尾ヶ崎遺跡出土遺物A類⁽¹⁾と類似しているため、単口縁であったと思われる。口縁部下位の外面は、ヘラミガキ調整され、赤彩されている。胴部は上半に文様帯を有し、以下はヘラミガキ調整後、赤彩されている。文様帯は、上位にボタン状の円形浮文が1条巡り、以下に縄文と結節文が交互に施文されている。縄文はLRとRLの縄文を交互に施文して、羽状の効果を出している。この文様帯の中心に赤色の円形の斑点が、等間隔につけられている。本類の土器は前野町式に比定されるものと思われる。

B類 頸部に隆帯の巡る土器を本類とし、第2号住居跡から2の1点が出土している。口縁部は単口縁で、外面はヘラミガキ調整され、赤彩されている。頸部には断面三角形の太い隆帯が巡っており、隆帯上にはキザミ目が等間隔に施されている。本類の土器は、東海系の弥生式土器の影響を強く受けている。

C類 口縁部は複合口縁で、頸部で強くくびれている。胴部は下ぶくれを呈しており、無文である。外面はヘラミガキ調整後、赤彩されている。口縁部は複合口縁の上に縄文を施文したものと、無文のものがあり、複合口縁の幅は狭いものと、比較的広いものがある。器厚がA・B類よりもやや薄く、比較的小さな甕形土器である。本類の土器は前野町式に比定されると思われる。

D類 口縁部は単口縁で、大きく外反しており、頸部付近はハケ目調整されている。本類の土器は第1号住居跡から出土した4の1点だけで、胴部が欠損しており、全体の器形を窺うことができない。本類の土器は五領式に比定されると思われる。

甕形土器

A類 口縁部は頸部でくびれて、緩やかに外反している。口唇部にはキザミ目が施され、外面はハケ目調整されている。本類の土器は下半を欠損した2-10の1点だけであり、全体の器形を窺うことができない。

B類 口縁部は頸部でくの字に強くくびれてから、外傾しており、口縁部外面には、ひだ状に2～3段の明瞭な輪積み痕が認められる。復元できたのは口縁部だけで、全体の器形を窺うことができない。

台付甕形土器

口縁部は外反し、外面に明瞭な輪積み痕が認められ、口唇部にキザミ目が施されている。胴部はほぼ球形で、台部は八の字に開いている。口縁部内面と、胴部外面の中位から上および台部の外面にはハケ目調整が施されている。本類の土器は、台部を欠損した2-13と、他に台部のみ現存の4点がある。

椀形土器

口縁部は短くて直立し、口唇部は内そぎ状を呈している。体部は平底の底部から強く内彎しながら立ち上がる。内・外面は赤彩されている。本類の土器は2-8の1点だけである。

高環形土器

口縁部は内彎ぎみに大きく開いて立ち上がっており、器厚は薄手である。内面は一部ハケ目調整されたものもあるが、内・外面ともヘラミガキ調整後、赤彩されている。口縁部や台部の小片のみの出土で、全体の器形を窺うことができない。

小形器台形土器

受部は大きく開いて内彎ぎみに浅く立ち上がり、口縁部の上端は直立し尖る。脚部は円錐形で側面に小さな孔が3個穿たれている。孔は側面の3個の他に、受部の中央から脚部へ穿ったものがある。受部の直径は、脚部の直径よりやや小さくなっている。本類は五領式に比定されると思われる。

手握ね土器

平底で、体部から口縁部まで外傾して立ち上がっている。器厚が薄く、ていねいなつくりである。

奥山A遺跡の土器は器形、文様、胎土、調整などの特徴から前野町式と五領式に分類される。前野町式土器は、甕形土器A・B・C類、椀形土器、高環形土器である。五領式土器は、甕形土器D類、小形器台形土器、甕形土器A・B類、台付甕形土器・手握ね土器である。なお、椀形土

器、高環形土器、甕形土器A・B類、台付甕形土器、手捏ね土器は器形からは前野町式と五領式の区別が判然としないが、前野町式に含めた土器は、五領式に含めた土器に比べ、胎土に砂が少なく、焼成もよくない。また、磨減が著しく、小片に割れて出土しており、異質な土器という感じを受ける。

3 住居跡の時期および性格について

住居跡から出土した遺物を、前項で分類した器種ごとに個体数を推定したのが表4である。なお個体数は、完形または完形に近く復元された数がごく少ないので、口縁部と底部片も1個体として数えている。それによると前野町式土器が56点に対し、五領式土器は34点と前野町式土器の方が数多く残されている。このことは、全体的にみると、前野町式土器が数多く使用されていたことを示すとともに、前野町式土器の破損が大きかったことを窺わせる。前野町式土器の破損が著しかったのは、長期間使用されていたことと同時に焼きのあまいことを示唆することができる。しかし集団が移動するときに使用できる新しい土器はもっていかれたことも考慮せねばならないので、出土点数をもっていずれが支配的土器であるか断定することはできない。当遺跡では、五領式土器も使用されていたが、以前からの土器である前野町式の壺形土器も使用されていたことは事実であるので、当遺跡の時期は五領期の最も古い時期と推定される。

当遺跡のような集落の形態、すなわち、台地縁辺部に主柱穴を有する大形の隅丸方形の住居と、無柱穴の小形の住居からなる、3～4軒の集落は、弥生町・前野町文化圏の最北であるといわれている埼玉県南部域及びその東端である千葉県内陸部に顕著にみとめられるという⁽²⁾。このようなことから、当遺跡は前野町期の文化を強く残していたことになり、集落形態からすると前野町期のあり方をとりながら、土器型式上は弥生時代から古墳時代への移行が徐々に進行していたことを窺わせるものである。当遺跡の集落には東側に入り込んだ小支谷での水田耕作や、台地の斜面からの湧水、まわりに広がる台地が豊かな恵みを与えてくれたことと思われる。しかし、この恵みも長くは続かなかったとみられ、この小集団は他へ移動していったものと思われる。

注

(1)埼玉県庄和町尾ヶ崎遺跡調査会 尾ヶ崎遺跡

昭和59年

(2)埼玉県与野市教育委員会 中野前原遺跡

昭和56年

表4 奥山A遺跡 出土土器
器種別推定個体数

遺物名		1号位	2号位	3号位	合計
前野町式土器	壺	3	26(1)	2	31(1)
	椀	0	1	1	2
	高環	6	16	1	23
	小計	9	43(1)	4	56(1)
五領式土器	壺	1	0	0	1
	甕	4	5	2	11
	台付甕	4	6(1)	0	10(1)
	小形石舎	0	9(1)	0	9(1)
	手捏ね土器	1	2	0	3
小計	10	22(1)	2	34(1)	
合計	19	65(1)	6	90(1)	

() 内の数は見存率60%以上の数

第4章 奥山C遺跡

第1節 遺跡の概要

奥山C遺跡は、関東鉄道常総線小絹駅の西1.7kmに位置し、鬼怒川右岸の標高17mほどの平坦な台地の縁辺部に所在する。遺跡は、西へ突き出た台地の北西斜面と南西斜面からなっている。調査の結果、当遺跡から集石15基、炉穴6基、土坑65基が検出され、縄文時代早期から同中期前葉にかけての遺跡であることが判明した。

集石は、台地の南西側斜面部に多く分布しており、礫が、かたまっけて検出されただけのものと、集石の下に土坑を有するものがあり、前者が11基、後者が4基検出されている。集石内の礫は、少ないもので7点、多いもので291点で、20点未満の小規模なものが多い。礫は、焼けて変色したものや、割れているものが多い。集石からは、ごく少量であるが、沈線文系の土器と条痕文系の土器が出土している。

炉穴は、6基の内5基が南西側斜面部に分布しており、複数の炉を有する炉穴が2基検出されている。炉穴の時期は、鶴ヶ島台期と思われる。

土坑は、台地突端部の南西側斜面に集中して分布しており、壁や底部が不明瞭なものが多く、遺物を伴うものは少数であった。

遺構を伴わない遺物は、縄文土器片と礫が多量に出土していた。縄文土器は、縄文時代早期撚系文系土器・無文土器・沈線文系土器・条痕文系土器、同前期花楸下層式並行・黒浜式・浮島式・興津式土器、同中期阿玉台1式土器が出土している。特に、沈線文系と条痕文系の土器が、多量に出土している。礫は河原石で、火を受けているものや割れたものが多く出土している。石器は、ごく少量であるが、片刃磨製石斧、石槍、石鏃、石錐、磨石などが出土している。土製品は、ごく少量で、土器片鉢と土製円板が出土しているだけである。

第2節 調査経過

奥山C遺跡は、昭和59年3月に山林の伐開を終了し、奥山A遺跡や西原遺跡の調査の進行状況に合わせて調査を進め、昭和60年3月30日に調査を終了した。

5月 23日、遺跡の測量杭打ちを実施した。

6月 1日から、小調査区設定のためグリッド杭打ちを開始し、4日に終了した。5日から、草刈りや器材の搬入などの調査の諸準備をすすめた。11日から、調査区の南側から調査面積の8分の1に当たるグリッドの表土を除去して、遺構の確認作業を開始した。

7月5日、8分の1のグリッド発掘を終了した。その結果、グリッド内から縄文時代早

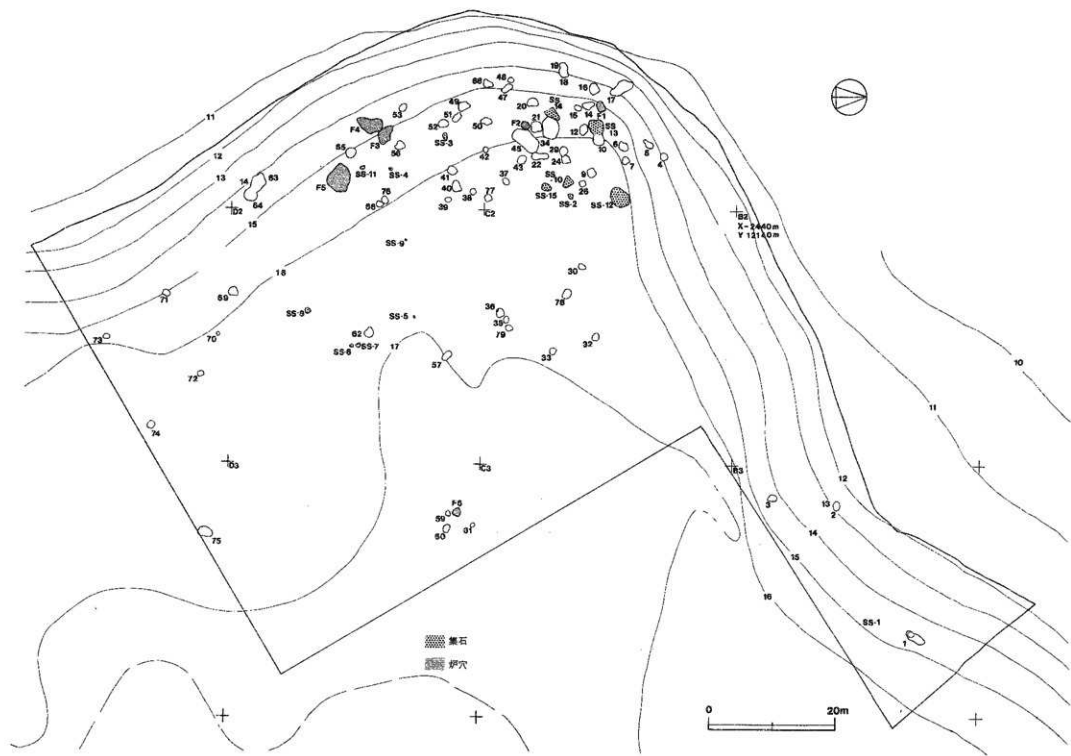
期の土器が礎とともに多数出土し、遺物包含層が確認された。また、土坑と思われる落ち込みや、炉穴と思われる焼土も検出され、遺構の存在が確認されたので、調査区全域を表土除去して調査を進めることにした。調査区域の南西斜面部は、遺物包含層までの深さが浅いため手掘りで、他は、重機で表土除去することにした。

7～9月 7月10日、南西斜面部の表土除去を手掘りにより開始した。7月30日、重機による表土除去を北西斜面部から開始し、8月24日に終了した。その後出土した遺物を、ドット図に記録して取り上げながら遺物包含層を掘り下げ、遺構確認作業を実施し、9月18日に終了した。遺構確認作業の結果、炉穴または土坑と思われる落ち込み78基、集石11基が確認され、第1～11号集石の調査を進めた。その後、9月下旬から1月中旬までの4か月間、当遺跡の調査を一時中断し、西原遺跡の調査を進めた。

1月中旬 16日、調査区域の南側から土坑及び炉穴の調査を開始した。第39・41・51・66・69～76号土坑の調査を進めた。

1月下旬 第4・7・10・13～17・20・22～31・34・37～55号土坑の調査を進めた。

2月上旬 第1～3・8・9・11・12・18・19・21・32・33・35・36・67・68・77・78号土坑の調査を進め、5日までに調査を終了した。調査の結果、第13・46・55・54・67・58号土坑は、炉穴と判明したので、それぞれ第1～6号が穴とした。第11号土坑と第28号土坑は、掘り込んでいったところ同一遺構と判明したので第28号土坑を削除した。第8・11・27・31号土坑は集石と判明したので、第12～15号集石とした。2月13日航空写真を撮影した。その後、先土器調査のため、大調査区C1・C2・D1・D2区の20グリッドのローム層を50cmほど掘り下げたが、先土器の遺構・遺物を検出できなかった。3月7日に現場の調査を終了し、3月9日に奥山A遺跡、西原遺跡と合わせて現地説明会を開催した。



第18図 奥山C遺跡 全体図

第3節 遺構と遺物

1 集石

第1号集石 (第19図)

本跡は、遺跡の北端にあたる北西斜面のB3e7h区に確認され、北6mには第1号土坑が隣接している。

地表下約45cmの褐色土の平らな面に、礫7点が長径40cm・短径30cmの不定形に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。礫と礫の間や周囲に、焼土や炭化物は検出されなかった。礫は河原石で、7点のうち6点が割れており、割れ口はすどく尖っている。礫の表面は、白味をおびており、礫の多くは焼けたものと思われる。礫の大きさは、小さいもので4.1×3.1×2.1cm、大きいもので7.4×4.9×2.8cmである。集石に伴う土器は出土しなかった。

第2号集石 (第19図)

本跡は、C1g0区に確認され、西1mに第10号集石、南西4mに第15号集石が隣接している。

地表下約35cmの赤味をおびた褐色土の平らな面に礫16点が、直径40cmの円形状に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。礫と礫の間や周囲に、焼土や炭化物など火を使用したと思われる痕跡は認められなかった。礫は河原石で、16点のうち9点が割れており、割れ口がすどく尖っている。礫の表面には、白味をおびたものなど礫本来の色を失なったものが多く、礫の多くは焼けたものと思われる。礫の大きさは、小さいもので2.3×2.2×1.3cm、大きいもので8.1×6.6×2.3cmである。集石に伴う土器は出土しなかった。

第3号集石 (第19図)

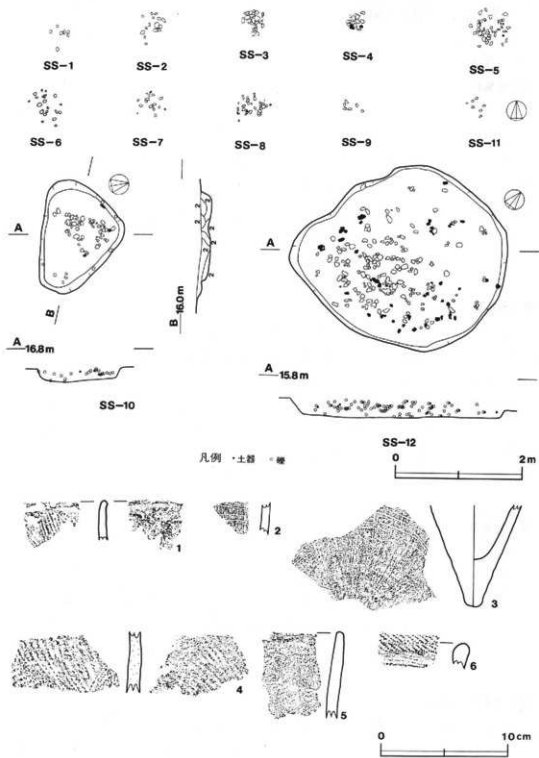
本跡は、D1b8区に確認され、南9mに第3号が穴が、南東9mに第4号集石が隣接している。

地表下約42cmの赤味をおびた褐色土の平らな面に、礫24点が径40cmの不定形に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。礫と礫の間や周囲に焼土や炭化物は検出されなかった。礫は河原石で、24点のうち12点が割れており、第2号集石の礫と同様の焼けた痕跡が認められた。集石に伴う土器は出土しなかった。

第4号集石 (第19図)

本跡は、D1d9区に確認され、西3mに第3号が穴が、東12mに第9号集石が隣接している。

地表下38cmの赤味をおびた褐色土の平らな面に、礫14点が、長径36cm・短径30cmの不定形に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。礫と礫の間や周囲に焼土や炭化物は検出されな



第19图 奥山C遺跡第1~12号集石突測図・出土土器拓影圖

かった。礫は河原石で、14点のうち6点が割れており、第2号集石の礫と同様の焼けた痕跡が認められた。沈線文系の土器片が2点出土している。

第5号集石（第19図）

本跡は、D2c5区に確認され、西11mに第9号集石、南東9mに第6号集石が隣接している。

地表下36cmほどの赤味をおびた褐色土の平らな面に、礫41点が、直径65cmの不定形に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。礫と礫の間や周囲に焼土や炭化物は検出されなかった。礫は河原石で、41点のうち27点が割れた石で、第2号集石の礫と同様に、焼けた痕跡が認められた。縄文土器片1点が礫にまじって出土した。縄文土器片は三戸式に比定されると思われる。

第6号集石（第19図）

本跡は、D2e6区に確認され、南10cmに第7号集石が隣接している。

地表下29cmほどの赤味をおびた褐色土の平らな面に、礫19点が、長径64cm・短径46cmの楕円形状に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。礫と礫の間や周囲に焼土や炭化物が検出されなかった。礫は河原石で、19点のうち15点が割れており、第2号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められた。集石に伴う土器は出土しなかった。

第7号集石（第19図）

本跡は、D2f6区に確認され、北10cmに第6号集石が隣接している。

地表下34cmほどの赤味をおびた褐色土の平らな面に、礫13点が、長径48cm・短径42cmの楕円形状に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。礫と礫の間や周囲に焼土や炭化物が検出されなかった。礫は河原石で、13点のうち12点が割れており、第2号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められた。縄文土器片2点が礫にまじって出土した。いずれも条紋文系の胴部片である。

第8号集石（第19図）

本跡は、D2g5区に確認され、北東8mに第7号集石が隣接している。

地表下36cmほどの赤味をおびた褐色土の平らな面に、礫27点が、長径60cm・短径40cmの楕円形状に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。集石の範囲内に焼土や炭化物は検出されなかった。礫は河原石で、27点のうち21点が割れており、第2号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められた。縄文土器片4点が礫にまじって出土した。いずれも鶴ヶ島台式か茅山式の胴部片である。

第9号集石 (第19図)

本跡は、D2d2区に確認され、東11mに第5号集石、南西12mに第4号集石が隣接している。

地表下50cmほどの赤味をおびた褐色土の平らな面に、礫6点が長径36cm・短径20cmの範囲に集石しており、ほぼ一段に敷きつめられてあった。礫は河原石で、6点のうち3点が割れており、第2号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められた。集石に伴う土器は出土しなかった。

第10号集石 (第19図)

本跡は、C1g9区に確認され、東1mに第2号集石、北1mに第26号土坑、南2mに第15号集石が隣接している。本跡は土坑に集石されたものである。

土坑の平面形は長径1.63m・短径1.40mの不定形を呈し、長径方向はN-57°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は18~24cmである。底面は軟弱で凸凹である。覆土は赤味をおびた褐色土がレンズ状に2層堆積している。覆土は全体的にしまりが弱く、木根が密に入り込んでいる。

土坑中央部の覆土上層の長径100cm・短径60cmの不定形に集石してあった。礫は河原石で、75点のうち45点が割れており、第2号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められた。礫とともに縄文土器片が7点出土し、そのうち沈線文系のものが4点、条痕文系のものが3点である。

いずれの土器片も礫にまじって出土した。1は口縁部片で、外面に条痕文が斜位に施文されている。2は胴部小片、3は尖底部で、いずれも細沈線文が横位に施されており、三戸式に比定されると思われる。

第11号集石 (第19図)

本跡は、D1e9区に確認され、北4mに第4号集石、南東3mに第5号炉穴、西5mに第4号が穴が隣接している。

地表下約30cmの赤味をおびた褐色土の平らな面に、礫11点が長径30cm・短径22cmの不定形に集石しており、まばらに散布してあった。礫は河原石で、第2号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められた。集石に伴う土器は出土しなかった。

第12号集石 (第19図)

本跡は、C1e0区に確認され、南6mに第2号集石、西3mに第7号土坑が隣接している。本跡は土坑に集石されたものである。

土坑の平面形は、長径2.96m・短径2.86mの不整形を呈し、長径方向はN-51°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、壁高は12~26cmである。底面は軟弱で北へ傾斜している。覆土は基本的に2層からなり、上・下層とも褐色土である。上層は下層よりも赤味が強い。上層の

中央部の直径1mの範囲には焼土粒子が含まれていた。

卵大の礫291点が、覆土上層に、1部積み重なった状態で不定形に集石してあった。礫は河原石で、291点のうち239点が割れており、割れ目はすどく尖っている。礫の表面は白味をおびており、焼かれたものと思われる。縄文土器片が礫とともに15点出土し、撚糸文系土器が1点、無文土器が1点、沈線文系土器が1点、条痕文系土器が13点である。

4は胴部片で、内・外面に条痕文が施文されている。胎土は繊維と砂を含む。5は口縁部片で、内・外面は無文で、横位に削り調整されている。口唇部は平らである。色調は橙色で、胎土は細砂を含み、焼成は良好である。6は口縁部片で、丸く肥厚した口縁の上部に縄文が施文されている。口縁下外面は縄文が横位に施文されている。井草式に比定されると思われる。

第13号集石（第20図）

本跡は、C1f7区に確認され、東側で第10号土坑と重複し、西2mに第1号炉穴、南20mに第12号土坑と隣接している。本跡は土坑に集石されたものである。

土坑の平面形は、長径2.73m・短径2.50mの円形状を呈し、長径方向はN-0°を指している。壁は外傾して立ち上がり、壁高は30cmほどである。覆土は基本的に4層からなり、1層が暗褐色土、2層が褐色土、3層が褐色土で焼土粒子を微量に含んでいる。最下層の4層は、赤褐色を呈し、焼土粒子を多量に含んでいる。

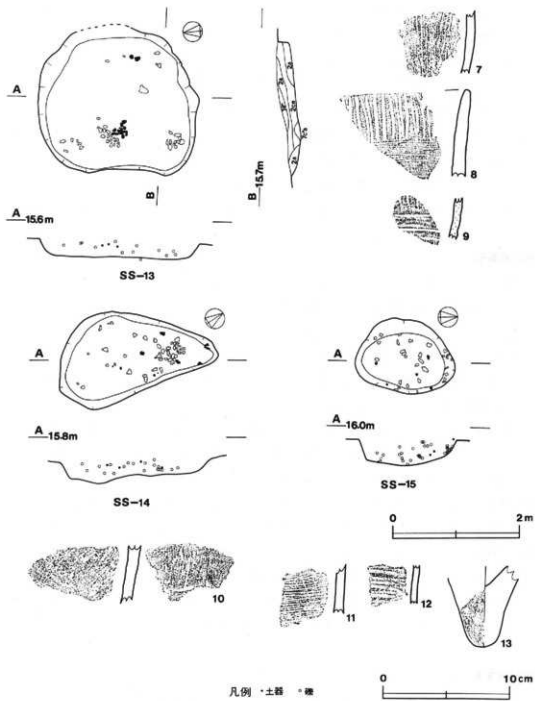
礫49点が、土坑の北側と南側の2か所の覆土上層に、北側では長径50cm、短径40cmの不定形に、南側では長径30cm、短径20cmの不定形に集石してあった。南側集石の下位には焼土を多量に含んだ4層がある。礫は河原石で、49点のうち30点が割れており、卵大の大きさのものが多く、礫は第2号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められる。縄文土器片が礫にまじって8点出土した。

7は胴部片で、外面に撚糸文が施文された薄手の土器で、稲荷台式に比定されると思われる。8は口縁部片で、口唇部は平らになっている。外面は口縁下に縦位の沈線文、以下に横位の沈線文が施されている。内面は横位に削り調整、以下縦位に削り調整されている。三戸式に比定されると思われる。9は胴部片で、外面に横位の沈線文が施文され、以下貝殻腹縁が縦位に押圧されている。胎土は繊維を含む。田戸上層式に比定されると思われる。

第14号集石（第20図）

本跡は、C1h7区に確認され、西側で第34号土坑と接し、南東3mに第2号炉穴、北3mに第15号土坑が隣接している。本跡は土坑に集石されたものである。

土坑の平面形は、長径2.55m・短径1.50mの三角形状を呈し、長径方向はN-45°-Eである。壁は外傾しながら立ち上がり、壁高は25~40cmほどである。底面は軟弱で凸凹であり、南西へや



第20圖 奥山C遺跡第13~15号集石実測図・出土土器拓影図

や傾斜している。覆土は2層からなり、上・下層とも褐色土であるが、上層はやや赤味をおびている。

礫47点が、覆土上層の北東部長径0.7m・短径0.6mの不定形に集石してあった。礫は河原石で、47点のうち36点が割れており、卵大のものが多い。礫は第2号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められた。礫にまじって縄文土器片が8点出土している。縄文土器片は、無文土器が1点、沈線文系の土器が7点である。

10は胴部片で、外面は斜位に削り調整が、内面は先のまるまった工具による削り調整が施されている。色調は橙色で、胎土は砂とスコリアを含み、焼成は良好である。

第15号集石 (第20図)

本跡は、C1h0区に確認され、北2mに第10号集石、西4mに第22号土坑が隣接している。本跡は土坑に集石されたものである。

土坑の平面形は、長径1.60m・短径1.16mの楕円形を呈し、長径方向はN-6°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は40cmほどである。底面は皿状で軟弱である。覆土は4層からなり、レンズ状に地積している。各層とも褐色土で軟らかである。

礫31点が、覆土の上層から下層にかけて散在的に集石されている。礫は河原石で、31点のうち27点が割れており、卵大の大きさのものが多い。礫は第2号集石の礫と同様に、焼けた痕跡が認められる。縄文土器が覆土から6点出土し、すべて沈線文系の土器である。

11は胴部片で、外面に細沈線文が横位に施されている。12は胴部片で、外面に浅目の沈線文が施されている。13は尖底部で、外面は縦位の削り調整が施されている。12・13はともに色調が橙色で、胎土は細砂を含み、焼成は良好である。

2 炉穴

第1号炉穴 (第21図)

本跡は、西へ突き出た台地の北西斜面にあたるC1f6区に確認され、東2mに第13号集石、南0.2mに第12号土坑が隣接している。

平面形は、長径1.78m・短径1.44mの楕円形を呈し、長径方向はN-70°-Eである。壁は外傾して立ち上がっており、壁高は17-41cmである。炉床は、南西壁から北東へ緩やかに傾斜する底面の南西壁ぎわに設けられており、焼土が長径60cm・短径50cmの楕円形に3cmほど堆積していた。炉床は平坦で、表面は赤く焼けていたが、軟弱であった。炉床の北東側の底面は緩やかに12cmほどくぼんでおり、足場と思われる。炉床の南西側は外傾して立ち上がる壁で、この部分に煙道があったと思われるが確認できなかった。本跡の覆土は赤褐色を呈し、微量の焼土粒子と炭化粒子

が含まれていた。

出土遺物は、縄文土器片67点、礫3点である。縄文土器片58点は、14と同一体のもので、炉床にかたまって検出されており、本跡に伴うものと思われる。

14は口縁部片で、波状を呈すると思われる。無文で、二次焼成を受けもろくなっている。色調は外面が橙色で、断面が黒褐色である。胎土は砂を特に多量に含んでいる。条痕文系の土器である。

第2号炉穴(第21図)

本跡は、C17区に確認され、東側に第4号土坑が接しており、北0.2mに第21号土坑が隣接している。

平面形は、長径1.60m・短径1.20mの楕円形を呈し、長径方向はN-45°-Wである。覆土の大部分と床面の炉床付近が攪乱されているが、壁は現存している。壁は外傾して立ち上がっており、壁高は46cmほどである。底面は、炉床の位置する南東壁ぎわから北西へやや傾斜しているが、これは攪乱による可能性が強い。炉床は南東壁ぎわの底面に設けられており長径20cm・短径8cmの三日月状の範囲が硬く赤色に焼けていた。この炉床の南東側はあまり攪乱されておらず、壁は外反して立ち上がり、上位で内傾している。この壁にそった幅10cmほどの覆土には、焼土粒子が多量に含まれていた。この幅10cmほどの覆土が、煙道のあとと推定される。炉穴の北西側は攪乱されているが足場があったと推定される。炉穴に足場を含めた炉穴底面は、長さ90cm・幅60cmと狭いのに対し、壁高が46cmと高くなっている。本跡に伴う遺物は出土しなかった。

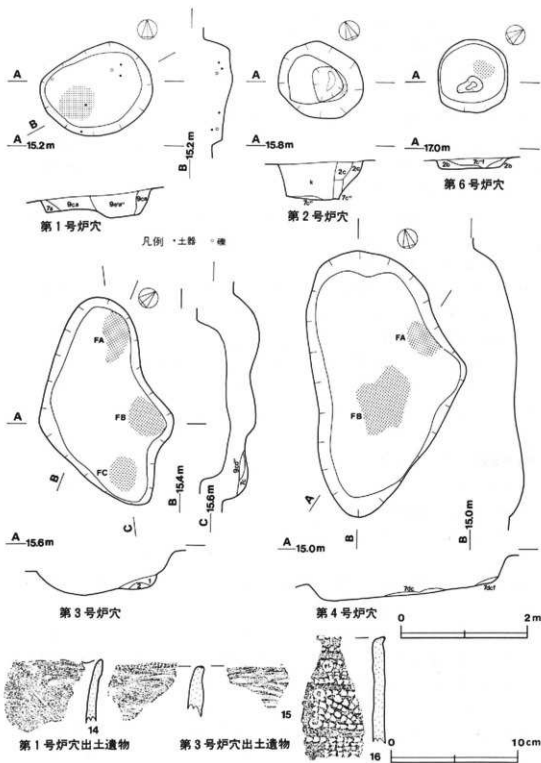
第3号炉穴(第21図)

本跡は、南西斜面にあたるC1d7区に確認され、南西側に第4号炉穴が接しており、東2mに第4号集石、南東4mに第11号集石が隣接している。

平面形は長径3.37m・短径2.10mの不定形を呈し、長径方向はN-56°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がっており、壁高は36-55cmで、北東側が高くなっている。

本跡からは炉が3基検出され、北西壁下に位置する炉を炉A、北東壁下に位置する炉を炉B、南東壁下に位置する炉を炉Cとする。

炉Aの炉床は、北西壁から南東へやや傾斜する底面の北西壁ぎわに設けられており、焼土が長径80cm・短径50cmの楕円形状に6cmほど堆積していた。炉床は皿状にややくぼんでおり、表面は赤色に焼けていたが、やや軟弱であった。炉床の北西側の壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、この部分には煙道があったと思われる。足場は炉床の南東側で、炉床より10cmほど皿状にくぼんでいる。



第21图 奥山C遺跡第1・2・3・4・6号炉穴実測図・出土土器拓影图

がBの炉床は、北東壁から南西へ傾斜する底面の北東壁ぎわを水平に削平して設けられており、焼土が長径63cm・短径60cmの円形状に、厚さ16cmほど堆積していた。炉床の表面は赤色に硬く焼けていた。炉床の南西側の底面は炉床より9cmほど皿状にくぼんでおり、軟弱であった。ここが足場であったと思われる。

がCの炉床は北東壁ぎわの1段高くなった所に設けられており、焼土が長径55cm・短径42cmの楕円形に、厚さ13cmほど堆積していた。炉床は皿状にややくぼんでおり、表面は赤色に硬く焼けていた。炉床の北西側は16cmほど1段低くなっており、足場であったと思われる。炉床の南東側の壁は、内野ぎみに強く立ち上がっており、煙道が設けられていたと思われるが、確認できなかった。3基の炉は順に使用されたと思われるが、新旧関係は確認できなかった。覆土は、赤味をおびた褐色土であった。

出土遺物は、縄文土器片が8点で、主に鶴ヶ島台式に比定されると思われる。

15は口縁部片で、口唇部に貝殻殻縁による浅目の押圧文が施文され、内・外面は浅目の条痕文が横位に施文されている。色調は内・外面が橙色で、断面が暗褐色である。胎土は繊維と細砂を含み、焼成は普通である。16は口縁部片で、外面は結節沈線状の刺突文で長方形に区画されている。この区画文のコーナーには円形竹管文が押圧されている。区画内には同じ工具による刺突文が充填されている。色調は内・外面が橙色で、断面が黒褐色である。胎土は繊維と細砂を含む。焼成は良好である。この他に内・外面に縦位の条痕文が施文された土器が出土している。

第4号炉穴（第21・22・23図）

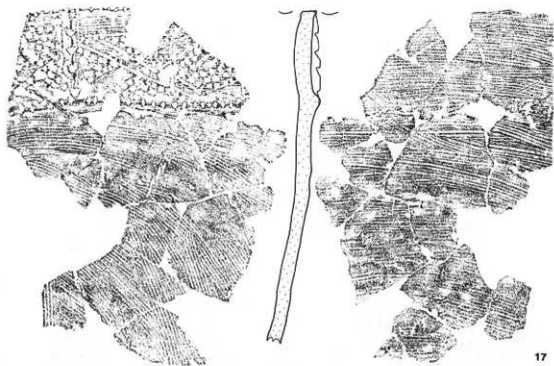
本跡は、南西斜面にあたるC1e7区に確認され、北東側に第3号炉穴が接しており、北5mに第11号集石が隣接し、南西側には遺構を確認できなかった。

平面形は長径4.20m・短径2.45mの不定形を呈し、長径方向はN-15°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がっており、壁高は25~40cmで、北東壁側が高くなっている。

本跡からは炉が2基検出され、北東壁に位置する炉をがA、底面中央部に位置する炉をがBとする。

がAの炉床は北東壁から南西へ傾斜する底面の北東壁ぎわに設けられており、焼土が長径60cm・短径40cmの楕円形に、厚さ8cmほど堆積していた。炉床は平坦で、表面は赤く焼けていた。炉床の南西側の底面は、傾斜しており足場であったと思われる。炉床の北東側の壁はやや内野ぎみに強く立ち上がっている。

炉Bの炉床は掘り込みの中央部に位置しており、焼土が長径1.1m・短径0.8mの不定形に5cmほど堆積していた。炉床は平坦で、表面は赤く焼けていた。炉床の南西側は、炉床より10cmほど皿状にくぼんでおり、足場であったと思われる。覆土は赤味をおびた褐色土で、焼土を含んでい



17



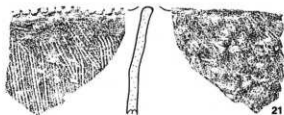
18



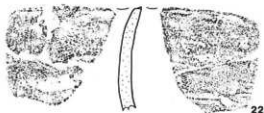
19



20



21

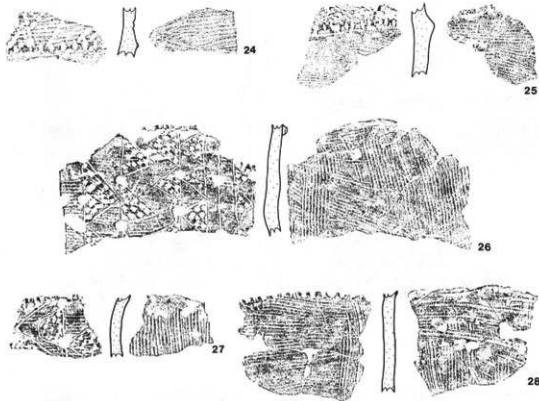


22



23

第22图 奥山C遗址第4号炉穴出土土器拓影图(1)



第23図 奥山C遺跡第4号炉穴出土土器拓影図(2)

た。

出土遺物は縄文土器片54点、礫9点である。

17は口縁から胴部にかけての大きな破片で、胴のくびれは1段である。口唇部は外面へややのみ出るようにナデ調整され、外面との角にはキザミ目が施されている。口縁部は太い断面三角形の隆帯が貼り付けられ、隆帯上には竹管状工具を45度の角度で刺突した爪形文が施されている。隆帯の両側には、細い円形工具や、先の平たい工具により結節沈線文が三角形に描かれている。三角形の区画内には先の平たい工具による結節沈線文が充塞されている。結節沈線文の交点には、円形竹管状工具を斜めに刺突した三日月形の刺突文が認められる。胴部外面は横位または斜位に、内面は横位に条痕文が施文されている。胎土は多量の繊維を含み、焼成は普通である。18～23は口縁部片で、いずれも口唇部にキザミ目と指圧が施され、口縁端部が外側へはみ出ている。18・19・21はキザミ目が口唇部と外面との角に浅目に施されている。18の外面は刺突文が横位と縦位に施文され、その交点付近に円形竹管文が押圧されている。内面は横位のケズリ調整が施されている。胎土は多量の繊維を含み、焼成は普通である。19の外面は刺突文が三角形に施文され、

その刺突文の交点に三角形の押圧文が施されている。20は内・外面が無文で、胎土は繊維と多量の細砂を含む。21の口縁部はやや外反し、外面は縦位の条痕文が施文されている。内面は斜位に条痕文を施文後、ナデている。胎土は繊維を含み、焼成は普通である。22・23は口縁部がゆるく外反しており、二次焼成を強く受けている。内・外面は無文で、内面は横位にケズリ調整されている。24は胴部片で、外面は刺突文の中に、棒状工具の押圧が認められる。25は胴部片で、断面山形の隆帯が横位に巡り、隆帯の上位に隆帯による文様区画が施されている。文様区画の中にまた結節沈線による文様区画が施され、その中に刺突文が施されている。26・27は胴部片で、外面は沈線が縦位に施され、それを中心に三角形文が施されていて、三角形文の内には半截竹管による刺突文が充填されている。縦位の沈線文上には、只役の背圧文が施されている。28は28の下位にあたる胴部片で、内・外面ともに条痕文が縦位と横位に施されている。26～28は焼成が良好である。縄文土器片は、鶴ヶ島台式に比定されると思われる。

第5号炉穴（第24図）

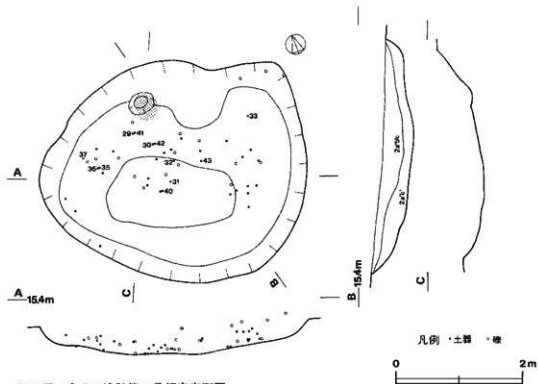
本跡は、南西斜面にあたるD2d3区に確認され、北西3mに第11号集石、北西7mに第4号炉穴が隣接している。

平面形は長径4.28m・短径3.60mの不定形を呈し、主軸方向はN-0°を指している。本跡の断面形は皿状を呈し、壁高は76cmほどである。炉床は、北から南へ皿状にくぼんだ床面の北壁ぎわを水平に削平して設けられ、焼土が長径42cm・短径32cmの楕円形に3cmほど堆積していた。炉床は平坦で、表面は赤色に硬く焼けていた。炉床の南側は皿状にくぼんでおり、足場であったと思われる。炉床の北側は緩やかに外傾する壁で煙道が設けられてあったと思われるが、確認できなかった。覆土は2層からなりレンズ状に自然堆積している。上層は赤味をおびた褐色土で、焼土粒子を少量含む。下層は褐色土で、焼土粒子を含んでいる。

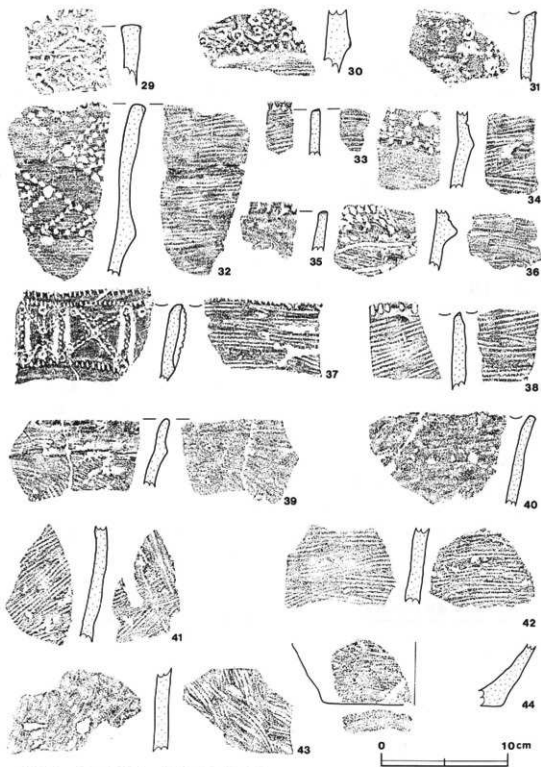
出土遺物は、縄文土器片171点、燧79点である。遺物は底面およびその直上からの出土が多い。

29と30は口縁部片で、胎土色調が同じなので同一個体と思われる。外面は微隆起線で幾何学状に区画され、交点に円形竹管文が押圧されている。区画内の一部には刺突文が充填されている。色調は内・外面が浅黄褐色で、断面が黒褐色である。胎土は繊維と細砂を多量に含み、焼成は不良である。31は口縁部片で、三角形の浅い刺突文が横位と縦位に施文され、刺突文上には円形竹管文が押圧されている。色調は外面が灰赤色、内面が橙色、断面が黒褐色である。胎土は繊維と細砂を多量に含み、焼成はやや不良である。32は口縁部片で、口縁部外面に刺突文が幾何学状に施文されて、間をおいた三角形の区画内には刺突文が充填されている。三角形状に施文された刺突文の交点には棒状の押圧文が施されている。口縁部と胴部の境には断面三角形の隆帯が巡り、隆帯上には棒状工具押圧によるキザミ目が施されている。胴部外面および内面は、横位の条痕文が

施文されている。色調・焼成は29に類似している。33は口縁部片で、内・外面に横位の浅い条痕文が施文されている。34は、口縁部付近の胴部片で、外面に刺突文が幾何学状に施文されている。35は無文の口縁部片で、外面に擦痕が認められる。36は口縁部片で、口縁部外面は沈線区画内に刺突文が施文されており、横位の隆帯の下位には、刺突文や沈線文が認められるので、この土器は胴部にくびれが2段あるものと思われる。37は口縁部片で、口唇部に2列のキザミ目が施されている。口縁部外面には、隆帯が縦位に貼り付けられて文様帯が区画されており、隆帯上にはキザミ目が施されている。区画内には結節沈線が2本単位または1本単位で幾何学状に施文され、結節沈線の端部や交点には円形竹管の押圧文が施されている。色調は内・外面が橙色、断面が黒褐色である。胎土は繊維と細砂を多量に含み、焼成は普通である。38は、口縁部片で、口唇部は尖っていて、キザミ目が施されている。内・外面に横位の条痕文が施文されている。39は口縁部に横位の隆帯が走る。内・外面に条痕文が施文されている。胎土は、多量の細砂と繊維を含み、焼成はやや不良である。40は、小波状を呈する口縁部片で、内・外面は凸凹にナデ調整され、その後外面は横位にヘラナデ調整されている。胎土・色調は39と同じである。41～43は胴部片で、44は底部である。41の内面は斜位の条痕文の上に、浅目の条痕が施されている。43の外面は無文でヘラナデ調整されている。上記の土器は本跡に伴っており、鶴ヶ島台式に比定されるとと思われる。



第24図 奥山C遺跡第5号炉穴実測図



第25图 奥山C遗址第5号炉穴出土土器拓影图

第 6 号炉穴 (第21図)

本跡は台地斜面より中へ入った平州部にあたるD3a2区に確認され、南側に第59号土坑が接し、北東2mに第61号土坑が隣接している。

平面形は、長径1.24m・短径1.22mのほぼ円形で、主軸方向はN-0°である。壁は外傾して立ち上がり、壁高は14cmほどである。底面は軟弱で明確でなかった。炉床は北東壁付近に設けられ、焼土が長径36cm・短径30cmの不定形に3cmほど堆積していた。炉床は平頂で、赤色に硬く焼けており、足場や煙道は確認できなかった。覆土は2層で、レンズ状に堆積していた。上層は赤褐色を呈しており、特に多くの焼土粒子、少量の炭化物を含んでいる。下層は褐色を呈しており、地山よりやや赤味が強くなっている。本跡は炉床の一部を残し攪乱されたと思われる。本跡から遺物は出土しなかった。

3 土坑

土坑は、台地先端部の西側斜面部に集中して分布していた。検出された土坑は、遺構確認の段階で78基であったが、調査を進めるうちに集石、炉穴と判明したものがあり、調査終了の段階では65基となった。

第5・10・12・14・16・17・41・60・61・75号土坑の10基は、遺構確認の段階で焼土が検出されたが、焼土が確認面にういていただけであった。他は、確認面よりやや黒味が強く、覆土がやわらかい部分を土坑としてとらえた。土坑を掘り込んだところ、壁が不明瞭なものが多く、また、木根などによる攪乱を受けている土坑もあり、形状・規模を把握することが困難であった。出土遺物は少なく、第22・34・43・44・69号土坑からは、覆土上層からまともに出てくるが、他の土坑からは、ごく少量で土坑に伴うものとは判断できなかった。

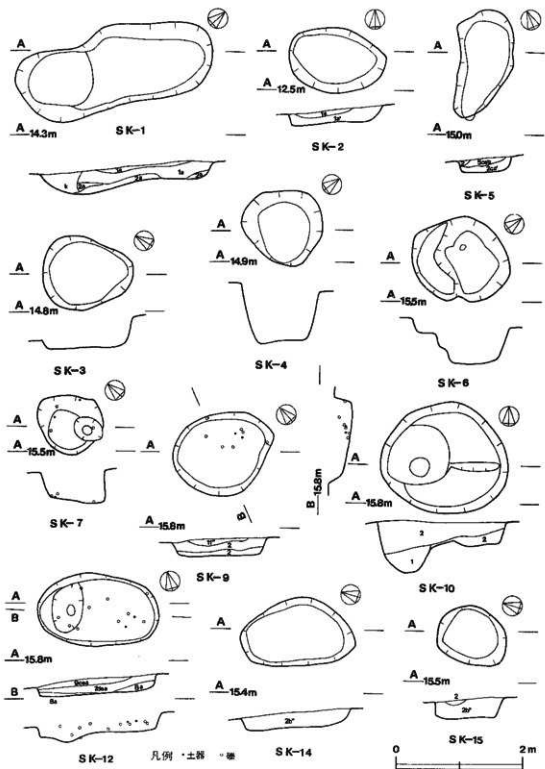
土坑は表で掲載し、出土遺物については、ほぼ同レベルにまともに出てきた遺物を中心に記載した。

表 5 奥山C遺跡土坑一覧表

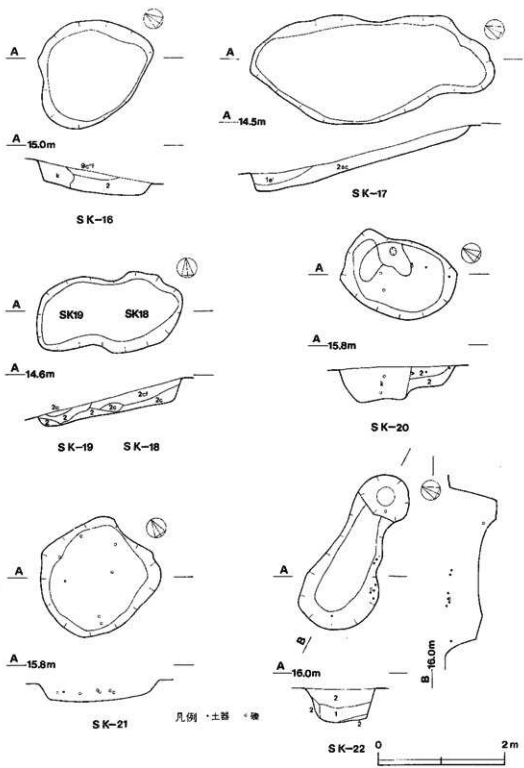
番号	位置	方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
1	B3c7	N-32° E	長楕円形	3.15×1.22	32	外傾	雑兵	自然		南西部に攪乱灰
2	B3f2	N-87° W	楕円形	1.54×1.02	22	外傾	平沢	自然		
3	B3f7	N-27° W	楕円形	1.44×1.16	42	外傾	平頂	自然		
4	C1j9		円形	1.28×1.18	88	垂直	凸凹	人為		
5	C1d5	N-42° E	楕円形	1.77×0.80	32	垂直	平頂	自然		確認面に薄い焼土
6	C1e9	N-41° E	楕円形	1.60×1.26	62	外傾	平頂	自然	燻1点	

番号	位置	方向	平面形	規 模		壁面	断面	覆土	出土遺物	備 考
				長さ×奥行き	高さ×W					
7	C1e		円形	1.11×0.90	54	外傾	凸凹	自然	土器-6群2点, 礎4点	
9	C1f	N-57°-W	楕円形	1.62×1.32	31	外傾	傾斜	自然	土器-5群1点・礎7点	
10	C1f	N-80°	楕円形	(1.77)×1.32	31	外傾	平直	擾乱	土器-3群1点・7群2点, 石厚1点, 礎10点	断面は軟弱, 地土, 西部に浅乱坑
12	C1g7	N-62°-W	楕円形	1.94×1.14	28	外傾	傾斜	自然	土器-3群2点, 礎17点	断面は軟弱, 確認面に薄い地土
14	C1f	N-14°-W	楕円形	1.80×1.12	29	外傾	傾斜	擾乱		断面は軟弱, 確認面に薄い地土
15	C1g7	N-23°-E	楕円形	1.16×0.90	32	外傾	傾斜	擾乱		
16	C1f	N-62°-W	楕円形	2.00×1.60	36	外傾	傾斜	擾乱		確認面に薄い地土
17	C1e	N-25°-W	長楕円形	3.90×1.68	31	外傾	傾斜	自然	礎3点	確認面に薄い地土
18	C1g		円形	1.4×(1.3)	35	外傾	傾斜	自然		第19号土坑と重複
19	C1g	N-38°-E	楕円形	1.36×(0.88)	26	外傾	傾斜	自然		第18号土坑と重複
20	C1e	N-20°-W	楕円形	1.80×1.24	31	外傾	凸凹	擾乱	土器-3群3点, 礎3点	北部に擾乱坑
21	C1h7		円形	1.84×1.70	32	外傾	傾斜	自然	土器-2群1点, 石厚1点, 礎7点	
22	C1h	N-5°-E	長楕円形	2.64×0.82	50	外傾	凸凹	人為	土器-1群1点・3群5点, 礎2点	北部に擾乱坑
24	C1g		円形	1.4×1.2	97	垂直	凸凹	自然		
26	C1g*		円形	1.03×0.98	31	外傾	平直	自然		
29	C1g*		円形	1.44×1.36	42	外傾	傾斜	人為	土器-3群1点・4群1点・5群2点, 礎4点	
30	C2g	N-22°-E	楕円形	1.04×0.78	22	外傾	風状	擾乱		
32	C2f	N-66°-W	楕円形	1.36×0.98	26	外傾	平直	自然		
33	C2h	N-68°-W	楕円形	1.18×0.92	21	外傾	平直	擾乱		
34	C1h7	N-90°-E	長方形	3.40×2.54	32	垂直	平直	擾乱	土器-2群16点・3群3個3点・4群1点, 礎7点	
35	C2j		円形	1.04×0.96	28	外傾	平直	擾乱		
36	C2j	N-50°-E	楕円形	1.50×1.24	31	外傾	平直	擾乱		
37	C1j	N-58°-E	楕円形	1.10×0.88	30	外傾	凸凹	擾乱		
38	D1a		円形	0.88×0.74	37	外傾	凸凹	擾乱		
39	D1b		円形	0.76×0.71	29	垂直	凸凹	擾乱		
40	D1b		円形	1.82×1.60	50	外傾	凸凹	擾乱	礎2点	北部に擾乱坑
41	D1b		円形	1.45×1.36	29	外傾	凸凹	擾乱	土器-4群2点, 礎1点, 炭化物	確認面に薄い地土
42	C1j	N-76°-E	楕円形	1.00×0.78	29	外傾	風状	自然		
43	C1j	N-50°-W	楕円形	1.50×1.20	23	外傾	凸凹	擾乱	土器-3群7点・5群1点, 礎4点	南東部に擾乱坑

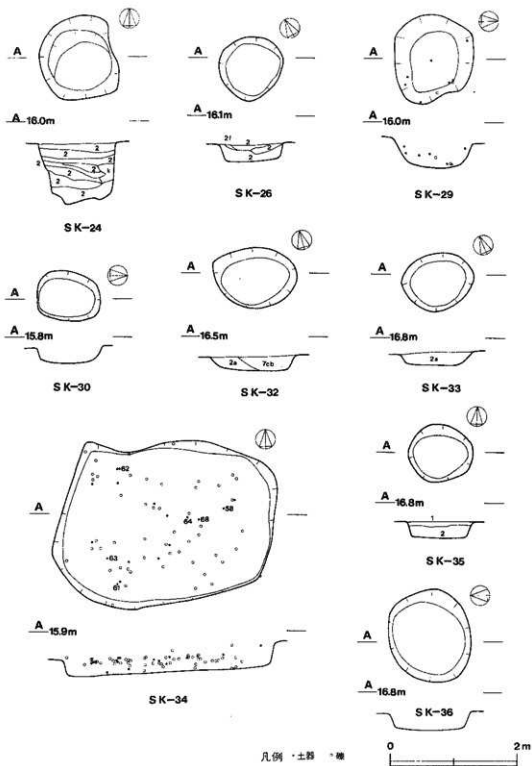
番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	裏面	礎土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	高さ(m)					
44	C11s	N-39°-E	楕円形	3.54×2.60	37	外傾	平坦	自然	土器-1群2点・2群2点・3群32点・4群2点・7群2点	
47	C11s	N-36°-W	長楕円形	1.80×0.92	82	垂直	傾斜	攪乱	礎1点	
48	C11s		円形	0.86×0.75	32	外傾	平坦	攪乱		
49	D1a6	N-36°-W	楕円形	1.80×1.40	47	垂直	傾斜	攪乱	土器-7群2点・礎3点	北西部に攪乱坑
50	D1a7	N-6°-W	楕円形	1.68×1.20	63	垂直	傾斜	攪乱	土器-3群2点・礎3点	北部に攪乱坑
51	D1b7	N-58°-W	長楕円形	1.64×0.88	70	外傾	凸凹	攪乱	土器-3群1点・礎1点	
52	D1d7	N-3°-W	楕円形	1.64×1.24	80	垂直	凸凹	攪乱	礎4点	底面に炭土粒子・炭化粒子
53	D1d7	N-30°-W	楕円形	1.26×0.96	30	垂直	平坦	攪乱	土器-3群2点・礎1点	
56	D1d8	N-47°-W	不定形	1.46×1.32	35	外傾	平坦	自然		
57	D2b6	N-57°-W	楕円形	1.74×1.04	22	外傾	平坦	攪乱	土器-2群1点・3群1点	
59	D3bz		円形	8.60×7.40	23	外傾	皿状	自然		
60	D3bz	N-56°-W	楕円形	1.24×1.04	26	外傾	凸凹	自然		焼土が薄くレンズ状に堆積
61	D3bz		円形	0.74×0.64	21	外傾	凸凹	自然		焼土が薄くレンズ状に堆積
62	D2e5	N-78°-W	不定形	1.72×1.36	39	外傾	傾斜	攪乱	土器-4群2点・5群1点・礎3点	
63	D1i0	N-68°-W	不定形	2.28×2.00	18	外傾	傾斜	攪乱	土器-4群2点・礎1点	
64	D1j0		円形	2.28×2.00	16	外傾	傾斜	自然	土器-4群3点・炭化材5本	
65	D1f8		円形	1.64×1.43	35	外傾	傾斜	自然	礎1点	
66	D1c9		円形	1.04×1.00	40	外傾	平坦	自然		
68	C11s	N-4°-W	楕円形	1.30×1.04	58	外傾	皿状	攪乱		
69	D2j4		円形	1.50×1.32	20-30	外傾	凸凹	攪乱	土器-3群3点・4群13点・礎2点	底面に硬い部分あり
70	E2a5		円形	0.60×0.54	34	外傾	皿状	攪乱		
71	E2c4	N-43°-E	楕円形	1.14×0.84	26	外傾	凸凹	攪乱		
72	E2b7		円形	0.94×0.82	24	外傾	凸凹	自然		
73	E2e6	N-38°-E	楕円形	0.96×0.80	18	外傾	平坦	自然		焼土が薄くレンズ状に堆積
74	E2d9	N-39°-E	楕円形	1.28×1.03	22	外傾	凸凹	攪乱	礎1点	
75	E3a3	N-34°-E	楕円形	2.32×1.81	33	外傾	凸凹	自然		焼土が薄くレンズ状に堆積
76	D1d0		円形	1.08×0.92	31	外傾	平坦	自然	土器-2群1点・礎3点	
77	C1j0		円形	1.12×1.02	23	外傾	凸凹	攪乱		
78	C2g4	N-50°-W	楕円形	1.58×1.10	22	外傾	平坦	自然		
79	C2i6		円形	1.02×0.87	20	外傾	平坦	自然		



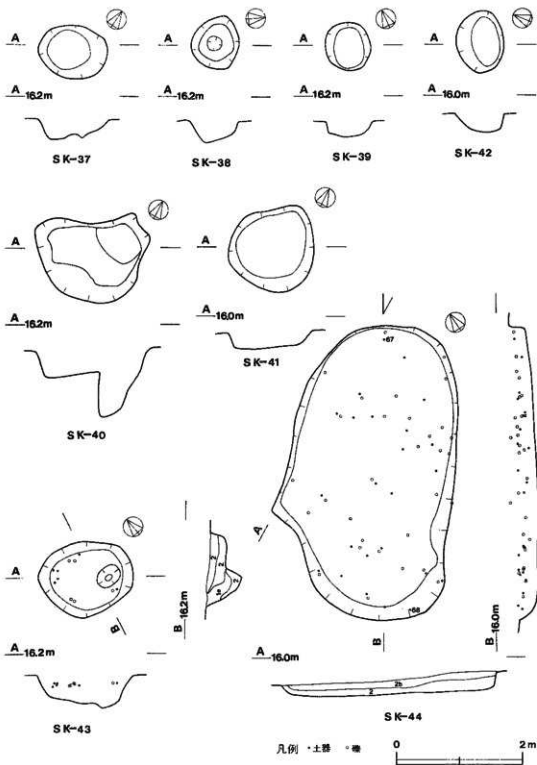
第26图 奥山C遺跡土坑実測図(1)



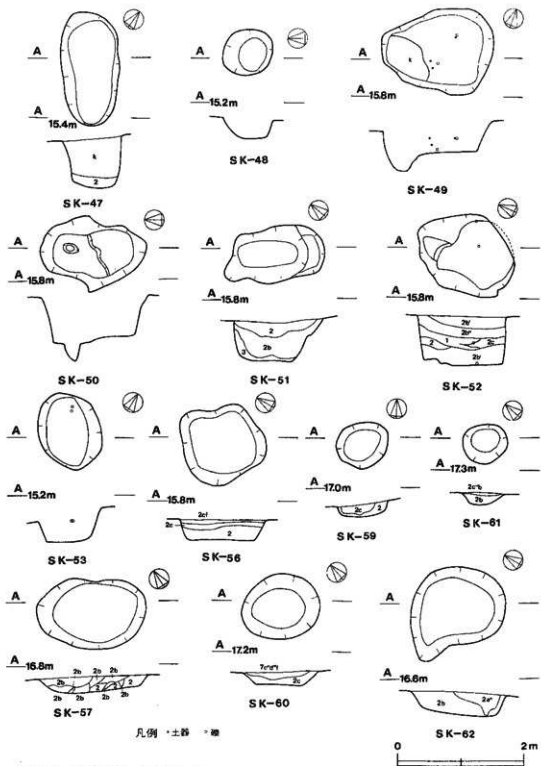
第27图 奥山C遺跡土坑実測図(2)



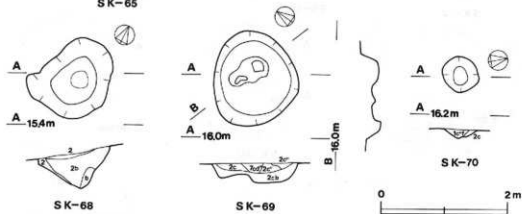
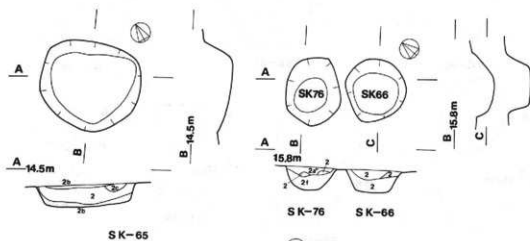
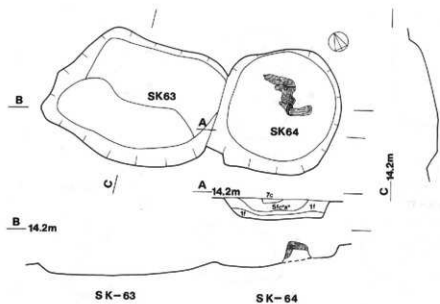
第28図 奥山C遺跡土坑実測図(3)



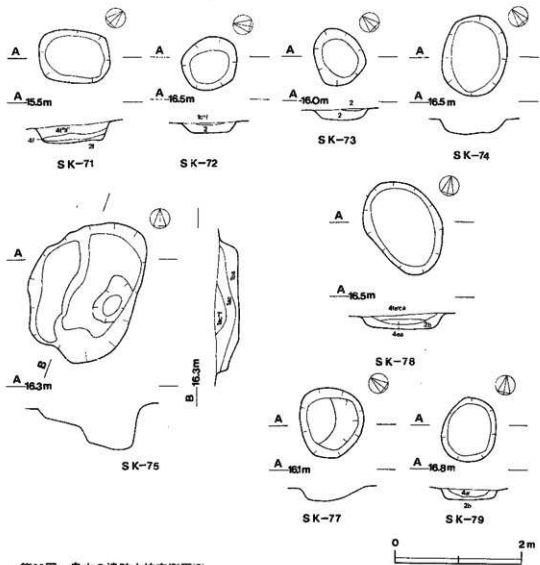
第29图 奥山C遺跡土坑突測図(4)



第30图 奥山C遺跡土坑突測図(5)



第31圖 奥山C遺跡土坑実測図(6)



第32図 奥山C遺跡土坑実測図(7)

土坑出土遺物

第20号土坑出土遺物 (第33図)

45・46は、確認面付近から出土した沈線文系の土器である。45は口縁部片で、口唇部が角頭状を呈し、外面は細目の沈線文が横位に施されている。46は胴部片で、外面は細目の沈線文が斜位と横位に交互に施文されている。

第22号土坑出土遺物（第33図）

47～51は、確認面付近からまとまって出土した。47は、口縁部片で口縁は丸く肥厚し、肥厚した上に縄文が施文されている。外面は横位に縄文が施文されている。48・49は口縁部片で内・外面は無文である。48は口縁部が短くて、外反している。49の口唇部は角頭状を呈している。50は口縁部片で、外面は浅目の細沈線が斜位にまばらに施文されている。51は胴部片で、外面に沈線が格子状に施されている。52は胴部片で、外面に短沈線が横位に施されている。53は胴部片で、外面に浅目の平行沈線文が施されている。

第29号土坑出土遺物（第33図）

54は、覆土上位から出土した胴部片で、外面に縦位の削り調整が施されている。拓本の下部に平行の結節状の沈線が巡っている。

第34号土坑出土遺物（第33図）

55～64は、覆土から出土した縄文土器片である。55～57は胴部片で、外面に細目の縄文が施されている。覆土の上位と下位から出土した土器片が接合している。56は、覆土上位、57は、覆土下位から出土している。58～64は、覆土上位の同レベルから出土し、58～61は内・外面無文の口縁部片である。32は、小形の土器で、内・外面ともていねいに削り調整が施されている。胎土は緻密で、焼成は良好である。59・61は、口唇部が角頭状を呈し、胎土は砂を含み、外面はザラザラしている。60は、内そぎ状の口縁部で、外面に平行沈線文が施されている。62・63は、角頭状を呈する口縁部片で、62は、細沈線が、63は、平行沈線が施されている。64は胴部片で、外面に細沈線が横位と縦位に施されている。

第41号土坑出土遺物（第33図）

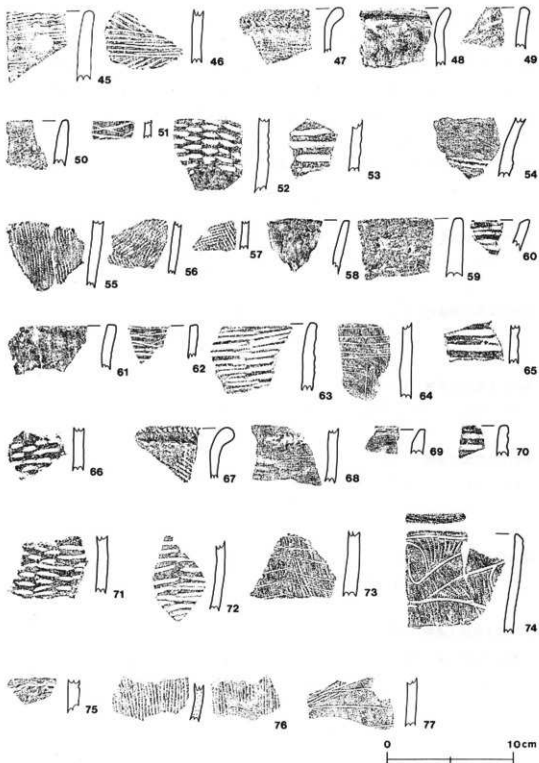
65は胴部片で、外面に平行沈線文が施されている。

第43号土坑出土遺物（第33図）

66は、覆土上位から出土した胴部片で、外面に平行短沈線文が施されている。

第44号土坑出土遺物（第33図）

67～76は、覆土中位から上位にかけて出土した縄文土器片である。67は口縁部片で、口縁部がゆるく外反し、端部は丸く肥厚している。口唇部に縄文が施され、外面は無文部を間において斜位に縄文が施文されている。68は胴部片で、内・外面とも無文で削り調整されている。69は内そ



第33图 奥山C遗址土坑出土土器拓影图(1)

ぎ状を呈する口縁部片で、外面に68と同様の沈線文が施されている。70は口縁部片で、口唇部は角頭状を呈し、外面は平行沈線が施されている。71は胴部片で、外面に短沈線文が施されている。72は胴部片で、外面に平行沈線文が施されている。73は胴部片で、細沈線文が羽状に施されており、明らかに二次焼成を受けている。74は、外そぎ状を呈する口縁部片で口唇部の内面側の角に浅目のキザミ目が施されている。外面は、沈線が横位に2条に巡り、その沈線の間沈線による曲線的モチーフが描かれ、モチーフ内にアナタラ料の貝の腹縁による押圧文が充填されている。75は胴部片で、結節沈線文が施されている。76は胴部片で、内・外面に条痕文が縦位に施されている。

第50号土坑出土遺物（第33図）

77は胴部片で、細沈線文が横位に施されており、沈線文系の土器である。

第53号土坑出土遺物（第34図）

78は内そぎ状を呈した口縁部片で、外面は刺突文と細沈線文が横位に交互に施されている。

第59号土坑出土遺物（第34図）

79は口縁部片で、外面は無文で凸凹である。胎土は繊維を含んでいる。

第63号土坑出土遺物（第34図）

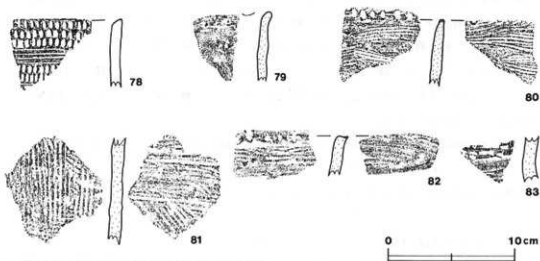
80は口縁部片で、口唇部にキザミ目が施されている。内・外面は条痕文が施され、胎土は繊維を含んでいる。

第64号土坑出土遺物（第34図）

81は胴部片で、内・外面に条痕文が施されている。胎土は繊維を含んでいる。

第69号土坑出土遺物（第34図）

82は口縁部片で、口唇部にキザミ目が施されている。内・外面は横位に条痕文が施されている。胎土は繊維を含んでいる。



第34図 奥山C遺跡土坑出土土器拓影図(2)

4 遺構外出土の遺物

奥山C遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文土器片4,670点、土製品3点、石器類33点、硯4,228点である。

縄文土器

縄文土器はすべて破片で、早期から中期にかけてのものが出土している。出土量は早期燃糸文系土器114点、同期無文土器150点、同期沈線文系土器1,651点、同期条痕文系土器1,723点、前期前葉の土器614点、前期後葉の土器161点、中期の土器257点と圧倒的に早期の土器が多い。早期の土器はC1・D1区を中心に堆積している赤味の強い黄褐色の土層から出土している。

出土した縄文土器を時期と文様などの特徴から、次のように分類した。土器の出土した地点は表6に小調査区名で記載した。

1群の土器

縄文時代早期前葉に属する土器を本群とする。

1類 (第35図 84~109)

口縁部は強く外反し、口縁端部が肥厚しまるまっっており、外面に細かな縄文が施文された土器を本類とする。色調はふい黄橙色が多く、胎土は多量の砂と雲母を含み、器面がザラザラする。焼成はやや不良である。

84～100は、口縁部の小片で、外面と口唇部に細かな目の縄文が施文されている。外面の縄文は、84・86・96・98が横位に施文されている。92の外面は、横位に施文され以下は縦位にまばらに施文されている。88・90・91の外面は、口縁と胴部上位との間に無文帯ができていて、以下は縄文が密に施文されている。90～97の口縁下には、指頭圧痕が認められる。87・100の口唇部には、縄文の上に、棒状工具の指圧によるキザミ目が施されている。98・99の口唇部には、縄文原体の押圧文が1条施文されている。

101～109は胴部片で、縄文が縦位に施文されている。101は、上位に縄文が横位に施文されており、口縁部に近い破片と思われる。

本類の土器は井草Ⅰ式に比定されと思われる。

2類 (第35図 110～115)

口縁部の器形はやや1類に類似するが、外面に燃り糸文が縦位に施文された土器を本類とする。色調は橙色で、胎土は多量の細砂と雲母を含み、焼成はやや不良である。

110・111は口縁部片で、110は口縁が丸く外側へ肥厚する。外面に燃り糸文が縦位に施文されている。111は、110に比べ口縁があまり肥厚していない。

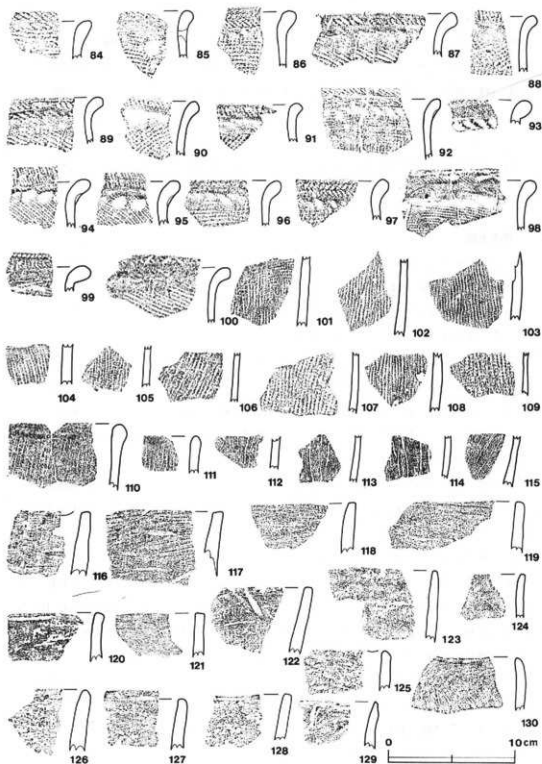
112～115は胴部片で、器厚が4～5mmである。外面は縦位に燃り糸文が施文されている。

本類の土器は稲荷台式に比定されと思われる。

2群の土器 (第35・36図 116～149)

無文の土器を本群とする。外面に削り調整の認められるものがある。口縁部は波状を呈するものと、平縁のものがあり、色調は橙色とにぶい橙色が多い。胎土は多量の砂と雲母を含むものが多く、外面がザラザラしたものが目立つ。焼成は多くの土器が普通で、削り調整の認められる土器は良好である。

116～144は口縁部片で、これらのうち116・125・132・140・141は口縁が波状を呈すると思われる。口縁部はほぼ直立するか外傾するものが多く、119・130の口縁部はやや内彎するものと思われる。116～124の口縁は、角頭状を呈しており、外面はいずれも横位のナデ調整が認められる。118の色調は、外面が黒褐色で、内面が橙色である。125・126の口縁は外そぎ状で、いずれの土器も外面は横位のナデ調整が認められ、ザラザラしているが、内面は滑らかに調整されている。126～128の色調は、外面がにぶい橙色で、内面が黒褐色となっている。129は器厚が7mmと薄く、外面は斜位に削り調整されている。130の外面も削り調整されている。131～134の口縁は内そぎ状を呈し、131・132は内・外面が削り調整されている。135～143の口縁は丸まっており、140と143の外面は削り調整されている。138と139には補修孔が穿たれている。144は口縁が丸まっており、口唇部に



第35图 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影图(1)

は棒状工具の押圧によるキザミ目が施されている。

145～147は胴部片で、145の外面は斜位または横位に削り調整されている。146・147の外面は砂の移動が認められ、ザラザラしている。色調はいずれも、外面が橙色で内面が黒褐色である。

148・149は底部片で、尖底を呈している。148は尖底が直線的に尖がり、外面は削り調整されている。149は尖底の先端が丸まっている。いずれも胎土は長石・石英を特に多く含み、外面はザラザラしている。

本群の土器は、口縁部が角頭状を呈するもの、内そぎ状を呈するものなどがあり、沈線文系の土器に類似していることから沈線文系の土器に並行する時期と思われる。

3群の土器

縄文時代早期沈線文系の土器を本群とする。

1類（第36図 150～178）

細沈線で文様を構成した土器を本類とする。色調は橙色または赤色で、胎土は細砂と雲母を多量に含む。焼成は良好なものやや不良のものがある。

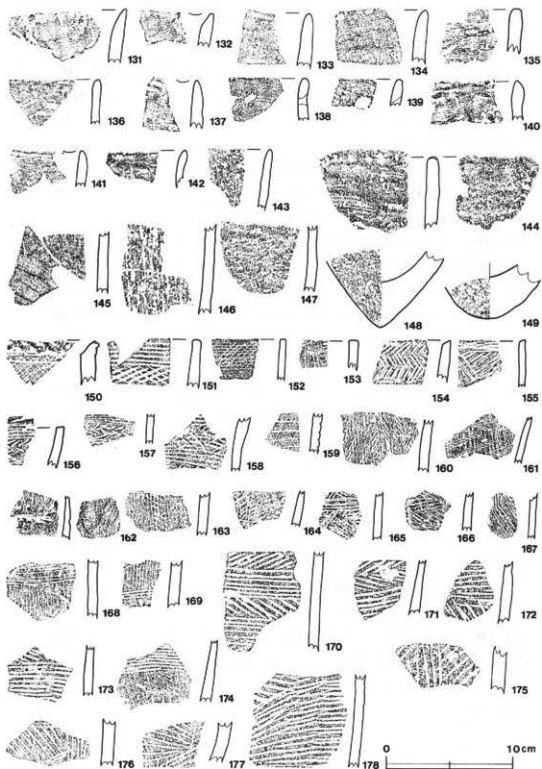
150～158は口縁部片で、150・154・155は口縁が内そぎ状を呈し、他は角頭状を呈している。150は口唇部外面側の角が押圧され、外面は上端に際帯が弧状に貼り付けられている。その下に沈線が2条巡り、以下は沈線による格子文が施されている。151の外面は平行に沈線が6条巡り、以下は沈線による平行四辺形の格子文が施されている。152の外面は口縁下に細沈線が巡り、その上を斜位に細沈線を部分的に施文し、格子文を描いている。153は、口縁下に斜位の沈線文と横位の沈線文が交互に施文されている。154の外面は、沈線による綾杉状文が施文されている。155は口縁下に沈線文が横位に施文され、以下は細沈線文がV字状に施文され、その中に斜位の沈線文が充填されている。156は平らな口唇上に浅めの沈線が施文されている。外面は短沈線を斜位に施し、綾杉状の文様を構成している。胎土は多量の黒雲母を含んでいる。

157～178は胴部片である。157は156と同様の文様が施文されており、同一個体と思われる。160～164は、2～4本の平行な細沈線の間を斜位に短沈線が施文されて帯状文を描いている。165～166は細沈線が横位と斜位に施され、幾何学的文様を描いている。170～178は、細沈線よりやや太目の沈線を横位または斜位に施している。

本類の土器は三戸式に比定されると思われる。

2類（第37図 179～212）

刺突文と細沈線文の組み合わせ文様が施文された土器を本類とする。色調・胎土・焼成は1類に類似している。



第36图 奥山C遺跡遺構外出土器拓影(2)

179～182は口縁部片で、口縁が内そぎ状を呈している。179の口縁下には、刺突文が横位に3条巡り、以下は細沈線文が横位に巡る。刺突文は先が鋸歯状のへら状工具を横から45度の角度に刺突し、粘土を削り取るようにして施文されている。同様の刺突文が181・183・184・186にも認められる。181は口縁下に細沈線が断続的に巡り、以下は刺突文が施文されている。182は口唇部が外側へはみ出ており、直下に押圧文が巡っている。以下は細沈線文が3条、三角形の刺突文が横位に3条、交互に施文されている。

183～193は胴部片で、刺突文と細沈線文が施文されている。184・185は刺突文と沈線文が交互に施文されている。185・188～191の刺突文は、長径2mmほどの楕円形を呈している。192・193の刺突文は、先端をV字状に切り取った半截竹管が使用されたと思われる。

194～210は胴部片で、半截竹管を使用した沈線と刺突文で幾何学的文様が描かれている。

195～200の刺突文は平行沈線間に施文されている。203には縦に刺突し、その両側を盛り上げた隆帯が認められる。204～207は、平行沈線間に沈線が斜位に充填され、この平行沈線の両側または片側には、三角形を呈した刺突文が施文され文様帯を構成している。この文様帯は幾何学的文様を描いている。208は2本単位の沈線で菱形を描いている。209・210には刺突文が認められないが、文様構成で判断して同一種とした。

211は口縁部片で、口縁が角頂状を呈している。口縁下に細沈線が9条巡り、その下に楕円形を呈した深くて小さな刺突文が3条巡り、以下は細沈線文が施文されている。212も211と同様の文様を構成しており、口縁に近い胴部片である。

本類の土器は三戸式に比定されると思われる。

3類

沈線の幅が2mm以上の平行沈線が施文された土器を本類とする。色調は橙色やにぶい橙色が多く、胎土は細砂・雲母を含むものが多い。焼成は普通または良好である。

3類 a種 (第37図 213～218・221)

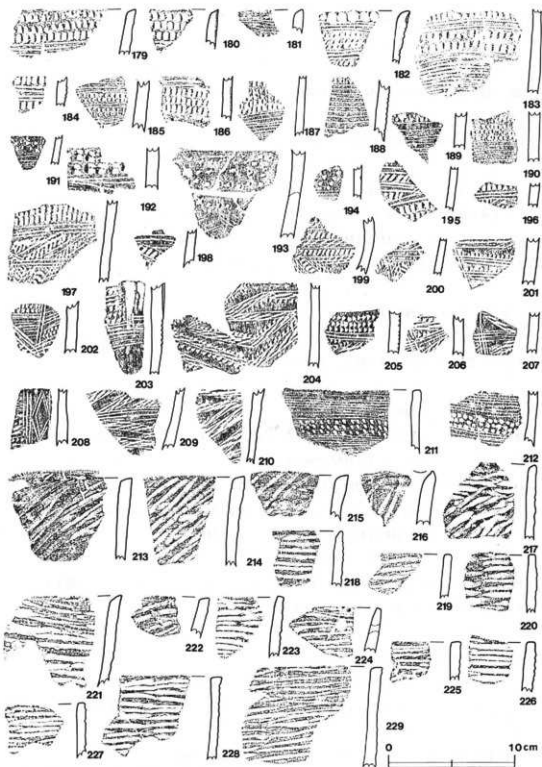
3類の土器のうち、口縁が内そぎ状のものを本種とする。

213～218・221は口縁部片である。213～217は平行沈線が斜位に施文されていて、213～216は沈線の影りが浅い。218・221の外側は、平行沈線が横位に施され、内側は上位が横位の削り、以下は縦位の削り調整が施されている。

本種の土器は三戸式に比定されると思われる。

3類 b種 (第37図 219～236)

3類の土器のうち、平行沈線が横位に施された土器を本種とする。



第37图 奥山C遗址外出土土器拓影图(3)

219・220・222～229は口縁部片で、角頭状の平縁となっている。219の外面は、彫りの浅い平行沈線が施文されている。220の内面に幅1cmほどの断面皿状の削り痕が認められる。227～229は彫りの深い沈線である。

230～236は胴部片である。232～234は器厚が5mmほどの薄手な土器で、彫りの浅い沈線文が密に施文されている。

本種の土器は三戸式か田戸下層式に比定されると思われる。

3類c種（第38図 237～240）

平行沈線が縦位に施文された土器を本種とする。当遺跡で比較的出土量の多い土器である。

237～239は口縁部片で、237・239は外そぎ状を呈している。240は胴部片である。

本種の土器は三戸式か田戸下層式に比定されると思われる。

3類d種（第38図 241～244）

平行沈線が斜位に施された土器を本種とする。241は口縁部片で、242～244は胴部片である。

本種の土器は三戸式か田戸下層式に比定されると思われる。

3類e種（第38図 245～255）

幅が4～6mmと比較的広い沈線による平行沈線文の施文された土器を本種とする。器厚が厚く大形の土器が多い。平行沈線文は横位に施されている。

245～249は口縁部片で、250～255は胴部片である。245の口縁は角頭状を呈し、246・247の口縁は先細りとなり、口唇部が平らになっている。246・250・254の外面は、沈線がまばらに施文されている。土器の内面は246・247が横位に、248が斜位に、249～251が縦位にナデ調整されている。252・253の胎土は、長石・石英の大きな粒を含む。

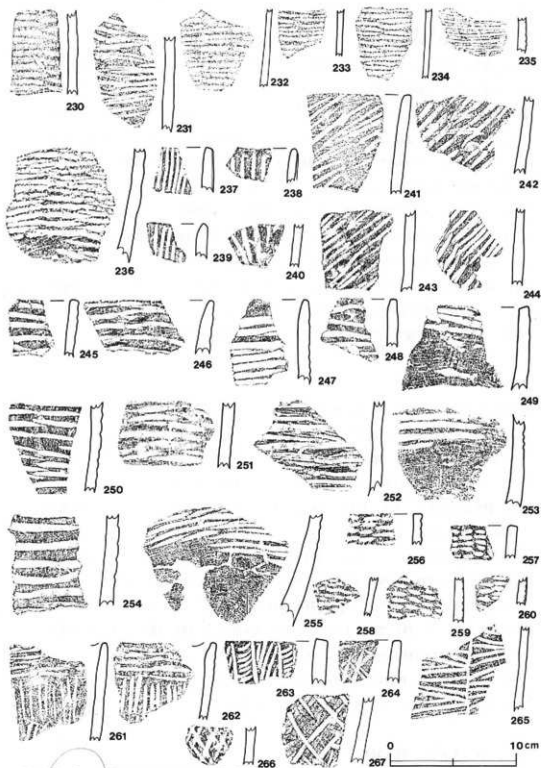
255は底部近くの胴部片で、底部付近は無文帯となっている。底部は尖底になると思われる。

本種の土器は三戸式か田戸下層式に比定されると思われる。

4類（第38図 256～260）

短沈線の施された土器を本類とする。短沈線は横位に1cmほどの長さにえぐり取るように施文されている。色調は外面が橙色で、内面がにぶい褐色である。胎土は細砂を多量に含み、焼成は普通である。

256・257は口縁部片で、口縁が角頭状を呈している。258～260は胴部片である。



第38图 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影(4)

本類の上器は三戸式に比定されると思われる。

5 類 (第38図 261~274)

沈線を横位、縦位、斜位に施して、文様を描く上器を本類とする。色調は橙色が多く、胎土は細砂を多量に含む。焼成は普通である。

261~264は口縁部片である。261・262は波状を呈し、口縁の内側が削り調整され、口唇部は平らになっている。261・262の外側は上位を横位に、以下を縦位に、浅めの平行沈線が施文されており、内側は縦位にナデ調整されている。263の口縁部は外そぎ状の平縁であり、器厚は1cmを測る。外側は縦位に沈線が間をおいて施文され、その中に弧状の沈線を充填した区画と斜位の沈線を充填した区画が交互に配置されている。内側は横位にナデ調整されている。264は角頭状を呈する口縁部片で、外側は浅めの沈線で格子状に施文されている。266は、264と同様の文様が描かれており、同一個体と思われる。内側は横位にナデ調整されている。

265~274は胴部片で、斜位の沈線文を主に、それに横位・縦位の沈線文を加えて文様が構成されている。269の色調は赤色で、強く二次焼成を受けている。

本類の上器は田戸下層式か田戸上層式に比定されると思われる。

6 類

幅1mmほどの平行細沈線文が主に施された上器を本類とする。色調は橙色で、胎土は細砂、雲母、スコリアを含む。焼成は普通である。

6 類 a 種 (第39図 275~299)

6 類の土器のうち、細沈線のみが施文された土器を本種とする。

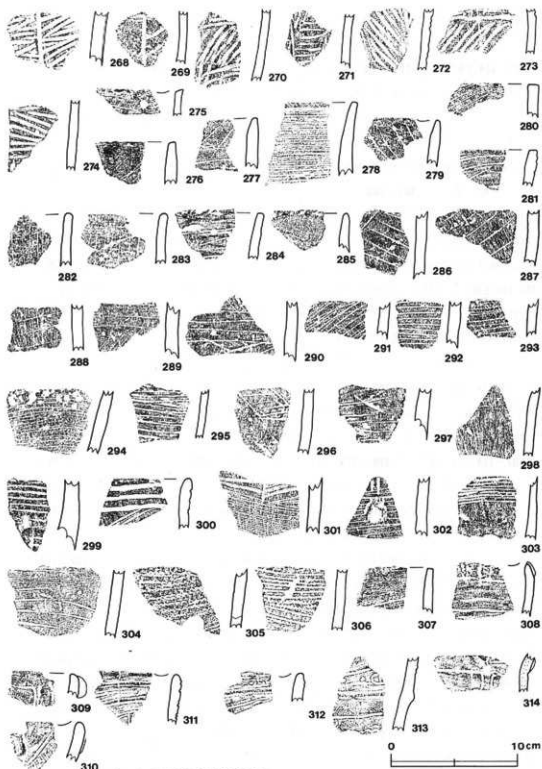
275~285は口縁部片である。275は、口縁が内そぎ状を呈し、外側に斜位の細沈線が施されている。276~279の口縁は、内側が削られているので、口唇部は狭くなるが、平らである。276の外側は無文部を間に細沈線が斜位に施され、277の外側は口縁下に細沈線がまばらに斜位に、以下は横位に施されている。278の口縁部は外反し、外側に細沈線による条線文が横位に施されている。279の外側は細沈線が斜位に施されている。280・281は角頭状を呈する口縁部片で、外側は細沈線が斜位に施されている。282~285は丸頭状を呈する口縁部片で、282・283の外側は細沈線が縦位に施されている。284・285の外側には、わずかに斜位の細沈線が認められる。

286~299は胴部片で、299は底部付近の破片で、底部は尖底を呈するものと思われる。

本種の土器は三戸式か田戸下層式に比定されると思われる。

6 類 b 種 (第39図 300~304)

6 類の土器のうち、細沈線とこれより太い沈線を組み合わせて文様を構成する土器を本種とする。



第39图 奥山C遗址遗址外出土土器拓影图(5)

300は口縁部片で、口縁部はやや外反し、口唇部は丸頭状を呈する。外面は口縁下に沈線が3条横位に巡り、以下は細沈線文が2本単位で斜位に施される。

301～304は胴部片で、301～303は沈線文の下に細沈線文が施され、304はその逆となっている。本種の土器は三戸式か田戸下層式に比定されられると思われる。

7類

貝殻腹線文が施文された土器を本類とする。

7類a種(第39図 305・306)

7類の土器のうち、加工されない貝殻で施文された土器を本種とする。

305・306は胴部片で、305の外面はアナタラ科の貝殻の腹縁が横位にぎっしり押圧されている。下部に補修孔が認められる。色調は橙色で、胎土は細砂と雲母が多く含まれ、焼成は普通である。306は細沈線による横位の沈線文の中に、アナタラ科の貝殻の腹縁が2本単位に押圧されている。色調は橙色で、胎土は細砂、雲母を含んでおり、焼成は普通である。

本種の土器は田戸下層式に比定されられると思われる。

7類b種(第39・40図 307～319)

7類の土器のうち、加工されたと思われる貝殻で施文された土器を本種とする。色調はぶい橙色で、胎土は砂と繊維が含まれており、焼成は普通である。

307～314は口縁部片で、308・310～312は波状を呈する。307は口縁が角頭状を呈し、外面はアナタラ科の貝殻腹縁が、斜位または横位に押圧されている。以下は細沈線が横位に施文されている。308～311の口縁上端外面はまるまっている。308は口縁上端に楕円形の浮文が2個貼付され、その貼付文上にアナタラ科の貝殻腹縁が横位に押圧されている。外面は口縁下にくさび形の結節沈線が巡っている。以下無文帯を間に上記の結節沈線を略した沈線が巡っている。309は口縁下に耳状に突起を貼り付け、この突起の左側に沈線による区画文が施文されている。この区画内と口唇部にキザミ目が施文されている。310の外面は、波頂下に隆帯が縦位に貼り付けられており、隆帯は左へ直角に曲がっている。隆帯の両端に沈線が施文されている。口縁から沈線が斜め下方へ施文され、その沈線に対し直角方向に貝殻腹縁文が押圧されている。311の外面は、2本の低い隆帯が横位に巡り、楕円形区画を描いていると思われる。この隆帯上にはアナタラ科の貝殻腹縁押圧が認められ、隆帯の両側には沈線が施文されている。この区画内には結節沈線が横位に施文され、端部には円形刺突文が施されている。312の内面には補修孔が途中まであけられている。311～314は同様の文様と器形の土器で、口縁部はやや内彎しながら開いて立ち上がるものと思われる。

315～318は、胴部片である。315は平行沈線間に貝殻文が押圧されており、310と同一種のもの

と思われる。317の外表面は沈線がクランク状に施され、沈線上にはアナダラ科の貝殻腹縁が押圧されている。318・319の外表面には、貝殻腹縁の押圧が認められ、胎土には、繊維の混入が認められる。319の外表面は、縦位に磨かれている。

本種の土器は田戸上層式に比定されると思われる。

8類 (第40図 320～325)

3群の土器のうち、1～7類までにあてはまらない土器を本類とする。ごく少量の出土であった。

320・321は丸頭状を呈する口縁部片で、外表面は先端が円弧状の工具を上から45度の角度で刺突し、施文している。胎土は細砂を特に多く含み、器面がザラザラしている。焼成は普通である。

322～324は胴部片で、322は無文地に縦位に3本の平行沈線を施文し、まん中の区画に爪形文、その両側の区画に先の尖った工具による刺突文が充填されている。色調は内・外表面が浅黄橙色で、断面部が黒褐色である。胎土は繊維・細砂・雲母・スコリアが含まれる。焼成は不良である。323は、細沈線が横位と斜位に施文されている。色調はにぶい黄橙色で、胎土は多量の細砂を含み、器面がザラザラしている。焼成は不良である。324は、無文地に長い刺突文が上から下へ施文されている。色調は内・外表面が橙色で、断面部が黒褐色である。胎土は細砂・繊維・雲母・スコリアが含まれる。焼成はやや不良である。

320・321・325は田戸下層式、322～324は田戸上層式に比定されると思われる。

9類

3群の土器の底部を本類とする。

9類a種 (第40図 326)

刺突文の施文された尖底の土器を本種とする。

326の外表面は沈線で弧文が描かれ、間に刺突文が充填されている。色調は橙色を呈し、胎土は細砂を含む。焼成は普通である。

本種の土器は三戸式に比定されると思われる。

9類b種 (第40図 327・328)

尖底を呈し、沈線文が施された尖底の土器を本種とする。

327は先端部が欠損している。外表面は沈線文が斜位に施されている。色調・胎土・焼成は1類と同じである。

本種の土器は三戸式か田戸下層式に比定されると思われる。

9類c種 (第40図 329-345)

外面に削り痕だけが認められる尖底土器のうち、尖底部の開く角度が大きいものを本種とする。先端部がすどく尖っているものが多い。

329は横位に、332・342は斜位に削られているが、その他は縦位に削られている。329・330・337・341は器面がザラザラで焼成もやや不良である。その他の土器は器面が滑らかである。344・345は薄手であり、小形の土器と思われる。

本種の土器は三戸式に比定されると思われる。この他に図に掲載できなかったが、田戸下層式に比定される天狗鼻のように比較的長い尖底土器が3点ほど出土している。

4群の土器

縄文時代早期条痕文系の土器を本群とする。

1類

微隆起線文が施されている土器を本類とする。

1類a種 (第41図 346-352・354)

1類の土器のうち、条痕文がほとんど認められない土器を本種とする。微隆起線文は高さが1mmほどで先端が尖っている。微隆起線による区画は直線的なモチーフである。器厚は5~7mmほどで薄手なつくりである。色調はにぶい赤褐色で、胎土は、石英・長石の大きな粒、雲母を特に多く含んでいる。繊維は少量認められる。焼成は良好で焼きが硬い。

346~351は口縁部片で、353・354は胴部片である。346~348は口唇部が外そぎ状を呈し、346・347の口唇部に絡糸体圧痕が施されている。347・348には小突起が2つ並んで貼り付けてあり、348の小突起上には絡糸体圧痕が施されている。349の口唇部は平らで、へら状工具によりキザミ目が施されている。口唇上に小突起が2つ並んで貼り付けてある。350の外面上端には、浅い絡糸体圧痕が認められる。351は小形の上器であると思われる。

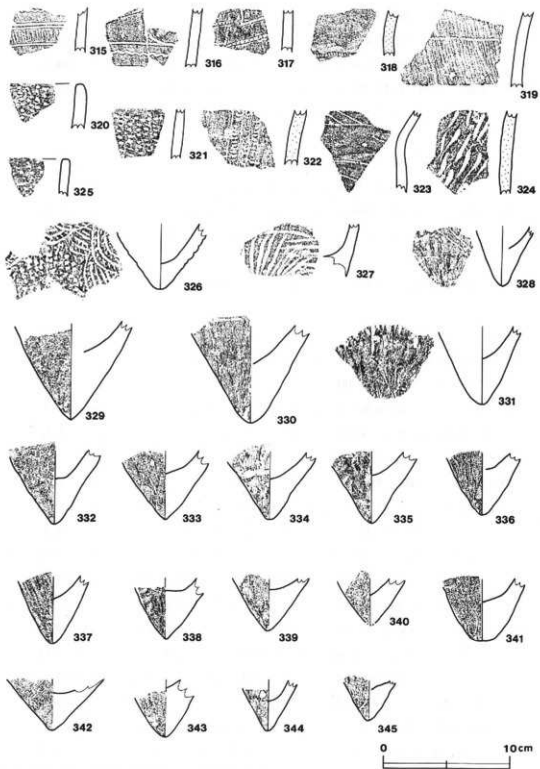
本種の土器は野島式に比定され、なかでも古い時期のものと思われる。

1類b種 (第41図 353・355)

1類の土器のうち、微隆起線は高さが1mm未満の低くなだからで、条痕文が浅めに施されている土器を本種とする。色調はにぶい赤褐色で、胎土は繊維の他に細砂を多量に含む。焼成は普通である。

353・355はいずれも胴部片で、353は器厚が薄く、355は厚い。

本種の土器は野島式に比定されると思われる。



第40图 奥山C遺跡 遺構外出土土器拓影图(6)

1 類 c 種 (第41図 356・357)

1 類の土器のうち、微隆起線で区画された中に沈線文を施した土器を本種とする。微隆起線は 4 種より太い。内面と外面の沈線文の施文されてない部分は条痕文が施されている。356は胴部片、357は口縁部片で、同一個体と思われる。色調はにぶい赤褐色で、多量の細砂と繊維を含む。

本種の土器は野島式に比定されると思われる。

1 類 d 種 (第41図 358)

1 類の土器のうち、沈線文で区画された中に沈線文が施された土器を本種とする。

358は胴部片で、断面形が四角形で幅が1.1cmほどの沈線が縦位に施され、その中に幅2～3cmほどの沈線が斜位に施されている。色調は内・外面がにぶい橙色で、断面は黒褐色である。胎土は細砂と繊維を含む。

本種の土器は野島式に比定され、なかでも新しい時期のものと思われる。

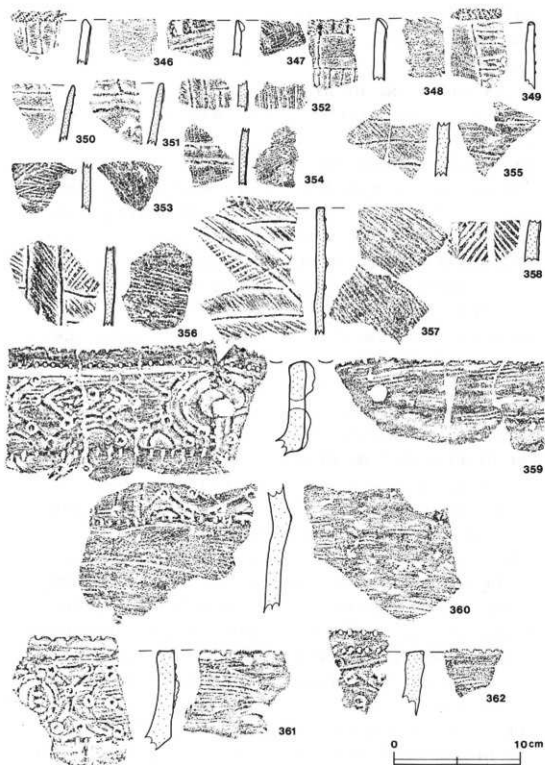
2 類

口縁部文様帯は刺突文を主とした文様が施された土器を本類とする。

2 類 a 種 (第41・42図 359～364)

2 類の土器のうち、微隆起線や刺突文、円形竹管による押圧文などにより構成されたものを本種とする。色調は内・外面が浅黄褐色で、断面が黒褐色である。胎土は多量の繊維と長石・石英の粒・細砂を含む。焼成は不良である。

359は口縁部片で、360の胴部片と同一個体と思われる。この土器の器形は胴部に二段くびれを有し、はは平縁を呈しているものと思われる。口唇部は平らで、内・外面との角には、棒状工具の押圧によるキザミ目が施されている。口縁部は縦に隆帯を貼り付けてある。この隆帯上にはキザミ目が施され、上端と口唇部はもり上がっている。隆帯の中央やや上に親指大のへこみがある。なお、へこみの右下に孔がある。これは焼成後にあけられた補修孔である。この隆帯を境に口縁がカーブし、左側の口縁部は平面になっているので、口縁部は多角形状となっていたと思われる。隆帯の中心やや上に親指大のへこみがある。このへこみを中心に、微隆起線による円弧文が2条描かれている。この円弧文と、口縁下に巡る微隆起線の間に、微隆起線による三角形や円弧の文様が描かれている。拓影図中央の変形を早する微隆起線区画内には結節沈線文が充填されている。また三角形の区画内には竹管状工具による刺突文が充填されている。微隆起線と微隆起線の交点などの微隆起線上には円形竹管状工具による押圧が施されている。胴部は、二段くびれがあって、胴部上部には口縁部と同様の文様が施され、胴下部には横位の条痕文が施文されているものと考えられる。口縁部、胴上部、胴下部の境の隆帯上にはキザミ目が施されている。



第41圖 奥山C遺跡 遺構外出土土器拓影(7)

361～364は口縁部片で、359に類似した文様が描かれている。

本種の土器は鶴ヶ島台式に比定されると思われる。

2類b種(第42・43図 365～377・379)

2類の土器のうち、口縁部文様は刺突文が主に施され、刺突文と刺突文の交点に円形押圧が施された土器を本種とする。

365は口縁部片で、366の胴部片とはは同一の土器と思われ、胴部に二段のくびれを有している。口唇部は外面との角にのみキザミ目が施されている。外面の刺突は三日月状を早し竹管状工具を押し引くようにして施文されている。刺突文により三角形・菱形に区画され、区画内には同様の刺突文が充填されている。胴上部と胴下部の境をなす断面三角形の隆帯上にはキザミ目を有するが、胴上部と口縁部との境をなす隆帯上にはキザミ目が施されていない。内面は条痕文が認められない。色調は内・外面が橙色で、断面が黒褐色である。胎土は繊維・細砂を含み、焼成はやや不良である。

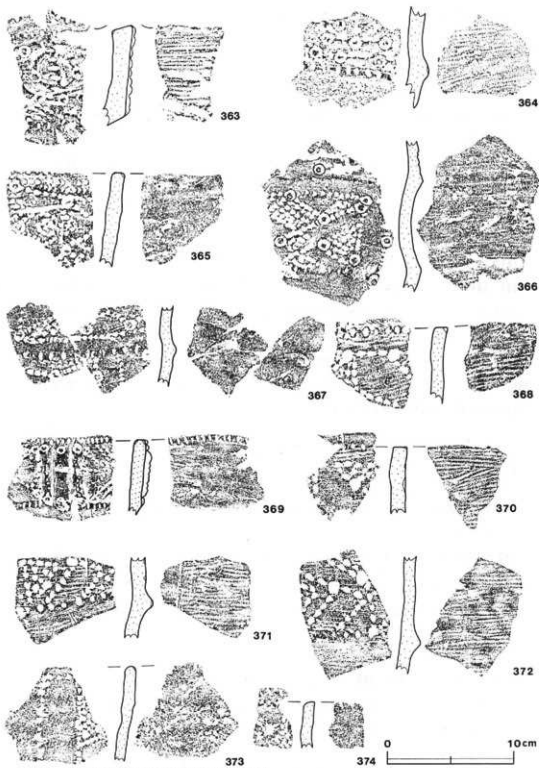
369は口縁部片である。口唇部の両角にはキザミ目が施されている。口縁部外面には、断面三角形の隆帯が縦に2条平行に貼り付けてある。隆帯上にはキザミ目が施されており、隆帯の間の空間部の上と下には円形竹管文が1こずつ施されている。隆帯の両側の口縁部には結節沈線状の刺突文で幾何学的文様が施され、両端には円形竹管文が施されている。内面には条痕文が認められない。胎土・色調は365に同じである。

368・370～372は口縁部片で、371・372は胴部片である。外部文様は円形の棒状工具による刺突文が、三角形に描かれている。刺突文の交点には先のまるまった棒状工具を押圧している。内面は横位または斜位に条痕文が施されている。色調は内・外面が浅黄橙色で、断面が黒褐色である。胎土は細砂・雲母・繊維を含み、焼成はやや不良である。

373は口縁部片で、刺突文上に半円形竹管を斜めに刺突した三日月文が施文されている。胎土・色調は370に類似する。374は口縁部片で、刺突文の交点には先のまるまった棒状工具で押圧されている。375は口縁部片で、口縁部の幅は狭いが、口縁部の下の胴部にも刺突文が施文されているので、胴部に2段のくびれを有するものと思われる。口唇部の両角にはキザミ目が施されている。口縁部は、結節沈線が2本平行して施文されている。結節沈線の交点への押圧文は施されていない。口縁部と胴部との境にはキザミ目が施されている。色調は橙色で、胎土は繊維と細砂を含む。焼成は普通である。

376は、胴部片で、刺突文上には円形竹管文が施されている。

377・379は端部が丸まった口縁部片で、キザミ目が施されている。外面には結節沈線で幾何学的文様が施されている。



第42圖 奥山C遺跡 遺構外出土土器拓影圖(8)

本種の土器は鶴ヶ島台式に比定されると思われる。

2 類 c 種 (第43図 378・380～386)

2 類の土器のうち、沈線により区画され、沈線の交点に押圧文が施されている土器を本種とする。色調は外面が赤褐色で、内面が橙黄色で、断面が黒褐色である。胎土は細砂・繊維を含み、焼成は不良である。

378・380は口縁部片で、同一個体ではないが類似している。外面は条痕文地に沈線が幾何学的に描かれ、沈線の交点には円形竹管文が押圧されている。沈線区画内には刺突文が施され、刺突文は細い半截竹管を斜めからえぐるようにして施されたものである。内面は条痕文が横位に施されている。

381は口縁付近の破片で、378に類似している。

382～384はほぼ同一個体と思われる口縁部片である。口縁はゆるく外反し、口唇部の外面側にはキザミ目が施されている。外面は沈線が格子目状に施され、この交点に棒状工具が押圧されている。

385は頸部片で、内・外面に横位の条痕文が施され、外面の拓折岡上端に刺突文が認められる。

386は口縁部片で、外面は、幅1cmほどの浅い沈線がハケ目状工具により曲線状に施され、その区画内に刺突文が施されている。

3 類 (第43・44図 387～393)

内・外面に木目の条痕文が施された土器を本類とする。大形の土器である。色調は内・外面が赤褐色で、断面が黒褐色である。胎土は多量の繊維と細砂を含み、器面がザラザラしている。焼成はやや不良である。

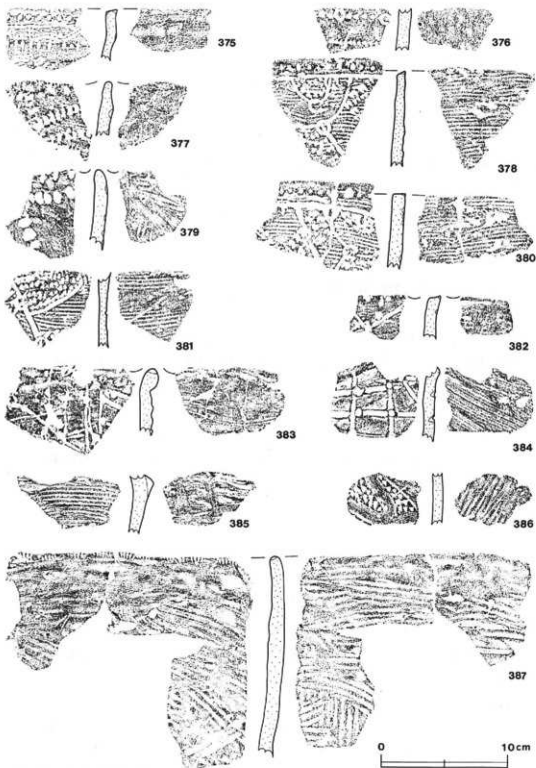
387は口縁部片で、やや波状を呈し、口唇部に浅いキザミ目が口縁に対し直角方向に施されている。内・外面の条痕文も浅めである。393は底部片で平底を呈し、胴部の下端がやや出張っている。

本類の土器は第4・5号が穴で4群2類の土器にまじって出土しており、鶴ヶ島台式に比定されると思われる。

4 類 (第44・45図 394～414)

内・外面に条痕文が施された土器を本類とする。口唇部にキザミ目の施されたものが多い。色調は内・外面が橙黄色で、断面が黒褐色である。胎土は多量の繊維と細砂を含む。焼成は普通である。多量に出土している。

394～406は口唇部にキザミ目の施された口縁部片で、口唇部の平たいのが394～396で、他は尖



第43圖 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影(9)

っている。キザミ目は口縁に対し直角方向に施されたものと、斜位に施されたものがある。また、キザミ目は先の薄いヘラ状工具で押圧したものと、細い棒状施文工具を押圧したものがあり、前者の土器は394・396・403・406である。条痕文は口縁部付近は内・外面とも横位に施されているものが多い。

407・408は口唇部にキザミ目の施されていない口縁部片で、口唇部はいずれも平たくなっている。

409～414までが胴部片で、条痕文の方向は縦位、斜位、横位である。414の条痕の幅は細かくなっている。

本類の土器は第5号が穴で4群2類の土器にまじって出土しており、鶴ヶ島台式に比定されると思われる。

5類（第16図 415～420・422・423）

条痕文が内・外面のうちいずれか一面に施された土器を本類とする。色調は明赤褐色が多く、胎土は、繊維に比べ細砂が多量に含まれている。

415～420は外面にのみ条痕文の施文された土器で、415～418は口縁部片で、415は筒形の器形を呈しており、口唇部には条痕文と同じ施文工具を、口唇に対し直角方向に深く移動させたキザミ目を有する。外面は斜位に浅い条痕文が施文されている。417の口唇部には、斜位に条痕文が施文されている。外面に横位を主にした深めの条痕文が施文されている。418は口縁にいくほど薄くなっていて、口縁部はやや外反する。外面にかすかに条痕文が斜位に施されている。422・423は、内面に条痕文が施文された土器である。外面はナデ調整されている。

本類の土器は鶴ヶ島台式か茅山下層式に比定されると思われる。

6類（第46・47図 424・426～437）

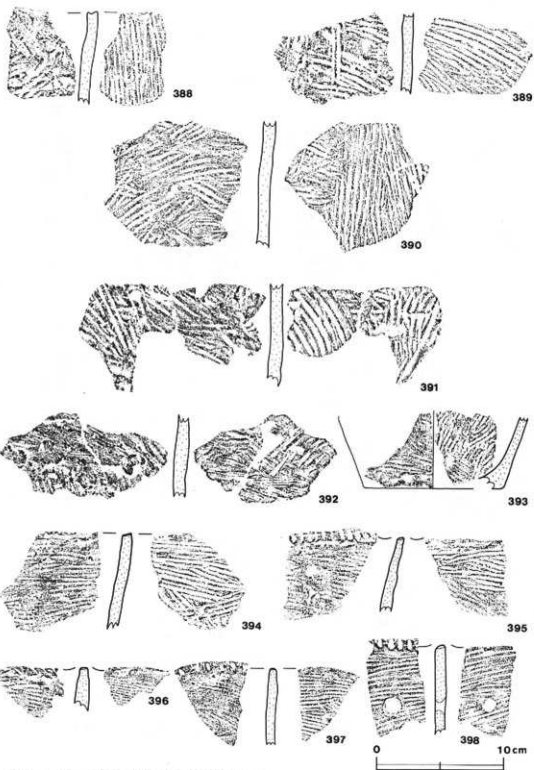
条痕文がほとんど認められずに擦痕が認められる土器を本類とする。

424～436は口縁部片で、424・426～434の口唇部にキザミ目が施されている。426の外面には先の平たい工具による横位を主にする擦痕が認められる。内面はナデ調整されている。428は、内・外面とも横位の擦痕が認められる。435・436は口唇部が内そぎ状を呈している。436の器形は筒形を呈し、外面に斜位、内面に横位の先の平たい工具による擦痕が施されている。

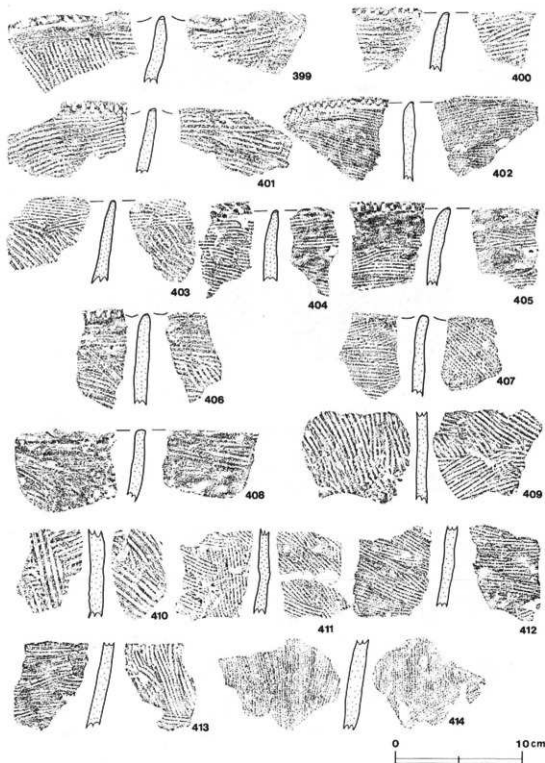
437は胴部片で、内面に縦位と横位の擦痕が認められる。

7類（第47図 438～444）

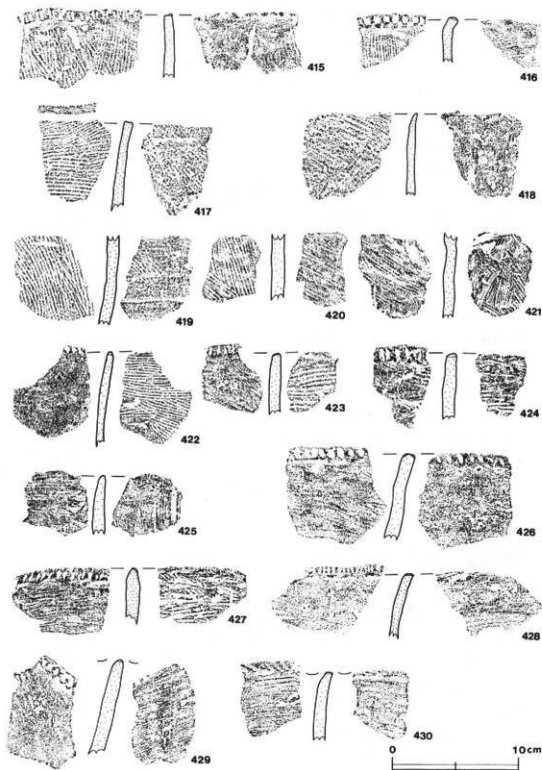
内・外面とも無文の土器を本類とする。器面は凸凹でナデ調整されており、色調はにぶい褐色



第44图 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影図(III)



第45图 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影(11)



第46图 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影图(12)

で、胎土は繊維と細砂を含む。焼成は不良である。

438-444は口縁部片で、438-441の口唇部にはキザミ目が施されている。441の口縁部はゆるく外反している。

8類 (第47図 445-447)

口縁部上端に絡条体の施文された土器を本類とする。色調はにぶい橙色で、胎土は細砂を含み焼成は普通である。445は先の尖った口縁部片で、口縁下内・外面に絡条体が斜位に押圧されている。以下は横位に細目の条痕文が施文されている。446は先のやや尖った口縁部片で、口縁下外面に絡条体が押圧されている。内・外面は、横位に条痕文が押圧されている。447は角頭状を呈する口縁部片で、口唇部と内面に絡条体が押圧されている。外面は、斜位の条痕文が施文されている。

9類 (第47・48図 448-451)

4群の土器の底部を本類とする。

448・450は尖底を呈しており、端部は小さな平底風に削られている。器面は上部に条痕文が少し認められるが、以下無文である。色調は橙色で、断面部の中央部が黒褐色を呈している。胎土は多量の繊維・細砂・スコリア等を含む。焼成は不良である。

449は平底で中央部だけが上げ底となっている。色調は橙色で、断面部のみ黒褐色である。胎土は繊維の他に細砂・スコリアを含む。451は平底で、外面端部がやや出張っている。外面に斜位、内面に縦位の条痕文が、また、底部の内・外面にも条痕文が施文されている。色調は外面が赤褐色または橙色で、内面には煤が付着している。胎土は繊維と細砂を多量に含み、焼成は不良である。

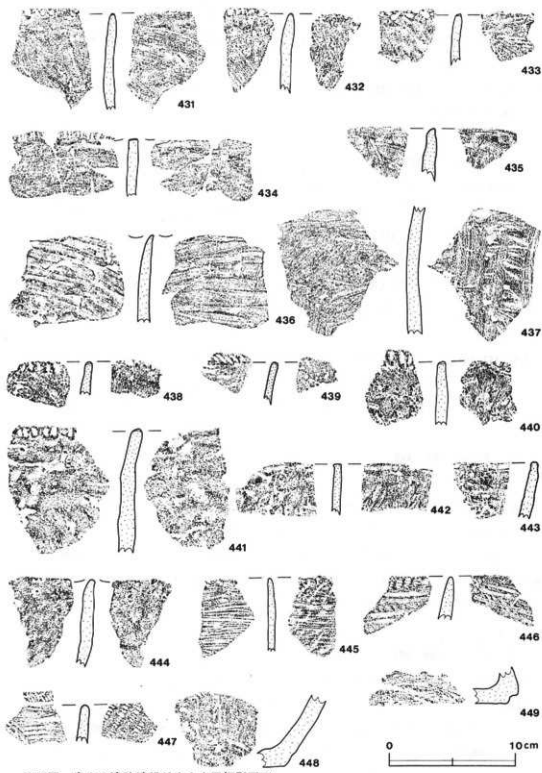
5群の土器

縄文時代前期前半に属する土器を本群とする。

1類 (第48・49図 452-470)

縄文を施文し、胎土に繊維を含む厚手の土器を本類とする。外面は横位に羽状縄文が施文され、その上に隆帯が貼り付けられたものと隆帯のないものがある。胎土は特に多くの繊維と砂を含む。色調は橙色で、焼成は不良である。

452は波頂部付近の口縁部片で、羽状縄文の縄文方向の変わる境目に高さ5mmほどの隆帯が巡る。口唇部は内そぎ状で、縄文が施文されている。453は口縁部片で、口縁が内・外面にやや肥厚し、口唇部は平らになっている。外面は縄文地に断面四角形の隆帯が巡り、その上は細い棒状施文具で押圧されている。454は口縁部片で、外面は細かな縄文地に断面山形の隆帯が弧状に貼り付



第47图 奥山C遗址遗址外出土土器拓影图(13)

けてある。455～457は口縁部片で口唇部が平らで、外面は縄文が施文されている。

458・459は口縁部に近い胴部片で、縄文地に断面山形の隆帯が貼り付けてある。460は頸部付近の胴部片で、無文地に縄文原体を2本並べた押圧文が2条巡っている。その下はRLの縄文が横位に施文されている。461～470は胴部片で、太めの羽状縄文が横位に施文されている。465～488は、456と同一個体と思われる。

2類 (第49・50図 471～497)

縄文が施文され、繊維を含み1類より薄手の土器を本類とする。色調は、内・外面が橙色で、断面部が黒色のものが多い。胎土は、特に多くの繊維と細砂を含み、焼成は普通である。

471～487は口縁部片で、475・479は波状を呈すると思われる。口縁の形状には、口唇部が平らなもの、先端が丸まったもの、先端が尖るものがあり、口唇部が平らなものが多く認められる。外面は、485は細かな目の羽状縄文、486は無節縄文、その他は単節の縄文が施されている。481の口唇部には縄文が施文されている。480の外面は羽状縄文が施文されている。487の外面はループ文が認められる。

488～497は胴部片で、496は無節の縄文で、他は単節の縄文が施文されており、488にはループ文が認められる。489と491の外面は上位に施文された縄文より下位に施文された縄文の方が細かな目の縄文である。497は、太い目の縄文と細かな目の縄文が交互に出るように施文されている。

3類 (第50図 498・499)

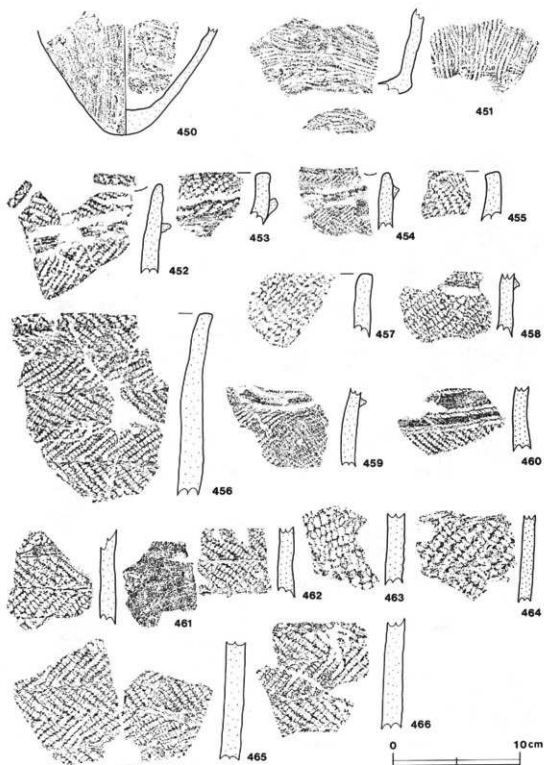
縄文に沈線の施された土器を本類とする。

498は口縁部片で、口唇部に棒状工具を横に押圧しキザミ目が施されている。外面は縄文が施文され、口縁下に半截竹管による浅めの沈線が2条ゆるく蛇行しながら巡っている。色調は外面が褐色、内面が橙色、断面が黒褐色である。胎土は多量の繊維と細砂を含む。焼成は普通である。499は胴部片で、縄文地に半截竹管による沈線が1条巡る。色調は橙色で、内面に塚が付着している。胎土は多量の砂礫と、繊維を含む。焼成は不良である。

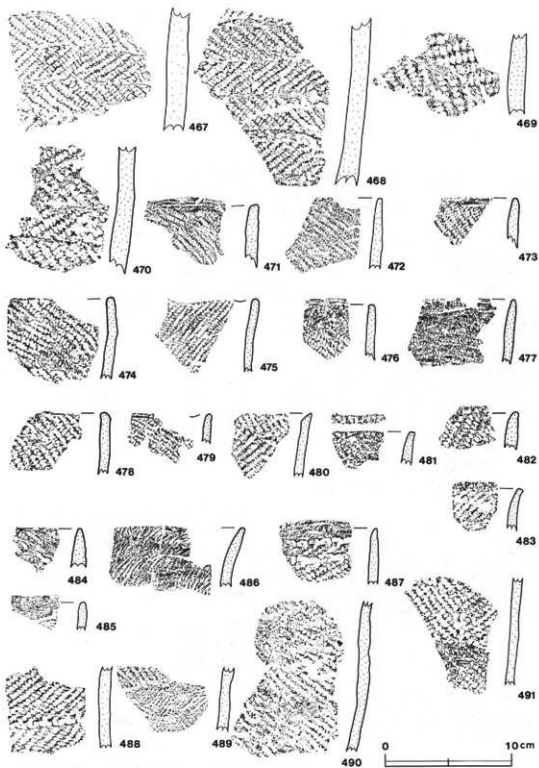
4類 (第50図 500～502)

刺突文を主に施した土器を本類とする。

500は口縁部片で、爪形文が曲線的に施文されている。色調は内・外面が橙色で、断面が黒褐色である。胎土は多量の繊維と細砂を含み、焼成は普通である。501は胴部片で、500と同一個体と思われる。502は口縁部片で、口縁下に横位に爪形文が2条施文され、以下は縄文地に爪形文が縄文と同一方向に間隔をおいて施文されている。色調・胎土・焼成は500と同様である。



第48圖 奥山C遺跡遺構外出土器拓影図(14)



第49圖 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影図(19)

5 類 (第50図 503～505)

沈線文を主に施した土器を本類とする。

503は胴部片で、細かな沈線が不定方向に施文されている。色調は外面がふい褐色で、内面が橙色で、断面が黒褐色である。胎土は少量の繊維と細砂を含む。焼成は不良である。504は胴部片で、沈線が山形に施されている。色調は内・外面が橙色で、断面が黒色である。胎土は多量の繊維を含んでおり、焼成は不良である。505は胴部片で、浅い断面肌状の沈線が格子状に施されている。色調は外面が明赤褐色で、内面が、淡赤橙色で、断面が黒褐色である。胎土は、特に多量の繊維と、細砂を含み、焼成は不良である。内面がかなり大きく剥落している。

6 類 (第50図 506・507)

5群の土器の中で、1～5類以外の土器を本類とした。

506は口縁部片で、口縁下に横位の指ナデが施されている。以下はアナグラ料の貝殻覆縁が斜位に押圧されている。色調は内・外面がふい橙色で、断面が黒褐色である。胎土は多量の繊維と細砂を含んでおり、焼成は不良である。

507は胴部片で、撚り糸文が施されている。内面は縦位にヘラミガキされている。色調は外面がふい橙色で、内面がふい赤褐色、断面が黒褐色である。胎土は繊維を多量に含む。焼成は普通である。

7 類 (第50図 508～514)

5群の土器の底部を本類とする。

508～514はいずれも底部小片で胴部の外面に縄文が施されている。底部は外周が突き出ており、高台状の上げ底となっている。508の底部に網代痕が認められる。いずれの土器も色調は内・外面が褐色で、断面部が黒褐色である。胎土は多量の繊維と少量の細砂を含む。焼成は不良であり、特に510は器面の剥落が目立つ。

6 群の土器

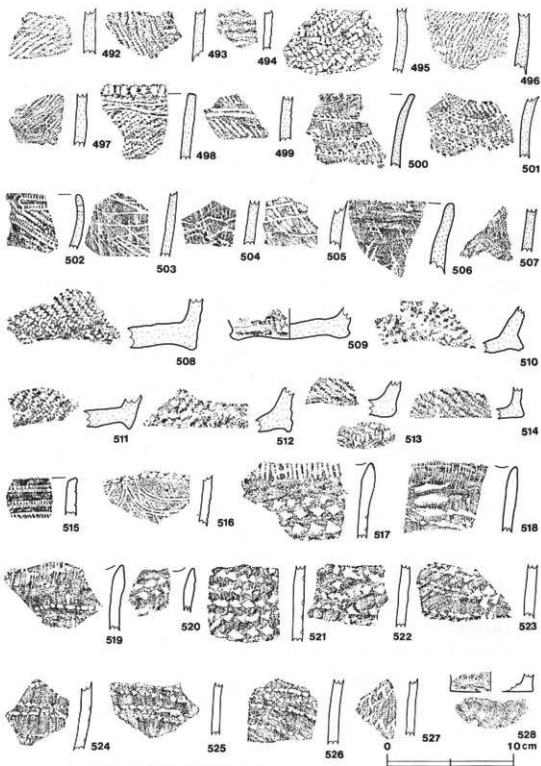
縄文時代前期中後半に属する土器を本群とする。

1 類 (第50・511図 515～529)

三角形の刺突文が主に施された土器を本類とする。色調は褐色で、胎土は細砂を多量に含み、焼成はやや不良である。

515は口縁部片で、爪形文が横位に施文されている。

516は胴部片で、拓影図上端に半截竹管による刺突文が横位に施文され、以下は半截竹管による沈



第50图 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影图16

線文が弧状に施文されている。色調は明赤褐色である。

517～520は波状を呈する口縁部片で、内そぎ状になっている。517～519は口縁下面に半截竹管による沈線が縦位に施文され、以下は無文部を間において三角形または菱形の刺突文が横位に施文されている。刺突文の大きさは、517の方が518と519に比べ大きい。518の無文部には輪積み痕が認められる。520の拓影図外面は刺突文のみが認められる。

521～527は胴部片で、521～526の外面には刺突文が2本単位で横位に施文されている。527の外面には波状貝殻文が施文されている。

528・529は底部片で、胴部の下端が外面へ突き出ている。529の底部と胴部外面にはヘラ削りが施されている。

2類 (第51図 530～535・538)

半截竹管による爪形文と沈線文を組み合わせて施文した土器を本類とする。色調は明赤褐色で、胎土は多量の細砂と雲母を含み、焼成は普通である。

530～532はやや外反する口縁部片で、いずれも口縁下面に半截竹管による深い沈線が縦位に施文される。その下に半截竹管による沈線文が2条巡る。この沈線は強弱をつけて施文したためか、深め浅めに引かれている。その下に半截竹管を45度位の角度で器面に刺し込み、その箇所をすこし上げる手法の爪形文が施文されている。その下に上記の半截竹管による沈線文が3条巡り、その下に、また、上記爪形文が施文されている。

533・534・538は胴部片で、534には半截竹管による沈線文と刺突文が密に施文されている。

535は口縁部片で、外面には細い半截竹管を二つ並べ、刺し込んですこしもち上げて魚のうろこ状の形を形成する刺突文が3条巡り、その間には半截竹管による浅めの波状沈線が巡っている。

3類 (第51図 536～544)

5群の土器で1・2類に属さない土器を本類とする。

536はやや波状を呈する口縁部片で、口唇部に縄文原体が押圧されている。外面は無文でやや凸凹にナデ調整されている。色調はにぶい橙色で、胎土は細砂と雲母を多量に含み、器面がややザラザラする。焼成は普通である。

537・539は胴部片で、縄文が施文され、無文部には結節文が施文されている。色調は橙色で、胎土は細砂を多量に含み、焼成は普通である。

540は複合口縁部片で、外面に折り返されている。下端は輪積みの部分である。色調は橙色で、胎土は細砂を含み、焼成は普通である。541・542は複合口縁部片で、外面と内面に粘土が貼り付けられ、角頭状を呈する。色調は橙色で、胎土は細砂を含み、焼成は普通である。543は口縁部片

で、内側に幅1.3cmの粘土を貼り付けている。外面は無文で、棒状工具で順々に削る方法で、横位に巡る指頭痕の効果を与えている。色調は橙色で、胎土は細砂と雲母を多量に含んでいる。焼成は普通である。

544は胴部片で、小さな円形の刺突文が2列に施文され、刺突文の上に結節沈線風の浅い沈線が施文されている。色調は明褐色で、胎土は砂と雲母を多量に含み、焼成は普通である。

545・546は底部片である。いずれも平底で、546には削り痕が認められる。色調は外面が橙色、内面が褐色である。胎土には多量の細砂とスコリアを含み、焼成はやや不良である。

7群の土器

縄文時代中期に属する土器を本群とする。

1類 (第51図 547・548)

細かな目の縄文地に結節文が巡る土器を本類とする。547・548はいずれも胴部片で、色調は橙色で、胎土は砂を多量に含み、焼成は良好である。

2類

結節沈線文が主に施された土器を本類とする。

2類a種 (第51図 549～552)

2類の土器のうち口縁下面に沈線文が施された土器を本種とする。色調はにぶい赤褐色で、胎土は細砂、雲母を含み、焼成は不良である。

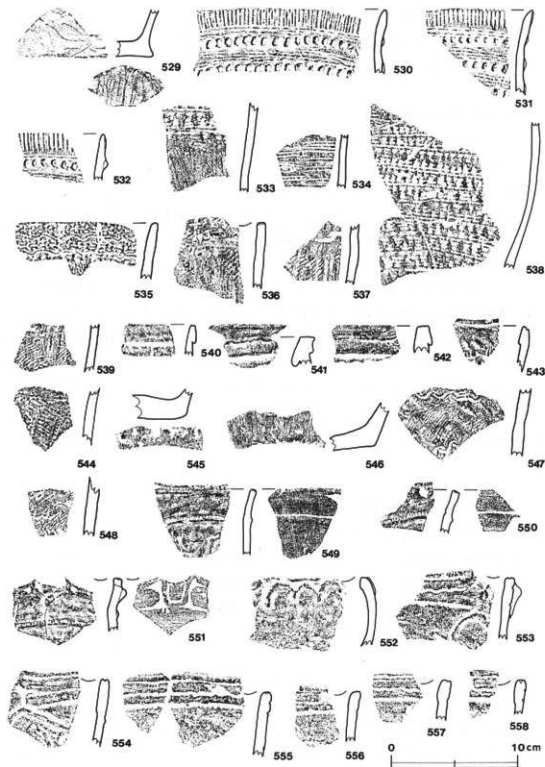
いずれも波状を呈する口縁部片である。549・550は外傾し、口唇部に爪形文が口縁下面に沈線文が施されている。また、外面は無文地に断面山形の微隆起線が巡り、その上部に爪形文が施文されている。551は波頂部が弧状にくぼんでいる。外面は波頂下に注口状の円形浮文が貼り付けであり、円形浮文の上は刺突されている。口唇部の爪形文の端は三角形の沈刻文が施文されている。また、内面の沈線文のコーナー部も三角形の沈刻文が施文されている。

552は波状を呈した内湾する口縁部片で、口縁下面に稜をもつ。外面は無文で、口縁下に半円状の隆帯が3個横位に連結して文様をつくる。この文様の両端に結節沈線が認められる。

2類b種 (第51・52図 553～560)

2類のうち内面の口縁下が1.5～3mmほどの幅で肥厚し、段を形成している土器を主に本種とする。色調はにぶい橙色で、胎土は砂礫と雲母を多量に含み、焼成は普通である。

553～558は波状を呈する口縁部片で、口唇部に結節沈線が巡り、外面は口縁下に沈線が鋸歯状に、その下には、結節沈線が施文されている。553の波頂部はくぼんでいる。波頂部外面は、山形



第51图 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影(17)

に折り曲げた粘土の突帯が貼り付けてある。その下には微隆起線が円形に貼り付けてある。この微隆起線の外面には爪形文が施されている。559・560は、口縁部片で、外面は口縁下幅5mmほどが肥厚し、その下に浅い沈線が巡っており段を形成している。

2類c種(第52図 561～573)

2類のうち、内面に稜をもつ土器を本種とする。色調はにぶい褐色のものが多く、胎土は砂と雲母を含む。焼成は普通である。

561は波状を呈する口縁部片で、口唇部が指圧されている。外面は浅い沈線が斜位に施されている。563～572は口縁部片で、内脣しながら立ち上がり、563～565・571は波状を呈している。外面は無文地に結節文が施されている。563は、口唇部が棒状工具で横位に強く押圧されている。外面は爪形状の結節沈線が渦巻状に施文されている。胎土は金雲母を特に多く含む。566は、口縁下外面に結節沈線が横位に1条巡っている。以下は、結節沈線による半円文が描かれている。567～571は口縁下に隆帯による楕円形文が区画され、その内側に結節沈線が巡っている。568・569は、楕円形文と楕円形文の結合部に山形の突帯が貼り付けてある。567～571の胎土は細砂を特に多く含み、器面がザラザラしている。569～572の口唇部は棒状工具で横位に押圧され深めのキザミ目が施されている。口唇部直下内面には、キザミ目の間に刺突が施され、その下に沈線が1条巡っている。口唇部直下外面には、結節沈線が巡っている。

573は胴部片で、ヒダ状の指頭痕が横位に巡っている。胎土は、砂礫と雲母を特に多く含んでいる。

2類d種(第52図 574～579)

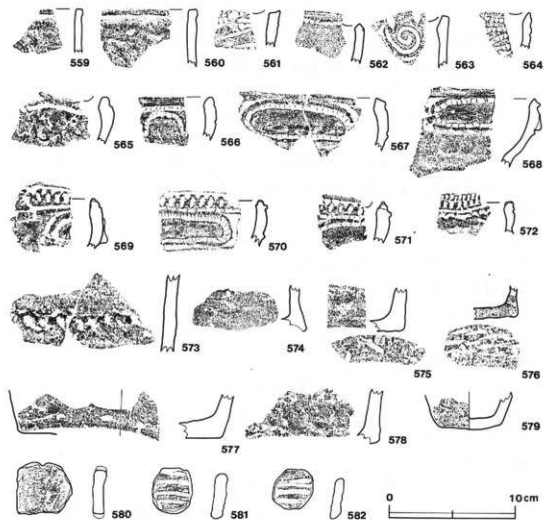
7群の土器の底部片を本種とする。

574は胴部下端が出張っている。胴部外面は横位に削り調整されている。色調は褐色で、胎土は細砂を含み、焼成はやや不良である。575～579の色調は褐色で、胎土は長石・石英・雲母を多量に含み、器面がザラザラする。焼成は不良である。575・576の底部には、網代痕が認められる。579は、やや丸みをもつ小さな平底である。

土製品(第52図 580～582)

当遺跡から土器片鏝1点、土製円板2点が出土した。580は、阿玉台1a式に比定される。土器の口縁部を使用して製作された土器片鏝で、切り込みが上下2カ所に認められる。法量は縦4.1cm、横4.3cm、厚さ0.9cm、重量19gである。

土製円板は、いずれも外面に平行沈線の施文された田戸式に比定される土器の破片を使用して



第52図 奥山C遺跡遺構外出土土器拓影図18

製作されたものである。側縁は、雑に研磨されている。法量は、581が長径3.6cm、短径3.1cm、厚さ1.0cm、重量14.5gで、582が長径3.7cm、短径3.2cm、厚さ0.9cm、重量10.5gである。

石器類

石器類は遺構出土も含め石斧4点、石槍1点、石鎌2点、剥片7点、石錘1点、磨石7点が出土している。剥片の石質はチャート、黒曜石、結晶片岩である。

石斧(第53図 1~3)

1は、台地平坦部のD2i6区から出土した片刃磨製石斧である。全体が、滑らかに研磨されており、刃はかすかな使用痕が認められるが刃こぼれは認められない。法量は縦8.2cm、横4.8cm、

厚さ2.1cm、重量13.85gで、石質は緑泥片岩である。2は、台地突端部のC1g7区から出土した片刃磨製石斧である。基部の一部が欠損している。全体が、滑らかに研磨されており、刃こぼれが認められる。法量は縦5.7cm、横4.3cm、厚さ1.1cm、重量51gで、石質は砂岩である。

3は、第10号土坑から出土した打製石斧で、扁平な石の片側を打ち欠いて刃をつけたものである。法量は縦8.6cm、横5.1cm、厚さ1.5cm、重量76gで、石質は流紋岩である。

石槍（第53図 5）

5は、C1g7区から出土した石槍で、基部が欠損している。刃先はやや曲がっている。法量は縦6.9cm、横2.4cm、厚さ0.8cm、重量15gで、石質は安山岩である。

石錐（第53図 4）

4は、E2a2区から出土した無頭石錐である。先端が欠損している。法量は、縦21.5mm、横16.6mm、厚さ3.3mm、重量1gで、石質は、黒曜石である。

石錘（第53図 6）

6は第21号土坑から出土した石錘で分銅形をしており、扁平な河原石の長辺の両側を打ち欠いて製作されている。法量は縦7.7cm、横4.4cm、厚さ1.1cm、重量34.5gで、石質は粘板岩である。

磨石（第53図 7）

磨石は7点出土しているが、図示した7のほかは破片である。

7はD2a7区から出土し、全面が滑らかになっている。法量は縦8.2cm、横6.6cm、厚さ2.9cm、重量243gで、石質は砂岩である。

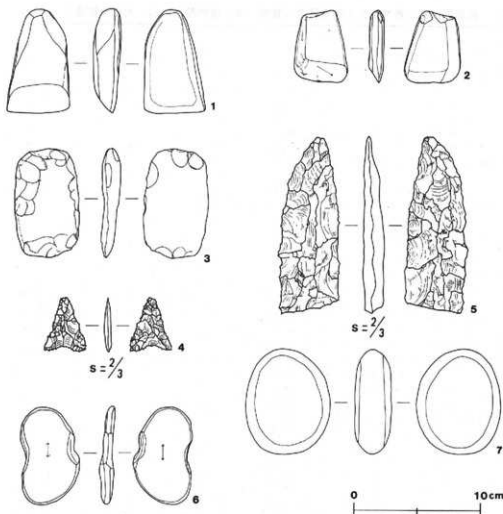
礫（PI.34）

礫は4,228点出土し、総重量は315kgである。礫の出土分布は、東台地突端部から南西斜面部の標高15～16.5mに集中している。縄文早期土器と同様に赤味の強い黄褐色の土層から多く出土している。

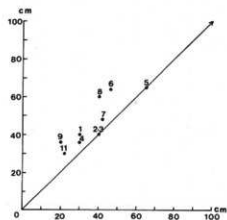
礫は河原石で総数の66%にあたる2,978点が割れており、割れ目は鋭く尖っている。礫は赤味の強いものや、ほぼ風化したようなものが多く、多くの礫は火を受けたものと思われる。大きさは長径6cmほどのものが多く、石質は砂岩、流紋岩、チャート、石英斑岩、凝灰岩、安山岩などである。

表6 拓影园揭载土器片出土小調査区名一覽表 (A—遺物番号, B—出土小調査区名)

A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
84	C2h4	85	C1g9	86	C1s7	87	D1j9	88	D2b1	89	D2a1	90	D2a2	91	C1e7	92	D1b7	93	C1s7
94	D2a1	95	D2a1	96	C2i1	97	D2a1	98	C1s9	99	C1j9	100	D1a2	101	C1e7	102	D1a7	103	C1s7
104	D1b7	105	C1j9	106	D1a9	107	C1g9	108	C1g9	109	D2b9	110	C1g7	111	C1g7	112	C1g7	113	D1a9
114	D1a9	115	C1a2	116	D2a1	117	D2d4	118	D2c1	119	C2h6	120	C1f7	121	C1g7	122	D2c1	123	C2c1
124	C2f4	125	D2b1	126	D2c1	127	D2c1	128	D2c1	129	C1j9	130	C1g9	131	C1j7	132	C1s7	133	C2f1
134	C2a4	135	C1j9	136	C1e9	137	C1f6	138	D1a9	139	D1c9	140	D1a9	141	C2f7	142	C1f7	143	D1c9
144	D1c9	145	D1a9	146	D2b4	147	D2b9	148	D2g5	149	C2f1	150	C1j9	151	C2	152	C1c9	153	D2b7
154	C1j7	155	D1d9	156	D2c1	157	D2c2	158	D1c9	159	C2f1	160	D2a9	161	D1e9	162	D1c9	163	D2c4
164	D1b9	165	D1c9	166	D1b9	167	D2f1	168	C2d1	169	C1c9	170	C1a9	171	D1b9	172	D1	173	C2j2
174	表採	175	C1j9	176	C2h5	177	表採	178	D1f9	179	D1g9	180	D1b9	181	表採	182	D1d9	183	C2g2
184	D1c9	185	D2e9	186	D1b7	187	表採	188	D2c9	189	D2a9	190	C1j9	191	C1f9	192	C1d9	193	C3h2
194	C2g2	195	C2i1	196	D1h9	197	D1g9	198	D1b9	199	D1g9	200	D1b7	201	C2j7	202	D2b1	203	D1a9
204	D1j9	205	D2c1	206	D2b1	207	C1s9	208	D1a9	209	D1c9	210	D2g1	211	D2f1	212	D2d1	213	D1b7
214	D2b1	215	D2a1	216	C1g9	217	表採	218	C2b9	219	C2f1	220	D1j9	221	D2d2	222	C1g9	223	D1a9
224	C1j9	225	C1j7	226	C1s9	227	D1e9	228	D1b7	229	D1d9	230	D1j9	231	D2b1	232	C2i1	233	C2c1
234	D2c4	235	C2f1	236	D1e9	237	C2i1	238	C2e1	239	C1g9	240	C1g7	241	D1a9	242	D2a1	243	D1b9
244	C1j7	245	C1s9	246	D1c7	247	C2i1	248	D1c7	249	D1a7	250	D2b9	251	D1a7	252	D2c4	253	D2g5
254	C2h1	255	C1d9	256	D2c9	257	C1h9	258	D1c9	259	C1s9	260	C1j9	261	C1j9	262	C1j9	263	D2b4
264	C1g9	265	C1g7	266	C1g9	267	C1h4	268	C1g9	269	C1f4	270	D2e9	271	D2e9	272	C2b9	273	D2f9
274	C1g7	275	D1c7	276	C1e9	277	D2b1	278	D2a9	279	D2b9	280	D1c9	281	C2f1	282	D2c1	283	C2f1
284	D1c9	285	D2e1	286	D2d1	287	D1a9	288	C2h9	289	D2c1	290	D1b9	291	C1g7	292	D1c9	293	D1a9
294	D1f9	295	C1j7	296	C2f1	297	C1c9	298	C1h1	299	C1g9	300	D1f7	301	C1s9	302	C1f9	303	D1c9
304	C1c9	305	C2i1	306	C2f1	307	C1f9	308	C1g7	309	C1g7	310	表採	311	表採	312	C1f7	313	C1f4
314	C1g9	315	C1g7	316	C2h4	317	C1f7	318	C1f9	319	C1d9	320	C2g2	321	D1a9	322	C2c1	323	D1f9
324	C2e4	325	C2h5	326	C1g9	327	D2f2	328	C2h1	329	D1b9	330	D1d9	331	C1j7	332	D2c1	333	表採
334	D1b7	335	C1j7	336	D2f1	337	C1s9	338	D1	339	D1d9	340	D1e9	341	D1	342	D2b1	343	S3h4
344	D2h4	345	D2g5	346	D2g1	347	D2g5	348	D2c2	349	E2b9	350	D2f9	351	D2f9	352	D2c9	353	D2c9
354	D2h4	355	D2a7	356	D2j4	357	D2j9	358	D2a5	359	D1c9	360	D1c9	361	D1c9	362	D1d9	363	C1c9
364	D1f9	365	D1e7	366	D1d9	367	D1d9	368	D1c9	369	D2c1	370	D1f7	371	D1c9	372	D1d9	373	D1e7
374	D1d9	375	D1h9	376	D1e7	377	D1d9	378	D2g5	379	D1c9	380	D2a5	381	D2h4	382	C1c9	383	D1d9
384	D1d9	385	D1c9	386	表採	387	D1c9	388	D1c9	389	D1d9	390	D1c9	391	D1d9	392	D1d9	393	D1c7
394	C1j9	395	D2c4	396	D2d2	397	D2f2	398	D2c2	399	D2f9	400	D2f4	401	D2e1	402	D1d9	403	D2d9
404	D2h4	405	D2g1	406	D2c1	407	D2b1	408	D1c9	409	D1b9	410	D1d9	411	D2f4	412	D2c1	413	D1b9
414	D1g7	415	D1d9	416	D2c1	417	D2d2	418	D1f9	419	D2f7	420	D1b9	421	D1c9	422	D2c1	423	D2c1
424	D2f1	425	D1s9	426	D2e7	427	D2d1	428	D2g1	429	D2e1	430	C1c9	431	D2e9	432	D1f9	433	D1b9
434	D1d9	435	D2g5	436	D1b7	437	D2c1	438	D2c1	439	D2a5	440	D2f1	441	D2c1	442	D1b9	443	D2a9
444	D1f9	445	D2f1	446	C1g9	447	C2j9	448	D1d9	449	D1d9	450	D1c9	451	D1c9	452	D2a9	453	D2g7
454	D2b1	455	C2i6	456	D2a9	457	C2j9	458	D1a9	459	E2d7	460	D2g1	461	D2b9	462	D2g7	463	D2d1
464	D2f1	465	D1a9	466	D2a9	467	F2a9	468	F2a9	469	D3e7	470	D3g1	471	E2h7	472	E2h7	473	E2h7
474	E3b1	475	D2f1	476	F3c1	477	E3a1	478	E3b1	479	D3j9	480	D1b7	481	C1f9	482	D2d2	483	C1f9
484	D2c2	485	D2c1	486	D3	487	表採	488	表採	489	E2b1	490	E3b1	491	表採	492	C2b9	493	E2a7
494	D1d9	495	C1f9	496	D1h9	497	E2c9	498	表採	499	D1a9	500	E2a9	501	E2a9	502	H3f1	503	C1a9
504	E3c7	505	C2b9	506	D2e2	507	C2i9	508	D3j2	509	E2b7	510	D3b2	511	D2b1	512	D3c1	513	D3e1
514	D2e1	515	D1a9	516	C2g1	517	D1a9	518	C1e9	519	D1b9	520	C1s9	521	D1a9	522	D1a9	523	D1a9
524	D1a9	525	D1a9	526	D1a9	527	E2b9	528	C1e9	529	表採	530	C1a9	531	E2a5	532	E2b9	533	E2a5
534	D2a5	535	D2a4	536	D2f1	537	D2c2	538	表採	539	D2c2	540	D1b7	541	D2e2	542	D2f1	543	S3e2
544	C1s9	545	D1d9	546	C1c9	547	表採	548	D2a7	549	D2c4	550	D1a9	551	C2j1	552	D2c1	553	D1
554	D2j1	555	D2e1	556	D2f4	557	C2i1	558	表採	559	D2f1	560	D2c1	561	D2d9	562	D2a1	563	D2
564	C2s9	565	D2c9	566	表採	567	D2b9	568	C1c9	569	D2b1	570	D2a5	571	D2b1	572	D2c4	573	D2a5
574	D2h4	575	D1e9	576	D2b9	577	D2c1	578	C2e4	579	D2e9	580	D1c9	581	C1s9	582	C1c1		



第53図 奥山C遺跡 遺構外出土遺物実測図



第54図 集石の規模

表7 集石された礫の数量

集石名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11
礫の数	7	16	24	14	41	19	13	27	6	11
割れた数	6	9	12	6	27	15	12	21	3	9
割れた礫の割合	86	56	50	43	66	79	92	78	50	82

第4節 まとめ

当遺跡からは、縄文時代早期の集石15基、竅穴6基、土坑65基が検出され、遺構外から多量の縄文土器と焼けた礫が出土した。ここでは、遺構の時期および性格、遺構外出土遺物の分布状況などを中心にまとめることにする。

1 集石について

当遺跡から検出された15基の集石は、地面に集石された集石A、集石の下に土坑の掘り込まれていた集石Bに分類すると、集石Aが10基、集石Bが5基である。

集石A……第1・2・3・4・5・6・7・8・9・11号集石

集石B……第10・12・13・14・15号集石

(1)集石Aの特徴

- ア 集石は、現地表下40cmほどから下で10～20cmの厚さに堆積する赤味の強い褐色土層の中に構築されていて、集石およびその周辺の地面に焼けた痕跡が認められなかった。
- イ 礫は平らな面に、大部分は重なりのない状態で集石されている。
- ウ 集石の平面形は、不定形が多く、意図的な形は認められなかった。規模は第54図のとおりで、集石された礫の数が多くなるほど大きくなっている。
- エ 集石された礫の数は、表7の通りで、1集石からは平均18個と少ない。
- オ 礫の大きさは、割れた小片から長径10cmまでで、一定していなく、もとは河原石と思われる。
- カ 礫は次のような熱を受けた痕跡がある。
- 割れた礫の割合は平均67%と多く、割れ目は鋭く尖っている。(このような礫は強く加熱した後、急に冷した時にできると思われる。)
 - 礫は割れてなくても、割れ目のはいったものがある。
 - 割れた礫も、割れない礫も礫の表面の色調は灰褐色、赤褐色と焼けた時にできる色が多い。
- キ 礫の表面には煤などの付着物が認められなかった。
- ク 集石の構築された赤味の強い褐色土層からは、集石と同様な礫が出土しており、礫の量は遺跡全体で4,228点、総重量で315kgある。
- ケ 集石は、第1号集石を除き、南西斜面に分布しており、竅穴に近接しているという傾向は強くはないが、集石を除く礫の分布と竅穴の分布は一致している。(第55・59図)

(2)集石Bの特徴

掘り込みは明確でないが、覆土上層に集石されているようにとらえられたので一応土坑上面の集石とした。集石の規模や形状は集石Aと同様である。

(3)集石と出土遺物

集石の性格として一般的に、ア 蒸し焼き調理施設、イ パーベキューストーン調理施設(加熱された石の上で食物を焼く)、ウ 食物加工の場などが考えられている。しかし、当遺跡の集石は、集石された礫の数が少ないこと、石器などの食物を加工する道具が出土していないこと、礫に炭化物などが付着していないことなどから、利用方法は不明とせざるを得ない。ただ、集石された礫が焼けて、割れていたことは事実である。

集石に土器がまじっていたのは、第5・7・8・10・12・13・14・15号集石の8基である。第5号集石からは沈線文系の土器、第7・8号集石からは条痕文系の土器が出土している。第10号集石からは沈線文系の土器と条痕文系の土器がまじって出土している。第12号集石からは、条痕文系の土器を主体に、摺系文系の土器と無文土器がまじって出土している。第13号集石からは、沈線文系の土器を主体に摺系文系の土器がまじって出土している。第14号集石からは、沈線文系の土器を主体に無文土器がまじって出土している。第15号集石からは、沈線文系の土器のみが出土している。

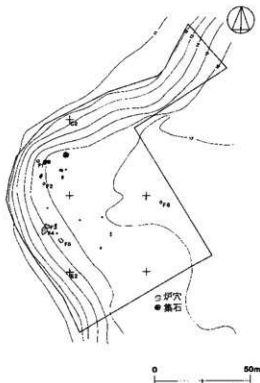
集石の中で、土器の出土状況から時期を明確にできたのは第15号集石で、縄文時代早期中葉の沈線文系の土器の時期と思われる。土器を出土した他の集石は、遺構外出土の土器分布をみると、沈線文系の土器と条痕文系の土器の出土分布が重なった地点であり、出土した土器が集石に伴っているかどうか明確に断定できなかったが、縄文時代早期中葉の沈線文系の土器の時期あるいは同期後葉の条痕文系の土器の時期に間違いないと思われる。

2 炉穴について

当遺跡で検出された炉穴は6基で、そのうち不明瞭であった第6号炉穴を除く、5基の炉穴について検討することにする。

(1) 炉穴の位置と構造

炉穴は石地突端部から南西斜面の標高15m前



第55図 奥山C遺跡集石・炉穴位置図

後に位置している。第1・2号炉穴は、C1区の台地突端部の北西側斜面にまとまっており、これらをAグループとし、第3・4・5号炉穴は、D1区の南西斜面にまとまっており、これらをBグループとする。

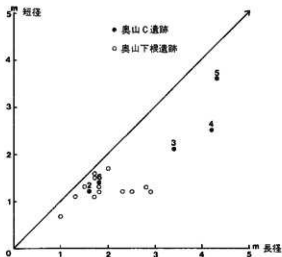
炉穴の平面形は、楕円形または不定形を呈し、壁高は45cmほどである。規模は、第1・2号炉穴が長径1.7m以下と小さく、第3・4・5号炉穴が長径3.37m以上で大きい。炉の数は、第3号炉穴に3基、第4号炉穴に2基設けられている他は、いずれも1基である。炉の位置は、第4号炉穴の炉Bが底面中央に設けられている他は、壁ぎわに設けられており、炉床から足場にかけてやや傾斜している。第3号炉穴では、炉が北西壁ぎわと北東壁ぎわ、南東壁ぎわに各1基ずつ設けられていたが、これは、使用していて炉穴が使用にたえられなくなると次々と同一足場を利用して炉の位置を変えたためと思われる。

足場は炉床よりも低くなっており、炉床より広い面積を有している。煙道は、炉床の壁側に設けられていたと考えられ、第2号炉穴の煙道部と思われる壁は、外反して立ち上がり、上位で内傾していた。

(2) 炉穴の時期と集落

Aグループの第1号炉穴は、炉床部から内・外面無文の条痕文系土器が出土しているが、土器型式が不明で、時期を限定できなかった。第1号炉穴の南9mに位置する第2号炉穴からは、土器の出土はないが、炉穴の形状、位置などから判断すると、第1号炉穴と同一時期と思われる。

Bグループの第3・4・5号炉穴は、炉穴内から多量の鶴ヶ島台式土器が出土していることから、炉穴の形状、規模などに類似点があることから、時期はいずれも鶴ヶ島台期と思われる。Aグループの炉穴との新旧関係は不明であるが、時期差があるものと思われる。鶴ヶ島台期の住居跡は検出されなかったが、第3・4・5号炉穴の北側の遺構外からは、鶴ヶ島台式土器を主とする条痕文系土器が集中して出土し、また、焼けた礫も多く出土しており、第3・4・5号炉穴を中心に一単位の集落が形成されていたものと思われる。



(3) 奥山下根遺跡との関係

当遺跡の南東1.2kmの同一台地上に位

第56図 奥山C遺跡と奥山下根遺跡における炉穴の規模比較

置する奥山下根遺跡では、炉穴が19基検出され、このうち独立した炉穴は9基で残る10基は2か所の炉穴群として検出された。当遺跡と奥山下根遺跡を比較すると、次のような類似点と相異点が見とめられた。

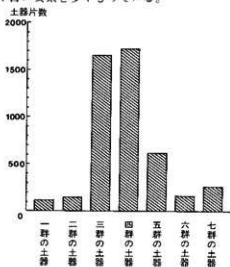
- 炉穴はどちらの遺跡とも台地突端部の傾斜地に多く分布し、数基からなるグループを形成している。
- 平面形は、炉穴が1つの炉穴の場合には楕円形を呈している。当遺跡では炉穴内に炉穴が複数設けられたのが2基検出されたが、奥山下根遺跡でも1基検出され、炉穴の重複した炉穴群が2か所検出されている。
- 規模は、第56図のように、当遺跡のグループの炉穴は、奥山下根遺跡で検出された独立の炉穴と同様である。
- 炉穴の位置は両遺跡とも長径方向の一端に片寄るものと、中央部に存在するものがある。
- 炉穴の長径方向は、奥山下根遺跡では等高線に直交しているが、当遺跡では5基のうち2基が、等高線に直交し、3基が平行している。
- 当遺跡Bグループの炉穴出土遺物は、奥山下根遺跡炉穴出土遺物と同型式の鶴ヶ島台式、土器型式上多くの類似点が見られるが、奥山下根遺跡では当遺跡出土の文様に微隆起線文を施した土器が認められないので、当遺跡の方がやや古い要素を多くもっている。

奥山C遺跡と奥山下根遺跡の炉穴の規模・形状は類似しているが、出土遺物は当遺跡の方がやや古いと思われる。

3 遺構外出土土器の出土分布について

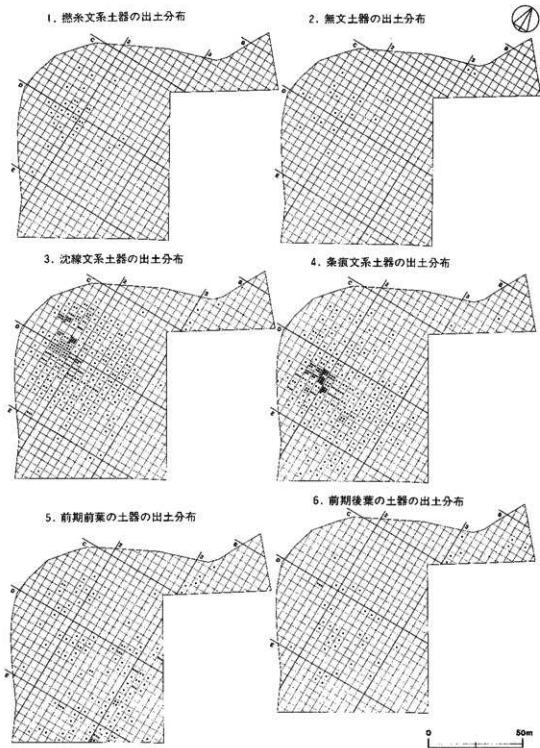
遺構外からは4,670点の縄文土器片と4,228点の礫が出土している。ここでは遺構外出土の土器片に焦点をあてて記してみたい。

当遺跡の遺構外から出土した土器片を、第3節4で分類した土器群ごとに出土量を表したのが第57図である。3群と4群の土器すなわち、縄文時代早期



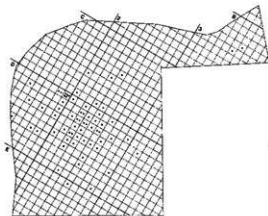
第57図 奥山C遺跡時期別土器片数

中葉沈線文系の土器と同早期後葉条痕文系の土器が群を抜いて多量に出土している。沈線文系の土器は、三戸式、田戸下層式、田戸上層式に分類されるが、土器型式を明らかにできるものは三戸式に多く、尖底部の数でも圧倒的に三戸式のものも多く出土している。条痕文系の土器は、野島式、鶴ヶ島台式、茅山下層式に分類されたが、前述のように鶴ヶ島台式が主流を占めている。



第58図 奥山C遺跡遺構外出土土器分布図

7. 中期前葉の土器の出土分布



8. 礫の出土分布



第59図 奥山C遺跡遺構外出土土器・礫分布図



分類した土器の出土量を出土調査区ごとに表わしたのが、第58図1～4、第59図5である。撫糸文系の土器は、台地突端部西側のC1・D1区の標高15～16.5mの地点に分布している。無文土器は、台地突端部西側のC1区の標高15～16.5mの地点に分布している。沈線文系の土器は、C1・C2・D1・D2区の標高15～17mの地点に分布し、特にC1・D1区の台地突端部西側斜面に集中している。条痕文系の土器は、D1・D2区の標高15～17mの地点に分布し、特に台地の南西側縁辺部に集中している。前期前葉の土器は、C1・D2・D3・E2・E3区に分布し、特に遺跡南側の台地の平坦部に集中している。前期後葉と中期前葉の土器は、D2区を中心に台地の平坦部に分布している。これらのことから、生活の中心地は時期が下るごとに台地突端部の斜面から平坦部へ移動していったことが窺える。

当遺跡は、縄文時代早期前葉井草期から同中期前葉阿玉台1b期までの断続的な生活の舞台であり、特に、盛期は早期中葉三戸期と早期後葉鶴ヶ島台期であった。三戸期には、台地突端部の西側斜面を中心に生活していたと思われるが、第15号集石の他に遺構は確認できなかった。集石と大量の礫は、三戸期の可能性が強く、赤味の強い褐色土層はこの時期の生活面であったと思われる。鶴ヶ島台期は、遺構として炉穴が検出されており、第3・4・5号炉穴の位置する台地の南西斜面を中心に生活していたものと思われる。

第5章 西原遺跡

第1節 遺跡の概要

西原遺跡は、関東鉄道常総線小絹駅の北西2.1kmに位置し、鬼怒川右岸の標高20mほどの平坦な台地の南西側縁辺部に所在する。調査区域は南北約150m・東西約100mで、南側は谷津に向かって南西側へ傾斜し、北側は北西40mほどの所に谷津が入り込んでいる。調査の結果、当遺跡から炉穴1基、竪穴住居跡15軒、土坑6基、井戸1基、溝3条が検出され、古墳時代鬼高期を中心とする集落跡であることが判明した。

縄文時代の遺構は、調査区域の北端に検出された野島期の炉穴1基だけであるが、調査区域の東側一帯の遺構確認面からは縄文時代早期野島式、同前期黒浜式、同前期後葉の土器片、および磨製石斧、石棺、磨石、礫などが出土している。

古墳時代の遺構は、5世紀末頃の竪穴住居跡15軒・土坑4基が検出された。住居跡は、調査区域の北東部を除く全域に、散在している。住居跡の形状は方形が3軒、長方形が12軒と長方形が主流を占めている。規模は、1辺あるいは長軸が10m程の大形が2軒、同7m前後の中形が7軒、同5m以内のものが6軒で、最大規模の住居跡は長軸9.48m・短軸9.30mの第1号住居跡で、最小規模の住居跡は長軸2.85m・短軸2.20mの第15号住居跡である。15軒の住居跡は、出土遺物からはほぼ同時期に生活の行われた集落と思われる。

住居跡に伴う遺物は、土師器の甕形土器・甗形土器・壺形土器・短頸甕形土器・環形土器・手捏ね土器・土土、須恵器の埴・高埴・甕、石製模造品の勾玉・白玉・双孔円板・紡錘車、磁石、炭化物としてトチ・クルミ・ヒシなどの木の実が出土している。土師器は和泉式と鬼高式の様相を合わせもつものである。

4基の土坑は、住居跡と同時期のもので第1号住居跡と第2号住居跡の西側にまばらに配置されている。土坑は直径1.5m前後、深さは30cm前後で円筒形である。

その他、土坑2基、井戸1基、溝3条が検出されているが、これらの遺構の時期は不明である。

第2節 調査経過

西原遺跡は、昭和59年5月1日に調査を開始したが、奥山C遺跡の調査のため、7月6日から9月10日まで調査を中断した。9月11日に調査を再開し、昭和60年1月11日に調査を完了した。

5月 調査区域の山林の伐間と、測量杭打ちを実施した。

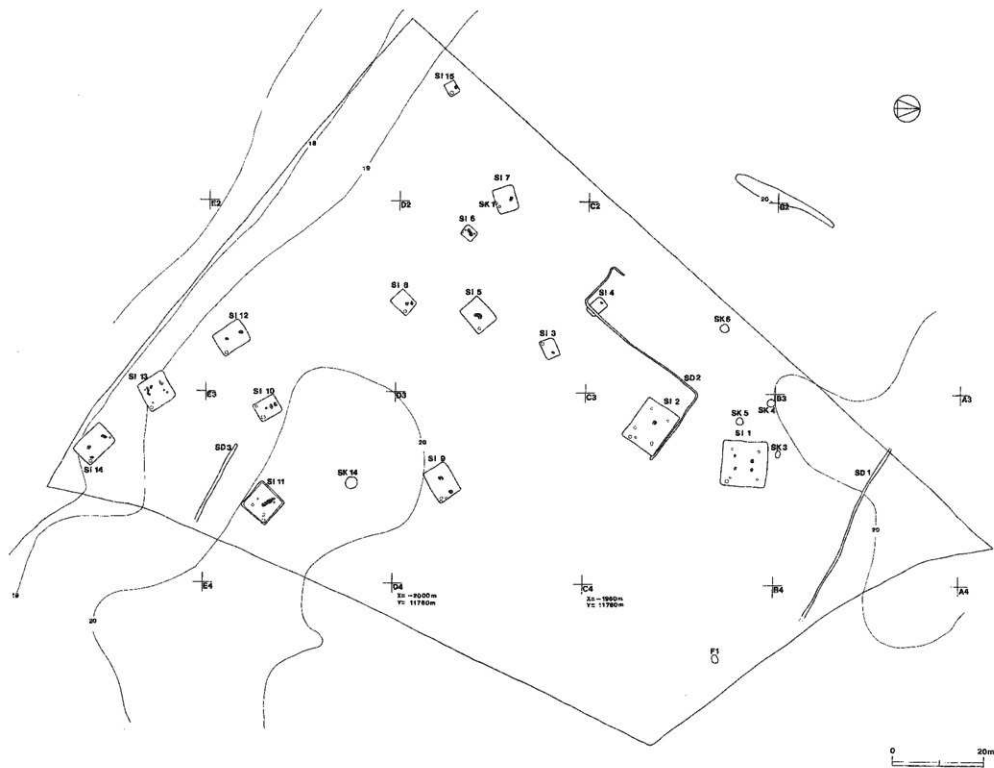
6月 11日から小調査区設定のためグリッド杭打ちを開始し、14日に終了した。19日、調査面積の16分の1に当たるグリッドの表土を除去して遺構の有無を確認するため、調査区域の北側からグリッド発掘を開始した。28日、16分の1のグリッド発掘を終了し、その結果、古墳時代の住居跡と思われる落ち込みをC3a5・C3h3・E3h7・F3f3区で検出した。調査区全域からは少量の土器器片が、特に東側の調査区からは、少量の縄文土器片および礫も出土した。29日から、グリッド発掘を調査面積の8分の1まで広げ、7月5日に終了した。この結果、古墳時代の住居跡と思われる落ち込みが、新たに、C2j7・D1h5・D2j7・D3h5・E2j7・F3d1区で検出され、古墳時代の遺構が調査区域の全域に所在することを確認した。また、縄文時代早期から前期にかけての土器片および礫が調査区域の東側に出土しており、縄文時代の遺構の存在することが想定された。グリッド発掘の結果、当遺跡から住居跡や土坑と思われる落ち込みが10数か所検出され、この他にも多くの遺構や遺物の存在が予想されたので調査区域の全面を表土除去して調査を進めることにした。その後、7・8月の約2か月間、当遺跡の調査を一時中断し奥山C遺跡の調査を進めた。

9・10月 9月11日、表土除去はバックホウを使用し、調査区域の北側から開始し、10月9日に終了した。表土除去に続いて遺構検出の作業を進め、10月30日に終了した。この作業の結果、遺構と思われる落ち込みは、住居跡14軒、土坑19基、溝3条、縄文時代早期土器片を作る落ち込み2か所であった。10月31日、各遺構の落ち込みに、北から南へ順に遺構番号を付し、住居跡から調査を開始することにし、第1・3号住居跡の掘り込みを開始した。

11月上旬 第1～6号住居跡の調査を進め、第3号住居跡の調査が終了した。第1号住居跡は、大形で掘り込みが浅く不明瞭なため床面検出作業に時間を要した。

11月中旬 第1・2・4～9号住居跡の調査を進め、第1・4・5号住居跡の調査を終了した。第7号住居跡の南東部に重複していた第1号土坑を調査し、終了した。

11月下旬 第2・6～11号住居跡の調査を進め、第2・6・7・8号住居跡の調査が終了した。第2号住居跡の調査は、南コーナー部付近に検出された周堤の調査などのため長期にわたった。



第60図 西原遺跡全体図

- 12月上旬 第9・10～14号住居跡の調査を進め、第10号住居跡の調査を終了した。第12号住居跡は土を道路が通っていたためか、覆土が硬く締っていて掘り込みに多くの時間を要した。縄文早期土器片を伴う落ち込みを掘り込んでみたが、床面および壁が検出できず、遺構とは思われなかったため遺構名を削除した。
- 12月中旬 第11～15号住居跡の調査を進め、第11・12号住居跡の調査を終了した。第13号住居跡は確認面から30cmほど掘り下げた段階では遺物の出土がほとんどなく、住居跡かどうか疑問視されたが、2・3区を確認面から38cm掘り下げたところ、炭化物や焼土が検出され住居跡であることが判明した。14日から土坑の調査を調査区域の北側から開始、第11・12・14～16号土坑の調査を進めた。
- 12月下旬 第13・14号住居跡の調査を進め終了した。第2～7・9～16号土坑の調査を進め、第14号土坑の調査を終了した。第2・7・10～13・15・16号土坑は、調査の結果、遺構とは認められなかったため、遺構番号を欠番とした。また、第9号土坑は、井戸であることが判明したので、遺構番号を第1号井戸と変更した。第3号溝の調査を進め終了した。
- 1月初旬 第3～6・8・17～19号土坑、第1・2号溝、第1号井戸の調査を進め、第3～6号土坑、第1号溝、第1号井戸の調査を終了した。第19号土坑は住居跡、第8号土坑は炉穴と判明し、遺構番号をそれぞれ第15号住居跡、第1号炉穴と変更した。また、第17・18号土坑は、調査の結果、遺構とは認められなかったため遺構番号を欠番とした。第1号炉穴の調査を終了した。
- 1月中旬 11日、第15号住居跡、第1号炉穴の調査を終了し、当遺跡の調査を完了した。なお、2月14日、埼玉県史編さん室係長増田逸郎氏を招き、西原遺跡の性格解明のための班内研修会を開催した。
- 西原遺跡の調査終了以後は、奥山C遺跡の調査を進めた。

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 炉穴

第1号炉穴(第61図)

本跡は、調査区域の北東端にあたるC4d4区を中心に確認された炉穴である。平面形は、長径1.6m・短径1.3mの楕円形を呈し、長径方向はN-70°-Eを指している。壁は軟かく、外傾して立ち上がり、壁高は24cmほどである。底面は中央部の径10cmの範囲が赤色に硬く焼けているが他は軟らかで攪乱を受けている。覆土は単一層で、焼土粒子を多量に含む褐色土であり、一部攪乱されている。

遺物は縄文土器片104点、石斧片1点、礫9点が西側の覆土の中位から集中して出土している。

第1号炉穴出土遺物

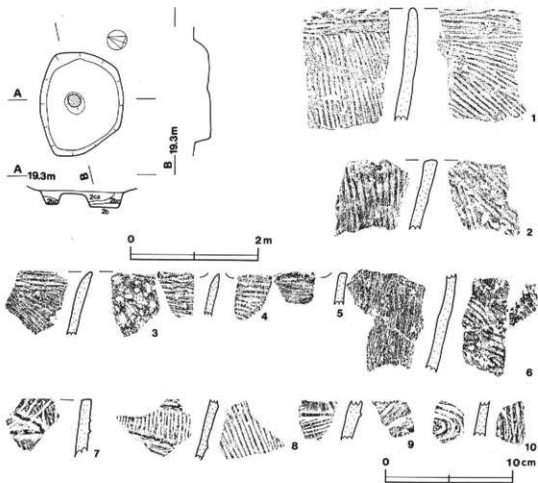
縄文土器(第61図1~10)

縄文土器はすべて破片で出土し、復元することはできなかった。土器片は内・外面に条痕文を主に施すものと、条痕文以外に断面三角形の微隆起線文を貼り付けて文様帯を区画し、その中に沈線文または条痕文を施すものとに大別できる。色調は内・外面ともに橙色で、断面部が黒褐色のものが多い。胎土は繊維と細砂を含み、焼成は普通のものが多い。

1~5は口縁部片で、内・外面に条痕文が施文されている。1の口唇部には細い棒状工具による押圧文、2の口唇部には指による押圧が認められる。3の口唇部は内そぎ的に整形されている。4と5は波状口縁で、4は端部が尖り、5は端部が肥厚している。6は、内・外面に条痕文を施した胴部片である。7は口縁部片で、口唇部が平らである。外面は微隆起線文が施され、その中に沈線文が施されており、内面は縦位の条痕文が施されている。8は口縁部近くの土器片で、外面に微隆起線を区画し、その中に彫りの深い条痕文が施されている。内面にも外面同様の条痕文が斜位に施されている。焼成は良好である。9は胴部片で、外面に条痕文と微隆起線文、内面に条痕文が施文されている。10は小片で部位が不明である。中央に微隆起線による曲線文が描かれ、これを中心に沈線による曲線文が同心円的に施文されている。

石斧

石斧は、刃部のみ現存する打製石斧である。刃は自然礫の片側を打ち欠いて作られたものである。現存する法量は長さ7.1cm、幅5.4cm、厚さ3.3cm、重量141.5gである。石質は閃緑岩である。



第61图 西原遺跡第1号炉穴実測図・出土土器拓影図

2 遺構外出土の遺物

遺構確認作業などの過程で縄文時代の遺物として、縄文土器片1,328点、土器片鏝1点、石器類6点、礎380点が出土している。

縄文土器

縄文土器は、早期から中期までのものが出土しているが、出土量は早期が1,296点、前期が30点、中期が2点と圧倒的に早期の土器片が多い。早期の土器はほとんど条痕文系の土器で、ほぼ同時期のものと思われる。

条痕文系の土器は、遺跡の北東部にあたるB3区・C3区東部・C4区と遺跡の南東部にあたるE3区に分布している。縄文土器は破片で出土し、器形を窺えるものは出土していない。出土した縄文土器を時期と文様などの特徴から、次のように分類した。

1群の土器

縄文時代早期と思われる土器を本群とする。

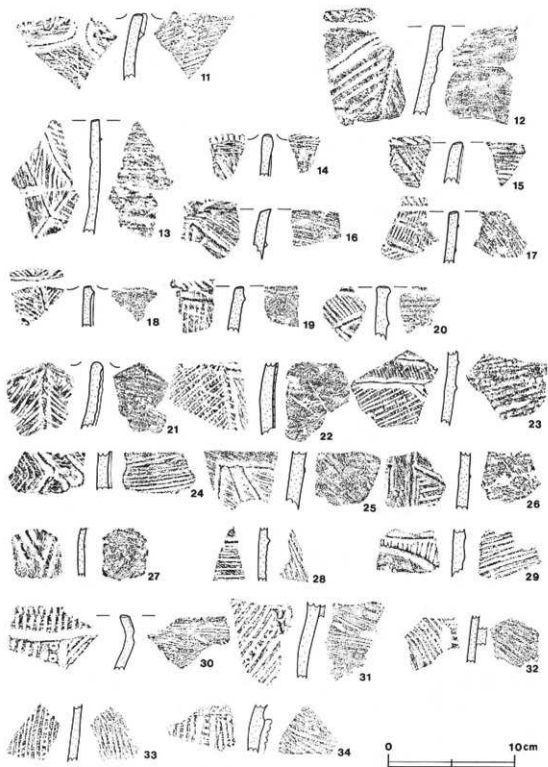
1類 a種 (第61・62図 11~28)

胎土に繊維を含み、外面は断面三角形の微隆起線で区画され、その区画内が沈線または条痕文の施された土器を本群とし、その中で口唇部にキザミ目の施されたものを本種とする。内面には条痕文が施され、色調は内・外面とも橙色で、断面部は黒褐色のものが多い。胎土は繊維の他に砂を含み、焼成は良好である。

11~20は、口唇部にキザミ目を有する口縁部片であり、11・13・14・18は、波状を呈している。11の外面は、波頂部から出た微隆起線が左右に分かれ口縁にそって走り、口縁と微隆起線の間は無文である。その下は条痕文地に沈線が斜位に施文されている。12は、無文地に微隆起線による三角形区画が描かれ、その区画内に太めの沈線文が斜位に施されている。13は、波頂部から微隆起線が垂下し、垂下した微隆起線の中間から微隆起線が口縁に向け2本伸びて区画文を形成している。上から2つ目までの区画内には沈線文が斜位に、3つ目の区画内には条痕文が施されている。21は波状口縁で、波頂部から垂下する微隆起線にはキザミ目が施されている。22~28は胴部片で、22の微隆起線上にはへら状工具による断面V字状のキザミ目が施されている。24の微隆起線文の区画内には、沈線による曲線文が描かれている。27の微隆起線文の区画内には沈線や微隆起線が施され、それぞれの線上に細いキザミ目が施されている。28の沈線は、器厚が薄い割に深く施文されている。

1類 b種 (第62図 29)

微隆起線で区画された区画内に、微隆起線を施文した土器を本種とする。



第62圖 西原遺跡遺構外出土土器拓影圖(1)

23は色調が橙色の胴部片で、胎土は繊維の他に細砂を含み、焼成は良好である。

1類c種(第62図 30~33)

8種に類似しているが外面の文様帯に断面四角形の隆帯を貼り付けたもの、円形竹管文が施された土器を本種とする。内面に条痕文が明瞭に残る土器は少ない。色調は内・外面が橙色で、胎土は細砂を多量に含む。繊維を含むが1類に比べその量は少量である。焼成は普通である。

30は、内彎する口縁部片である。外面は幅の広い浅い沈線でご区画され、その区画内に沈線文と円形竹管文が施されている。口唇部には、沈線文を施す時に使用した工具によるキザミ目か施されている。31~33は胴部片で円形竹管による押圧文が施されている。

1類d種(第62図 34~36)

沈線文の間に刺突文が施された土器を本種とする。

34は胴部片で、隆帯の上にキザミ目が施されている。外面は半截竹管による刺突文が、縦位に沈線文状に施されている。胎土は繊維を多量に含む。35・36は胴部片で、太い竹管や細い竹管で沈線の曲線文や刺突文が施されている。内面には条痕文がほとんど認められず、胎土に繊維もほとんど含まれていない。

2類a種(第63図 37~45)

胎土に繊維を含み、内・外面に条痕文のみが施された土器を本類とし、口唇部にキザミ目の施されたものを本種とする。色調は内・外面とも橙色または灰褐色で、断面部が黒褐色のものが多く、胎土には繊維のほか細砂を多量に含む。

37~45は口縁部片で、38は波状を呈するものと思われる。キザミ目は、斜位に刺突して施文されたものが大部分であるが、43は横位に刺突して施文されている。37・39・44のキザミ目は工具を水平方向に刺突し、38・41は斜め下方に刺突しており、おのおの浅めと深めものがある。施文具は丸棒が大部分であるが、38は角棒を、40はキザミ目が断面V字状となっており、へら状工具と思われる。口縁部の形状は37・39・40がやや外反し、その他はやや外傾している。口縁端部の形状は、37のように先細りで丸まったもの、41のように先端が平らなもの、42のように内そぎ状のもの、43・44のように内・外面に肥厚したものがある。

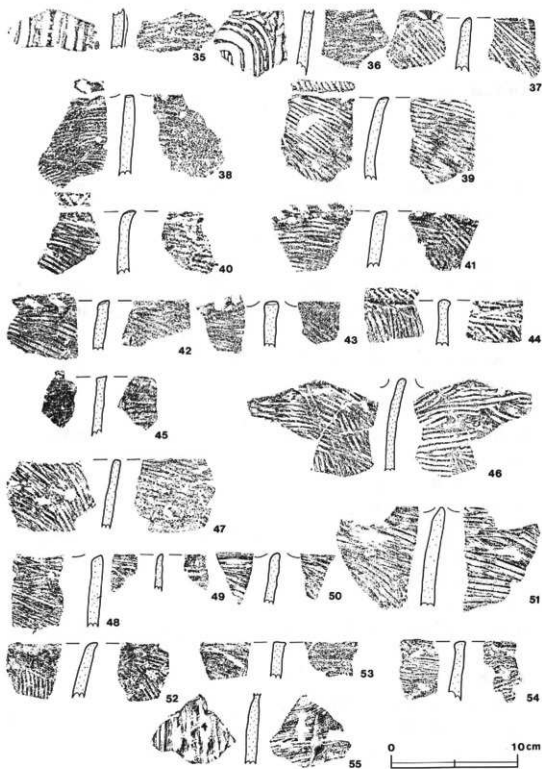
2類b種(第63図 46~54)

口唇部にキザミ目の施されていない土器を本種とした。

46・48・49・51は波状を呈するものと思われる。47の口唇部は平らで、49~51は内そぎ状になっている。52・53の口縁端部の粘土はやや外へはみ出ている。54の口縁端部は内・外面へやや肥厚している。

2類c種(第63図 55~64)

2類の内の胴部片を本種とする。



第63圖 西原遺跡 遺構外出土土器拓影圖(2)

55は口縁部に近い胴部片で、56～62は胴部片である。条痕文は57が内・外面とも縦位に、58が内・外面とも横位に、59が外面を斜位に、内面を縦位にそれぞれ施文されている。60の内面は条痕文が不規則に施されている。63と64は底部付近の胴部片である。

2群の土器

縄文時代前期と思われる土器を本群とする。

1類(第63図 85)

胎土に繊維を含み、縄文を施文した土器を本類とする。

85は胴部片で、無節縄文を縦位に施文している。内面は滑らかにナデである。色調は橙色で、断面部が黒褐色である。胎土は繊維の他に細砂・スコリアを含み、焼成は良好である。

2類(第64図 86～89)

只殻腹線文を施文した土器を本類とする。

86は口縁部片で、外面に輪積み痕が認められ、波状只殻腹線文を横位に施文している。色調は明褐色で、胎土は細砂を多量に含み、焼成は普通である。87～88は胴部片で、87と88は波状只殻腹線文を横位に施文している。88はハマグリなどの貝を使用し、87はアナグラ科の貝を使用している。89はアナグラ科の貝の腹線を押圧して施文している。

3類(第64図 70～72)

単節の縄文原体を押圧した文様をもつ土器を本類とする。

70～72は口縁部の小片である。色調は橙色または灰褐色で、胎土は細砂を含み、焼成は普通である。

4類(第64図 73)

刺突文を施文した土器を本類とする。

73は口縁部の小片で、口唇部にキザミ目を、外面には横位に刺突文を施している。色調は褐灰色で、胎土は砂を多量に含み、焼成は良好である。

5類(第64図 74)

半截竹管文を施す土器を本類とする。

74は波状口縁で、外面に半截竹管による沈線文を施している。色調は灰白色である。胎土は細砂を多量に含み、焼成は不良である。

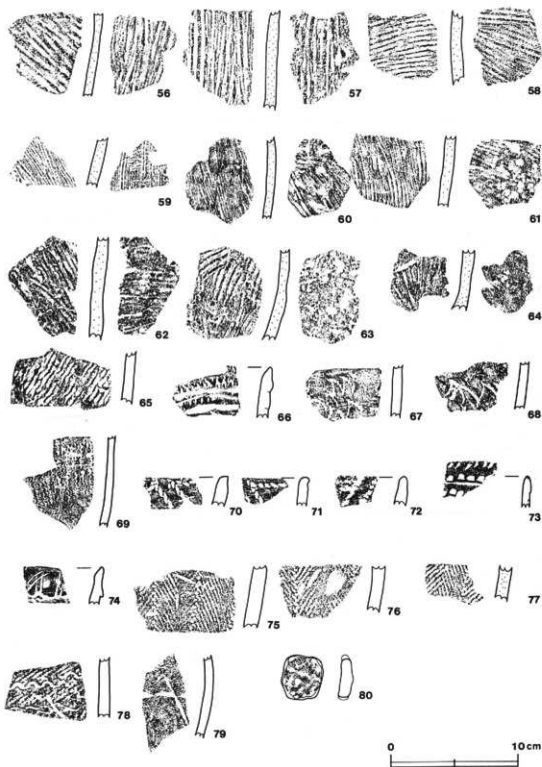
3群の土器

縄文時代中期と思われる土器を本群とする。

1類(第64図 75～77)

羽状縄文を施文した土器を本類とする。

75～77は胴部片で、縦位に羽状縄文が施文されている。色調はにぶい橙色で、細砂を多量に含



第64图 西原遺跡 遺構外出土土器拓影(3)

む。焼成は不良である。

2類 (第64図 78・79)

結節文を主に施文する土器を本類とする。

78は胴部片で、縄文地に結節文が横位に施されている。色調はにぶい橙色で、胎土は砂を多量に含んでいる。79は胴部片で、撚糸文が縦位に施されている。色調は黒褐色で、胎土は砂を含み、焼成は良好である。

土器片鏝 (第64図 80)

80は、C4g8区から出土した縄文土器を利用した土器片鏝である。かなり磨滅していて、切り込みは1か所だけ認められる。外面に微隆起線文と刺突文が施文されている。色調は橙色で、胎土は細砂と繊維を含み、焼成は不良である。法量は縦3.3cm・横3.2cm・厚さ0.9cm・重量9.5gである。

石器類 (第65図 1~3)

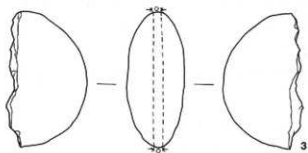
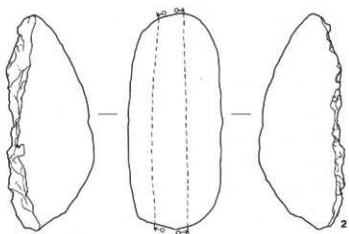
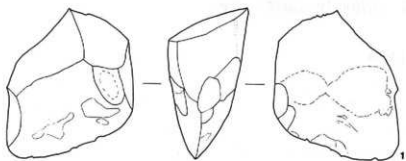
石器類は磨製石斧片1点、打製石斧1点、石槍1点、磨石片2点が出土している。その他に剥片が9点出土している。剥片の石質はチャートとメノウである。

表8 石器類一覧表

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
1	磨製石斧	B3j9	(7.0)	(7.0)	3.9	(206)	砂岩	刃部のみ現存。刃こぼれが認められる。
2	磨石	C3g6	11.4	(4.5)	4.8	(327)	安山岩	刃欠損。側縁に磨った痕跡が認められる。
3	磨石	C1f1	7.1	(4.3)	3.0	(106)	砂岩	刃欠損。側縁に磨った痕跡が認められる。

礫 (PL 34)

礫の出土状況は、縄文時代早期の上器出土分布と同様で、遺跡の北東部と南東部に集中して出土している。礫は径6cmほどの河原石が多く、出土した礫380点の70%ほどにあたる268点は割れている。礫の多くは二次焼成を受けた痕跡が認められる。



第65図 西原遺跡遺構外出土遺物実測図

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第66図)

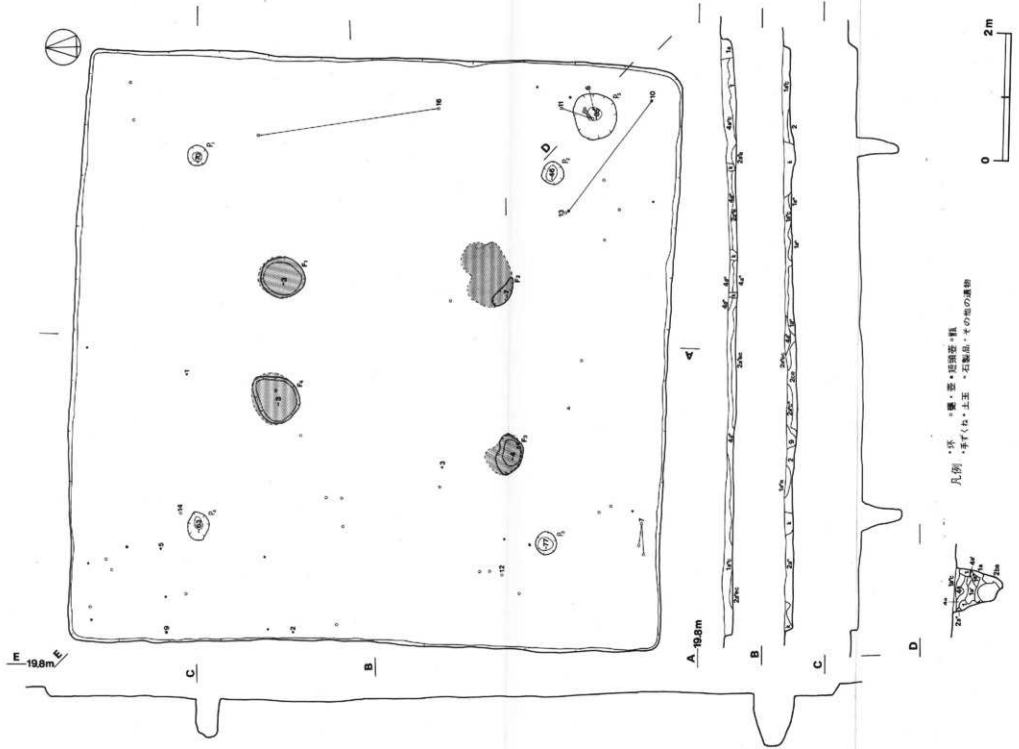
本跡は、C3b4区を中心に確認された竪穴住居跡である。本跡の南側13mには第2号住居跡、北側2mに第3号土坑、西側3mに第4号土坑がそれぞれ隣接している。

平面形は、長軸9.48m・短軸9.24mの正方形を呈し、長軸方向はN-6°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約12cmである。壁溝は検出されていない。床面は平坦で、全体的に軟らかく部分的に木の根により攪乱されている。炉はP1~P4の主柱穴の内側に2基ずつ並んで4基検出されている。いずれの炉も、床面が軟らかく遺存状態が悪かった。炉1は床面中央部北東側に位置し、直径70cmの円形状に焼土が検出された地床炉である。焼土が厚いところで3cmほど堆積しているだけであり、炉1は床面を掘りくぼめないで使用したものと思われる。炉2は床面中央部の南東側に位置し、長径50cm、短径20cmの範囲に焼土が検出された地床炉である。焼土は2~3cm堆積しているだけで、炉の東側は攪乱されていたため規模は確認できなかった。炉3は床面中央部の南西側に位置し、長径60cm、短径47cmの楕円形状に焼土が検出された地床炉であり、焼土が2~3cmの厚さに堆積していただけである。炉4は床面の中央から北西側に位置し、直径83cmの円形に焼土が検出された地床炉であり、焼土が2~3cmの厚さに堆積している。いずれの炉も底面が硬く焼けていないので、炉として取り扱うことが明確でない。

ピットは5か所検出されているが、規模や配列からP1~P4が主柱穴、P5が貯蔵穴と思われる。主柱穴の規模はP1が直径34cm・深さ70cm、P2が直径34cm・深さ46cm、P3が直径36cm・深さ77cm、P4が長径45cm・短径32cm・深さ63cmである。柱穴の底面は直径15~21cmほどであり、平坦で硬く締まっている。主柱穴はほぼ対角線上に位置し、軸間の長さは東西5.8m、南北5.5~5.6mである。貯蔵穴は南東コーナー部に位置し、開口部が直径70cm、底面が直径25cmの円形を呈し、深さが85cmで深くなるほど狭く掘られている。貯蔵穴の覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土で自然堆積の状態を示している。

本跡の覆土は10~20cmと浅く、木の根による攪乱が著しいが、ほぼ自然堆積の状態を示している。覆土中には、焼土粒子、炭化粒子が微量含まれている。

出土遺物は、土師器および土師器片425点、須恵器片2点、土玉2点、滑石製の白玉3点、小石19点である。土師器の器種は、環形土器・甕形土器・短頸壺形土器・埴形土器である。須恵器の器種は、高坏・壺である。なお、土器の点数は接合してからの数であり、完形品も破片も1点と数えてある。遺物は、床面全体からまばらに出土し、貯蔵穴の覆土下位から底部欠損の甕形土器(11)が、口縁部を斜め下にして出土し、この甕形土器の下からはほぼ完形の環形土器(6)が



第66図 西原遺跡第1号住居跡実測図

凡例 灰・土・土壁・土瓦・土玉・石製品・その他の遺物

0 2m

横位の状態で出土している。土師器片の多くは、断面にも加熱を受けた痕跡が認められ三次焼成されている。土土は北西コーナー部と南東コーナー部の床面直上に各1点出土している。白玉は覆土中から3点出土し、小石19点が伊3の北側70cmの床面にかたまって出土している。小石の大きさは、小さいもので5mm×5mm×3mm、大きいもので16mm×12mm×2mmである。

第1号住居跡出土土器解説表 (第67・68図)

番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	環形土器 土師器	A(13.4) B 5.0 C 3.0	口縁部は短く、直立し、体部は底部から内彎して立ち上がる。底部は丸底をへら削りした小さなものである。	外向口縁部から体部の上位までへらミガキ、以下へら削り。内面ナデ。	硬、多量の鉄砂、スコリア 赤色 普通	15% X 内外面に赤彩、内外面に斑点状刺線
2	環形土器 土師器	A(15.4)	口縁部は外反する。体部は内彎し、頸部でくびれる。	外面は口縁部から体部の上位までへらミガキ、以下へら削り。内面へらミガキ。	緻密、言母 赤色 普通	3% X 内外面に赤彩
3	環形土器 土師器	A(11.3)	口縁部は直立し、体部は内彎する。	口縁部から体部上位までの外面へらミガキ、以下へら削り。口縁部内面へらミガキ。体部内面ナデ。	硬、細砂、スコリア 赤色 内面に淡色 普通	2% X 内外面に赤彩 内面に斑点状刺線
4	環形土器 土師器	A(12.8)	口縁部は外反する。体部は内彎し、上位でくびれる。	口縁部外面へらミガキ。体部外面へら削り。内面は磨減し、調整法不明。	緻密、スコリア、赤色 普通 赤色 不良	2% X 外面に赤彩
5	環形土器 土師器	A 4.4 B 5.2 C 4.6	口縁部は短く、直立し、内面は内彎となり、体部は底部から内彎して立ち上がり、中位からは直立する。	口縁部内外面横位のへらミガキ。体部の上位外面に幅広い縁のへらミガキ。体部の下位へら削り。体部内面へらミガキ。	硬砂、黒色砂 赤色 普通 (使用による二次焼成)	80% (12片) X 内外面赤彩 外面に僅
6	環形土器 土師器	A 9.7 B 6.1	口縁部は短く、外反する。頸部は横長の球形である。	体部内外面の中心から口縁部はへらミガキ。体部外面の下位へら削り。口料部及び底部磨減。	黒色砂、スコリア 赤色 普通 (二次焼成)	98% X 若狭式内 内外面に赤彩 内面に斑点状刺線
7	環形土器 土師器	A 17.4	口縁部は直立し、上位で外反する。	口縁部内外面横ナデ。調整部位のハケム調整後ナデ。	硬、砂 赤色 普通 (二次焼成)	25% (6片) X 内面に斑点状刺線
8	鉢形土器 土師器	A(13.7)	胴部から口縁部にかけて強く屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ナデ。内面へらナデ。	黒色砂、多量の砂 外面褐色。内面磨 減不良 (二次焼成)	3% (4片) X
9	短頸壺形土器 土師器	A(12.2)	口縁部はほぼ直立する。	口縁部内面と頸部上位より上の外面横位のへらミガキ。以下の外面へら削り後ナデ。胴部内面ナデ。	茶色砂、スコリア 赤色 普通 (二次焼成)	3% X 内外面とも赤彩 内面に斑点状刺線
10	短頸壺形土器 土師器	A(11.0)	口縁部は直立し、胴部は上位で強く内曲する。	口縁部内外面へらミガキ。胴部外側上位へらミガキ。下位へら削り。内面ナデ。胴部ハケ目調整後へらミガキ。	砂、スコリア 赤色 良好	30% (7片) X 内外面に赤彩
11	腹形土器 土師器	A 18.8 B (29.8)	口縁部は頸部でくの字状に屈曲し、上位で更に外反する。胴部は反斜である。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面横位のへら削り後ナデ。内面へらナデ。胴部外面に粘土くず付着。埴なつくり。	硬、多量の細砂 スコリア 赤色 普通 (二次焼成)	90% (20片) X 若狭式内 外面に僅、内面に 並行、斑点状刺線

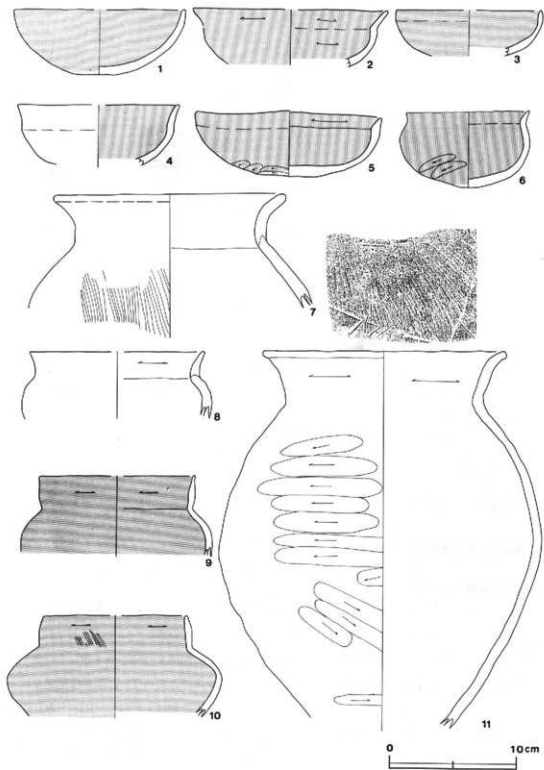
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
12	甕形土器 土師器	A(21.2)	口縁部は頸部でくの字に屈曲し、上位で更に外反する。	口縁部内外面横ナデ。	磁、多量の細砂 スコリア 明赤褐色 普通(二次焼成)	10% (4片) X 内面に斑点状剥離
13	甕形土器 土師器	A(18.6)	口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ、内面ヘラナデ。胴部内外面ナデ。	多量の砂、黒色砂 にふい赤褐色 不良(二次焼成)	2% X 内外面に斑点状剥離
14	甕形土器 土師器	A(17.7)	胴部から口縁部にかけてゆるやかに内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部内面はナデ、外面は磨耗していて観察不明。	磁、特に多量の砂 とスコリア。 にふい褐色 不良	2% X
15	無蓋高坏 灰土器	A(14.4)	口縁部はやや外反しながら立ち上がり、体部との境に線をもち、丁寧なつくりである。	口縁部外面横ナデ、稜の下に7本単位の横線状文が出る。以下同様に張り、調整は1穿。	少量の白色細砂 精良 黄灰色 良好	2% X 黒色の小斑点
16	甕形土器 土師器	A(13.5)	口縁部は頸部で直立し、上位で外反する。	口縁部内外面横ナデ。	磁、砂、スコリア 淡黄褐色 良好	2% X 内面に斑点状剥離

土玉(第68図 17・18)

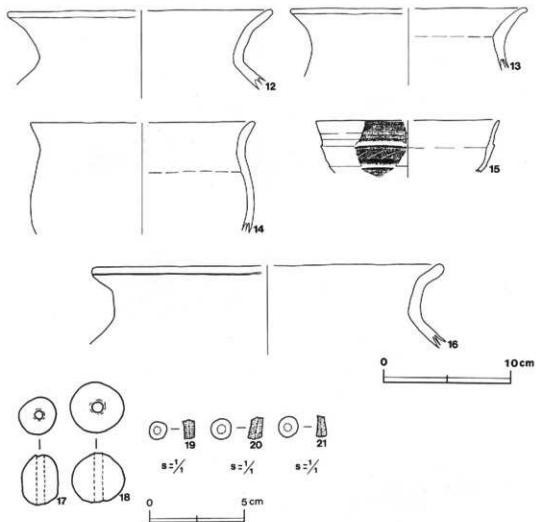
土玉は2個とも完形品であり、17は、長径24.0mm・短径18.0~22.0mmの管状を呈している。孔径が4.5mmほどで、外面に赤彩痕が認められる。重量は9.5gである。18は、直径25.0~28.0mmのほぼ球形を呈している。孔径が4.5mmほどで、重量は18.5gである。2個とも、孔は一方から穿たれており、色調はにふい褐色を呈し、胎土は細砂・雲母を含み、焼成は良好である。

白玉(第68図 19・20・21)

白玉は3個とも滑石製の完成品で、斜めに難に截断されたものである。周縁は中心にわずかに稜が認められ、稜の左右に斜位の擦痕が認められる。19の法量は、直径5.2mm・長さ3.0mm・孔径2.0mmであり、20の法量は、直径5.5mm・長さ3.0~4.0mm・孔径2.0mmであり、21の法量は、直径5.0mm・長さ2.0~3.0mm・孔径2.0mmである。



第67图 西原遺跡第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第68図 西原遺跡第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第2号住居跡 (第69図)

本跡は、C3g2区を中心に確認された竪穴住居跡で、北東壁にそって第2号溝が延びている。本跡の北11mに第1号住居跡、北西20mに第6号土坑が隣接している。

平面形は、長軸9.94m・短軸7.90mの長方形を呈し、長軸方向はN-55°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は23cmほどであり、壁溝は検出されていない。床面は平坦なロームで、南コーナー部の床面に幅1.2m、長さ3m、高さ12cmほどの周堤が貯蔵穴(P6)を取り囲むように検出された。周堤は硬く踏み固められていて、断面形はなだらかな山形になっている。この周堤は土層断面から判断すると、周堤の部分だけ掘り残すようにして構築されたものである。

炉は床面の中央からやや北西に寄ったP1～P4の主柱穴を結ぶ内側に位置した地床炉である。

平面形は長径90cm・短径67cmの楕円形を呈し、深さ7cmほど皿状に掘りくぼめられている。杯の底面は熱により変色し、硬化している。

ピットは7か所検出され、P1～P4は規模や配列から主柱穴と思われる。主柱穴の規模は長径38～68cm、短径35～52cm、深さ68～82cmで、底面は平坦で硬くなっている。主柱穴はほぼ対角線上に位置し、軸間の長さは長軸で5.8～6.2m、短軸で4.4～4.5mである。P3の上部は攪乱坑により切られている。P5は貯蔵穴の周境を掘り込んだ円形状のピットで、長径45cm、短径37cm、深さ52cmであり、柱穴と思われる。P6・P7は位置や規模などから貯蔵穴と思われる。P6は楕円形を呈し、開口部が長径64cm、短径57cm、底面が長径25cm、短径20cm、深さが78cmで、深くなるほど狭く掘られ、底面は平坦になっている。P6内の覆土は上層に黒褐色土が、下層に褐色土が堆積し、黒褐色土中には、炭化材が多量に含まれており、本跡の焼失後に埋没したと思われる。P7は、円形を呈し、開口部の直径70cm、底面の直径20cm、深さが103cmで、P6同様深くなるほど狭く掘られ、底面は凹状になっている。P7内の覆土は、黒褐色土と暗褐色土が互層をなして自然堆積の状態を示している。

本跡の覆土は、黒色土を主体とする土層で自然堆積を示しているが、部分的に攪乱を受けており、特に北東側が強く攪乱されている。覆土の中層から下は、炭化材および焼土を多量に含んでいる。覆土下層には焼土域が北西壁ぎわに2か所、北東壁ぎわから南東壁ぎわにかけて4か所検出されている。また、炭化材が床面の壁ぎわを中心に多数検出されている。炭化材は大きいものが直径20cm、長さ70cmほどあり、床面の中央部を向いているものが多く認められた。土層の状況、炭化材の出土状況から本跡は火災に遭ったものと思われる。

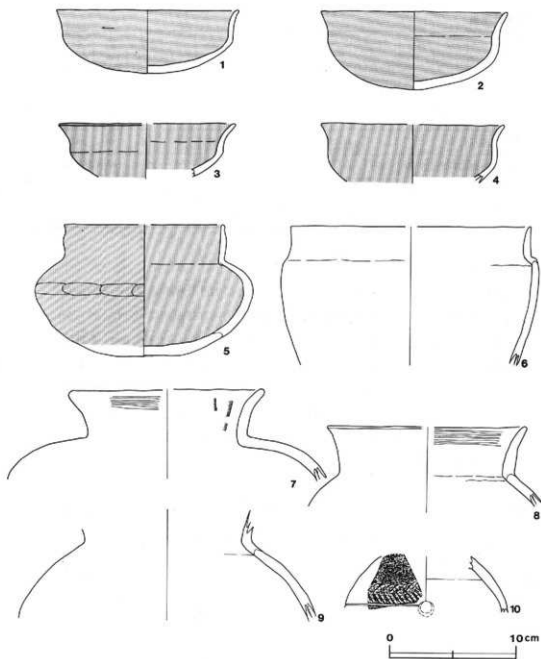
出土遺物は、土師器および土師器片230点、須恵器片1点、土玉28点、砥石1点、滑石製の双孔円板3点である。土師器の器種は、坏形土器・埴形土器・甕形土器・壺形土器・短頸壺形土器である。須恵器の器種は甗である。土師器は、南コーナーの貯蔵穴付近の床面からほぼ完形に復元できた坏形土器2個が出土しているが、多くは復元できない破片で、床面全体からまばらに出土している。須恵器の甗は覆土から出土している。土玉も床面全体からまばらに出土している。砥石は、南西壁ぎわの床面から出土している。双孔円板は3点出土しているが、この内2点は、まとまって北西壁近くの床面直上から斜位の状態で出土し、もう1点はこの2点と離れた東コーナー付近の床面から出土している。出土遺物は出土状況から本跡に伴うものと思われる。

第2号住居跡出土土器解説表(第70図)

番号	器種	法数(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	球形土器 土師器	A 14.4 B 5.0	口縁部はやや外反しなから立ち上がる。体部は底部から角度を強めながら内彎し、上位で直立する。丸底、薄手。	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラズリ。内面ヘラミギキ。	多量の砂 棕色 不良(二次焼成)	60% (3片) X 内外面に赤彩
2	球形土器 土師器	A 14.4 B 6.2	口縁部は体部より外側へ外反する。体部は角度を強めながら内彎する。丸底。	内外面ヘラミギキ。	細砂、雲母 棕色 良好(二次焼成)	90% (5片) X 内外面に赤彩 内外面に煤
3	球形土器 土師器	A(13.7)	口縁部は大きく外反する。体部は内彎して立ち上がる。	口縁部内外面横位のヘラミギキ、体部外面ヘラミギキ。	細砂 赤色 普通	2% (2片) X 内外面に赤彩
4	球形土器 土師器	A(14.5)	口縁部は外反し、体部は内彎して立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ、体部内外面ヘラミギキ。	細砂 赤色 普通	3% X 内外面に赤彩
5	物原巻形土器 土師器	A(12.8) B 10.3 C 4.4	口縁部は直立する。胴部は底部から角度を強めながら内彎する。最大径を胴部上位に有する。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面幅広のヘラミギキ、内面ナデ。	細砂 赤、黒色 良好	50% (9片) X+Y 外面に赤彩
6	鉢形土器 土師器	A(19.0)	口縁部は直立し、端部でやや外反する。胴部は上位で内側へ内彎し、口縁部との間に段を作る。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面ヘラ削りナデ、内面ヘラナデ。	多量の砂、黒色砂 棕色 不良(三次焼成)	2% X
7	鉢形土器 土師器	A(15.0)	口縁部は胴部でくの字に内彎し直立ぐみに外反する。	口縁部横位のハケミ調整ナデ、胴部内外面ヘラナデ。	硬、多量の細砂、外面にふい棕色、内面灰褐色 良好	3% (5片) X+Y 外面に煤
8	鉢形土器 土師器	A(15.5)	口縁部は胴部で直立し、中位から外反する。	口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ。	硬、砂、黒色砂 灰褐色 良好	10% X
9	鉢形土器 土師器		口縁部は胴部でくの字に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	硬、砂、黒色砂 外面にふい棕色、内面灰褐色 良好(二次焼成)	10% Y
10	罎 須恵器		小片のため、存り、器形の特徴は明らかでないが、破片の下面に孔の一部が残っている。	外面に彫曲による線形模の刺突文が横位に走る。	白色砂、精良 外面灰褐色の自然焼、内面黄灰色	2% X

土玉(第71図)

土玉は28点とも球形を呈しているが、20・22・23・24・26・28はゆがんだ球形を呈している。孔は一方から穿たれている。孔の形はほとんど円形であるが、27は正方形、35は八角形状にあげられている。胎土は砂・雲母を含み、焼成の良好なものは12・16・18・19・20・21・27・28・29・31で、不良なものは23・25・26・36である。色調は棕色が16・20・27・34・37で、ふい褐色が17・18・19・29・30・32である。31は黒色である。その他は、二次焼成のため灰白色となっている。17と34は半分欠損している。土玉の計測値は次の通りである。



第70図 西原遺跡第2号住居跡出土遺物実測図(1)

土五計測表

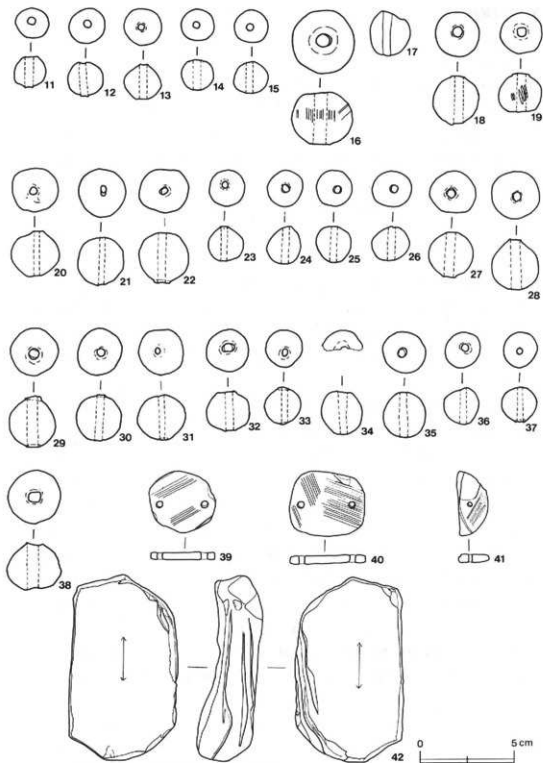
番号 法名	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
底径(mm)	16	17~19	17~19	15~17	15~18	26~32	21	23	18~23	24~25	21~24	22~26	16~18	16~19
孔径(mm)	4	4	4	4	4	8	4.5	5	5	3~4.5	4	4~5	3~4	4.5
重量(g)	4.0	6.6	5.5	4.0	4.5	25.0	4.5	13.0	9.0	12.5	14.5	13.0	5.0	6.0
番号 法名	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
底径(mm)	18~19	17~21	21~24	25	24	23	22~24	20~21	18	23	21~23	16~19	16~18	23~28
孔径(mm)	4	4	5	5	6	4.5	2.5	5	4	4.5	4~4.5	4	3	5.3~6
重量(g)	5.0	6.0	11.0	14.3	13.5	11.5	12.0	8.5	6.0	4.0	9.5	5.0	5.0	16.0

双孔円板 (第71図)

双孔円板は、3点とも滑石製で、楕円形の板状を呈しており長径の両端に一方から孔が穿たれている。表・裏面には同一方向の擦痕が、側縁には縦方向に擦痕が認められ、滑らかになっている。39は、長径34.0mm・短径32.0mmの楕円形を呈し、厚さ4.0mm・孔径3.0mm、重量は9.5gである。40は、長径39.0mm・短径34.0mmの胴張り方形を呈し、厚さ4.0mm・孔径3.0~4.0mm、重量は12.5gである。孔は、一面の直径が4.0mm、他面の直径が3.0mmに穿たれている。41は、中央で割れた片方のもので、孔は1個だけである。41の法量は、長径33.0mm・短径11.0mm・厚さ3.0~4.5mm・孔径2.0mm、重量は4.5gであり、割れた側縁は横位に研磨されている。表面には断面V字状の溝が弧状に刻まれており、切断の跡と思われる。

砥石 (第71図)

42は、表面が皿状に、裏面が平らに磨り減っている。側面の1面には断面がV字状の溝(深さ4.5mm)が3本走っている。溝は使用痕と思われる。法量は幅5.6cm・長さ9.9cm・厚さ2.9cm、重量205gである。石質は泥岩である。



第71图 西原遺跡第2号住居跡出土遺物実測図(2)

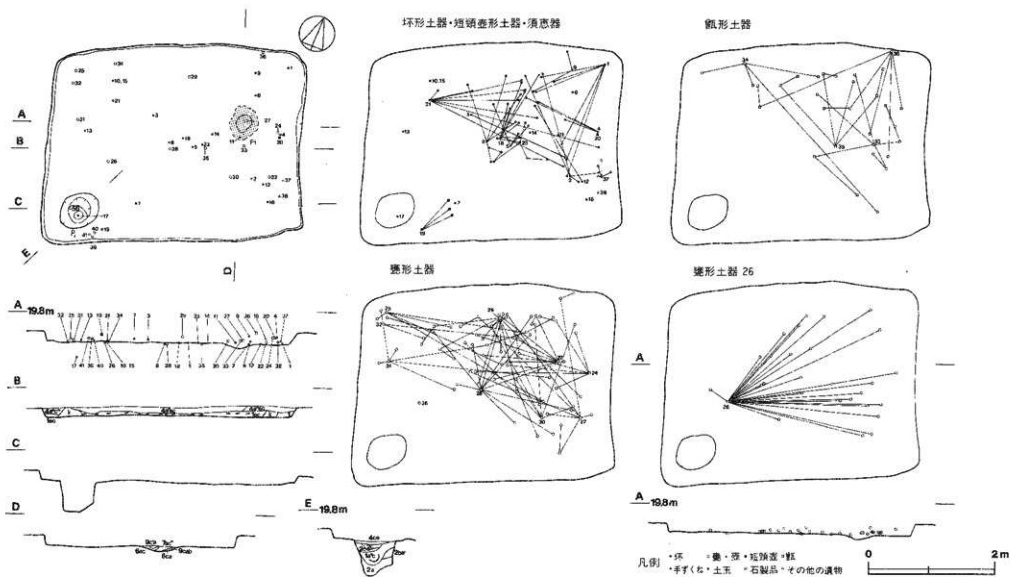
第3号住居跡（第72図）

本跡は、D2b8区を中心に確認された竪穴住居跡で、北西9mに第4号住居跡、南西10mに第5号住居跡が隣接している。

平面形は、長軸4.44m・短軸3.10mの長方形状を呈し、長軸方向はN-65°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は18cmほどであり、残溝は検出されていない。床面は平坦なロームで、北東部が硬くなっているが他は軟らかい。炉は北東コーナー寄りに位置し、長径55cm・短径45cmの楕円形を呈し、深さ7cmほど皿状に掘りくぼめられた地床である。炉の覆土中に焼土が多量に含まれているが、炉床は硬く焼けていない。床面および屋外から柱穴と思われるものは検出されていない。P11は、規模や位置などから貯蔵穴と思われる。貯蔵穴は平面形がほぼ円形を呈し、開口部の大きさは長径65cm、短径55cm、底面の大きさは長径42cm、短径35cmである。深さは56cmで、底面から15cmほどの高さのところまで段をつくっている。貯蔵穴の覆土は上層が暗褐色土、下層が褐色土で、上層の下位から土師器の環形土器が出土している。

本跡の土層は大きく分けて2層からなり、部分的に攪乱されているが自然堆積の様相を示している。上層は黒褐色土が中央部へ流れ込むようにしてレンズ状に堆積し、下層は暗褐色土が堆積している。覆土に含まれる焼土粒子や炭化粒子の量は微量であるが、炭化材が数点検出されており、本跡は火災に遭ったと思われる。

出土遺物は、土師器及び土師器片265点、須恵器2点、滑石製の双孔円板3点である。土師器の器種は、甕形土器・甌形土器・壺形土器・短頸壺形土器・鉢形土器・環形土器である。須恵器は坏身と坏蓋がセットで出土している。遺物は西コーナーと東コーナーを結ぶ幅1mほどの帯状の部分に集中している。多くの遺物は床面の上から出土しているが、北西壁および北東壁に近い遺物は、中央部へ流れ込むような状況で出土している。土師器のうち短頸壺・環形土器などは完形で出土したものが多く、甕・甌・壺形土器片などは床面に広範囲に散らばって出土し、完形に近く復元されたものが多い。ほぼ完形に復元された26の甕の口縁部は、第72図のように貯蔵穴の北側床面から出土したが、これに接合する破片65点は、北西壁および北東壁付近までの半径2.5mほどの範囲に放射状に散らばっていた。また、壁近くから出土した破片は、床面中央部から出土したものより出土レベルが高くなっている。26のように土器片が放射状に散らばって出土した土器は、甕形土器では24・27・29、甌形土器では33~35、環形土器では1・4・8・21などである。15の環は、口縁を上にして10の環の上に重なって出土し、10と15の環は2枚重ねて口縁を上にして出土している。須恵器の2点は北東壁付近にかたまって床面直上から出土し、坏身はその場で口縁を下にして9片に割れて出土している。坏蓋は坏身の出土した地点の北西側40cm×30cmの範囲に7片に割れて散らばった状態で出土している。貯蔵穴の覆土中位からは、環形土器の完形品が流れ込むような状況で出土している。双孔円板の3点は南東壁ぎわの覆土上位からかたまって



第72図 西原遺跡第3号住居跡実測図・遺物出土状況図

出土している。

遺物の多くは、強く三次焼成を受けており復元された上器の中には、焼けた破片と焼けてない破片が隣り合って接合するものが目立つので、破砕してから焼けたものと思われる。遺物は出土状況から、住居が放棄されてまもなく短期間に投棄されたものと思われる。

第3号住居跡出土土器解説表(第73-78図)

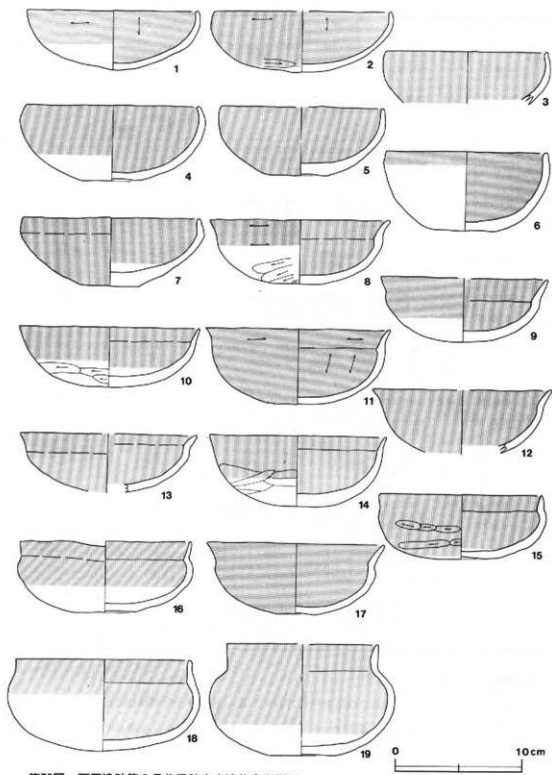
番号	器種	法製(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
1	坏形土器 土器器	A 13.6 B 4.8	底部から口縁部まで、角度を狭めながら内脣し、口縁部は短く、直立する。口縁部と体部との境は不明瞭。丸底、薄手。	内外面ヘラミガキ。	硬密 棕色 普通	80% (11片) Y 内外面に赤彩。外面に斑点状刺線。
2	坏形土器 土器器	A 13.6 B 4.9	体部は内脣しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く、やや内脣する。九底に半内葉の水平なヘラ削り。薄手で軽い。	口縁部から体部中位までの外面ヘラミガキ、以下ヘラ削り後ナデ。内面ヘラミガキ。	硬質 棕色 普通	70% (11片) X-Y 内外面に赤彩
3	坏形土器 土器器	A(12.7)	体部は強く内脣し、口縁部は短く、直立する。	内外面ヘラミガキ。	黒色砂、スコリア 赤色 良好	25% (2片) Y 内外面に赤彩
4	坏形土器 土器器	A 13.6 B 6.0 C 4.9	口縁部は内傾する。体部は内脣しながら立ち上がり上位で最大径となる。底部は中央がややくぼむ平底である。	口縁部内外面ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り。	多量の黒色砂 赤褐色 普通	90% (7片) X+Y 上半内外面に赤彩 外面に斑点
5	坏形土器 土器器	A 12.9 B 5.4	体部は底部から内脣しながら立ち上がり、口縁部は直立し、上端はまるまっている。底部は小さな平底である。	内外面ヘラミガキ。	砂、スコリア 赤色 良好 (二次焼成)	40% (5片) Y 内外面に赤彩、内面に斑点状刺線
6	坏形土器 土器器	A 12.8 B 6.3 C 4.6	体部は直立きみに内脣して立ち上がり、口縁部は短く、直立する。平底。厚手なつくりである。	口縁部外面ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	多量の細砂 棕色 普通 (二次焼成)	100% Y 内面と口縁部外面に赤彩、内面に斑点
7	坏形土器 土器器	A 13.9 B 5.5 C 4.6	口縁部はやや内傾する。体部は底部から内脣しながら大きく開き、上位に最大径をもつ。平底である。	口縁部内外面横位のヘラミガキ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面下に赤色で+印。	多量の黒色砂 棕色 普通 (二次焼成)	99% X 内外面に赤彩、内外面に斑点状刺線
8	坏形土器 土器器	A 14.1 B 5.0 C 4.0	口縁部は外反し、内面に軽い稜をもつ。体部は内脣して立ち上がり、上位でくびれる。平底である。	口縁部から体部上位までの外面ヘラミガキ。体部外面ヘラ削り。底部一方向のヘラ削り。内面ヘラミガキ。	多量の砂、灰色砂 赤色 普通 (二次焼成)	80% (6片) X+Y 内外面に赤彩
9	坏形土器 土器器	A 13.4 B 5.0	口縁部は外反し、内面に稜をもつ。体部は内脣しながら開く。丸底である。	口縁部内外面横位のヘラミガキ。体部外面ヘラミガキ。底部ナデ。	細砂 赤色 普通 (二次焼成)	30% (7片) X+Y 内外面に赤彩
10	坏形土器 土器器	A 14.2 B 4.8	内脣の丸底から体部上位へ厚みを減しながら内脣して立ち上がる。口縁部は短く外反し、内面に軽い稜をもつ。丸底。	口縁部から体部中位までの外面ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。	多量の細砂 赤色 普通 (口唇部付近二次焼成)	90% (7片) Y 上半の内外面に赤彩
11	坏形土器 土器器	A 14.6 B 5.8 C 3.4	口縁部は外反し、外部内面に稜をもつ。体部は内脣して立ち上がり、上位でややくびれる。底部はヘラ削りの平底である。	口縁部内外面横位のヘラミガキ。体部外面ヘラ削り。内面横位のヘラミガキ。	硬、砂、黒色砂 明赤褐色 普通 (外面下部二次焼成)	80% (2片) Y 内外面に赤彩

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	若土・色調・焼成	備考
12	環形土器 土器器	A(14.2)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面ヘラミガキ、体部外面へう張り後ナデ、内面ヘラミガキ。	細砂 赤色 普通(二次焼成)	40% X+Y 内外面に赤彩
13	環形土器 土器器	A(14.0)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内外面横位のヘラミガキ、体部外面幅広いヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	細砂 赤色 良好	5% Y 内外面に赤彩、外面下半に灰
14	環形土器 土器器	A 13.8 B 5.6	内径の丸底から体部上位へ厚みを減しながら内彎して立ち上がる。口縁部は短く、外反し、内面に軽い稜をもつ。丸底。	口縁部の外面ナデ、体部の外面へう張り後ナデ、内面ナデ。	細砂、スコリア 赤褐色 普通	90% Y 内外面に赤彩
15	環形土器 土器器	A 12.8 B 5.1	口縁部は直立し、上端は尖っている。底部は丸底であるが中央部がへこんでいる。	口縁部内外面横位のヘラミガキ、体部外面幅広いヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	細砂 赤褐色 普通(二次焼成)	90% Y 内外面に赤彩 斑点状剥離
16	環形土器 土器器	A 13.6 B 5.5 C 5.0	頸部を押しつぶしたような器形である。	口縁部から体部中位までの外面ヘラミガキ、以下へう張り後ミガキ、内面ナデ。	微、細砂 赤褐色 普通(二次焼成)	90% (11片) X 上半部に赤彩、内面に斑点状剥離
17	環形土器 土器器	A 14.2 B 5.2 C 4.2	口縁部は外傾する。体部は内彎して立ち上がり、上位でくびれ、稜をつくる。底部は小さな平底である。	調整が難しく調整方法不明。	砂 赤褐色 普通	80% X (筋線土内) 内外面に赤彩
18	環形土器 土器器	A 13.8 B 7.1	体部は角度を強めながら内彎して立ち上がる。口縁部は短く、直立し、内面に稜をもつ。	口縁部から体部上位までの外面ヘラミガキ、以下へう張り後ナデ、口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ナデ。	黒色砂、多量の砂 赤色 普通(二次焼成)	60% (12片) X+Y 内外面上半に赤彩 内面に斑点状剥離
19	短頸壺形 土器器	A(11.9) B 8.7 C 5.1	口縁部はほぼ直立する。胴部は内彎しながら立ち上がり、上位に最大径をもつ。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面横位のヘラナデ、内面ナデ。	多量の黒色砂 淡褐色 普通	47% (7片) X 上下内外面に赤彩
20	短頸壺形 土器器	A 10.8 B 9.5 C 4.8	口縁部はほぼ直立する。胴部は底部から角度を強めながら内彎して立ち上がり、上位で内面する。	口縁部内面と外面の口縁部から胴部上位までミガキ、胴部外面はへう張り後ナデ、内面ナデ、底部に木製板。	細砂 赤褐色 普通	80% X 内外面に赤彩、内面に斑点状剥離
21	鉢形土器 土器器	A 17.6 B 11.5 C 5.2	杯や碗を大きくした器形である。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へう張り後ナデ、内面ナデ。	多量の黒色砂 赤褐色 普通(二次焼成)	80% (22片) X+Y
22	壺形土器 土器器	A 17.6 B 20.9 C 6.0	口縁部は胴部でくの字に屈曲外反し、上部で更に外反する。胴部はほぼ球形である。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面はへう張り後ナデ。	特に多量の黒色砂、外面赤褐色、内面褐色 不良(三次焼成)	85% (42片) X+Y
23	短頸壺形 土器器	A 11.8 B 7.6 C 4.8	口縁部は直立して立ち上がり上位で外反する。胴部は内彎しながら立ち上がり、上位に最大径をもつ。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面へう張り後ナデ。	多量の黒色砂、硬淡褐色 普通(二次焼成)	61% (15片) Y 口縁部内面に灰
24	壺形土器 土器器	A 16.5 B 19.7 C 5.7	口縁部は直立きみに外反し、上位で外面へ更に外反する。胴部内面に稜を有し、胴部上半は湾いっくりである。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面へう張り後ナデ、内面ナデ。	多量の黒色砂、スコリア 赤褐色、赤い稜 普通(二次焼成)	80% (35片) X+Y
25	壺形土器 土器器	A 15.9	口縁部は直立して立ち上がり、上位で外反する。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面へう張り後ナデ、内面ナデ。	多量の砂、スコリア 暗赤褐色 不良(二次焼成)	60% (28片) X+Y
26	壺形土器 土器器	A 19.5 B(31.7)	口縁部は直立きみに立ち上がる。胴部は球形で、上半の厚さか4**と薄く丁寧なつくりである。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面へう張り後ナデ、内面ナデ。	長石、砂 赤褐色 普通	85% (66片) X+Y 胴部外面に灰

番号	品名	寸法(mm)	形状の特徴	手法の特徴	色調・色調・成成	備考
27	成形土器 七脚器	A 14.3	口縁部は外反し、内面に胴部との境に横溝あり。胴部は球形で、中位に最大径を有する。	口縁部内外面滑ナテ。胴部内外面滑ナテ。胴部下位から底部へラナテ。	多量の黒色砂、 細かい褐色 不貞(三次焼成)	50% (17片) X + Y 外面の胴下部に灰
		B 17.0				
		C 6.0				
28	成形土器 土脚器	A 18.6	口縁部は胴部でくの字に屈曲し外反する。胴部はほぼ球形である。	口縁部内外面滑ナテ。胴部外面はへう溜り後ナテ。内面滑ナテ。	多量の黒色砂、 スコーリア 浅茶褐色 不貞(二次焼成)	80% (43片) X + Y
		B 21.6				
		C 5.2				
29	成形土器 土脚器	A 20.7	口縁部は外反する。胴部は球形を呈し、底部はやや上げ脚となっている。 胴部下半は凸凹で滑なつくり。	口縁部内外面滑ナテ。胴部外面の上半ナテ。下半へう溜り。内面滑ナテ。器面は粗い。	砂、赤褐色、スコーリア 細かい褐色 不貞(使用による 二次焼成)	80% (57片) X + Y 胴部中央に三角形 状のへう記号。
		B 26.8				
		C 7.3				
30	成形土器 土脚器	A 20.6	口縁部は直立きみに外反し、内面に胴部との境に横溝あり。 胴部はほぼ球形で、器厚が5~9mmと薄なつくり。	口縁部内外面滑い滑ナテ。胴部外面の上位へラナテ。中・下位へう溜り後ナテ。胴部内面滑ナテ。底部付近に粘つく付着。	多量の黒色砂 褐色 普通(三次焼成)	80% (30片) X - Y 内面に黒点状刻線
		B 23.5				
		C 7.3				
31	成形土器 土脚器	A 15.6	口縁部は外反し、内面は胴部との境に斜めをもつ。胴部はほぼ球形である。	口縁部内外面滑ナテ。胴部外面へう溜り後ナテ。内面滑ナテ。	黒色砂、スコーリア 明赤褐色 良好(二次焼成)	65% (33片) X + Y 内面に黒点状刻線
		B 25.6				
		C 8.2				
32	成形土器 土脚器	A 18.6	口縁部は直立きみ、上位で外反する。胴部は球形で、底部は平突である。胴部上半は薄く、茶なつくりである。	口縁部内外面滑い滑ナテ。胴部外面へう溜り後ナテ。内面滑ナテ。外面は粗い。	良好、多量の砂 赤褐色 不貞(三次焼成)	90% (58片) X + Y
		B 33.8				
		C 8.2				
33	成形土器 土脚器	A 19.0	口縁部は肥厚し複合口縁状である。胴部は内脚形で、底径2.2cmほどの孔がある。孔は焼成後大きく閉らている。	外面はへう溜り後、口縁部から胴部中位までナテ。内面滑ナテ。	多量の黒色砂、 スコーリア 細かい褐色 良好	75% (23片) X - Y
		H 15.3				
		C 4.2				
34	成形土器 七脚器	A 18.0	口縁部は直立きみにせり上がり上位で外反する。胴部はなだらかに内彎しており、最大径は胴部中位より上にある。	外面は口縁部から胴部中位までナテ。下部はへう溜りやや大きかかっている。へう溜りは、器で器面凸凹。内面滑ナテ。	黒砂、スコーリア 細かい褐色 良好(三次焼成)	75% (21片) X + Y
		B 27.5				
		C 8.0				
35	成形土器 土脚器	A 31.3	口縁部は外反し、上位で更に大きく外反する。胴部は長く、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面滑ナテ。胴部外面へう溜り後ナテ。胴部は凸凹で滑なつくり。	多量の黒色砂 明赤褐色 不貞	85% (43片) X + Y
		B 22.5				
		C 8.4				
36	成形土器 土脚器	A 17.4	口縁部は外反する。胴部は長く、最大径を中位にもつ。胴部を孔か左右対称に2つある。底部に1つ直径8cmの孔あり。	口縁部内外面滑ナテ。胴部内外面へラナテ。器面は粗い。	多量の黒色砂、 スコーリア 褐色 普通(二次焼成)	85% (48片) X - Y
		B 22.8				
		C 8.0				
37	土器 酒器	A 12.1	天井と口縁の境の境は、わずかに反りをもっている。口縁部は傾斜し、わずかに凹縁状となっている。	口縁部滑ナテ。天井部の外は同形へう溜りか及んでいないため、未焼きの凸凹が残り、軽微な反りをする。	白色の砂、細砂 灰色 普通	100% (7片) Y
		B 5.0				
		C 5.0				
38	土器 酒器	A 10.8	垂受部の先端部は鋭きに欠ける。口縁部はわずかに凹縁状である。内面の未焼き帯は狭くない。	口縁部内外面滑ナテ。胴部は長く、垂受け部の下は、同形へう溜りが及ばない。内面中央部に1.3cm位の木目状紋。	白色の砂・細砂 灰色 普通	90% (9片) Y
		B 4.7				
		C 4.7				

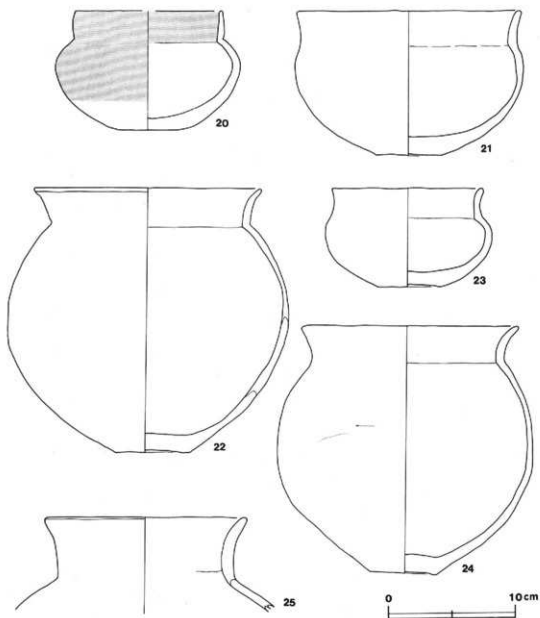
双孔円板 (第78図)

双孔円板は、3点とも滑り裂で板状を呈しており、表・裏面および側縁には榫痕が認められ、側縁は角ばっている。39は、長径31.0mm・短径27.0mmの楕円形を呈し、厚さは4.0mmである。孔は貫通したものが2個で、それぞれの近くに途中まで穿った跡がある。孔径は1.5~2.0mmで重量は8.0gである。40は、長径31.0mm・短径30.0mmの円形を呈し、厚さは5.0mmである。貫通孔が長軸

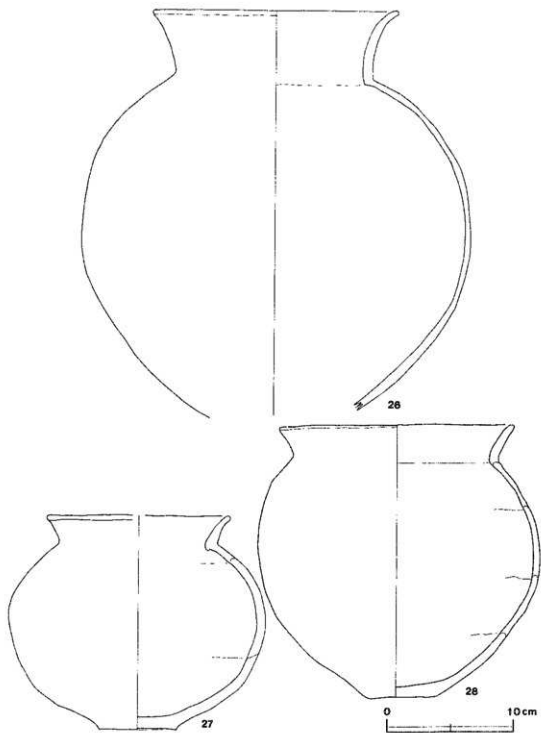


第73図 西原遺跡第3号住居跡出土遺物実測図(1)

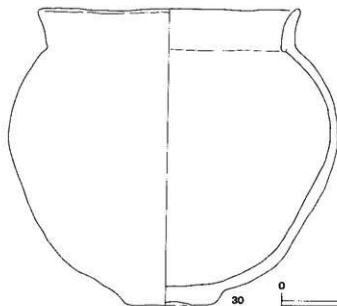
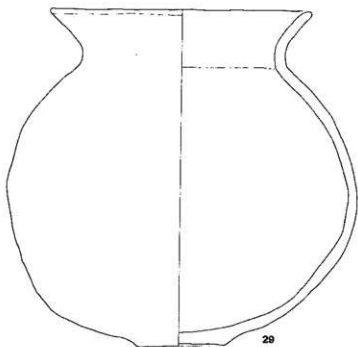
方向の両端に2個あり、1方の孔の上位に同じ径の孔が途中まで穿ってある。孔径は1.5~2.0mmで、重量は8.5gである。41は、長径28.0mm・短径24.0mmの楕円形を呈し、厚さは35.0mmである。貫通孔が2個、長軸方向の両端にあり、孔径は1.5~2.0mmで、重量は5.0gである。



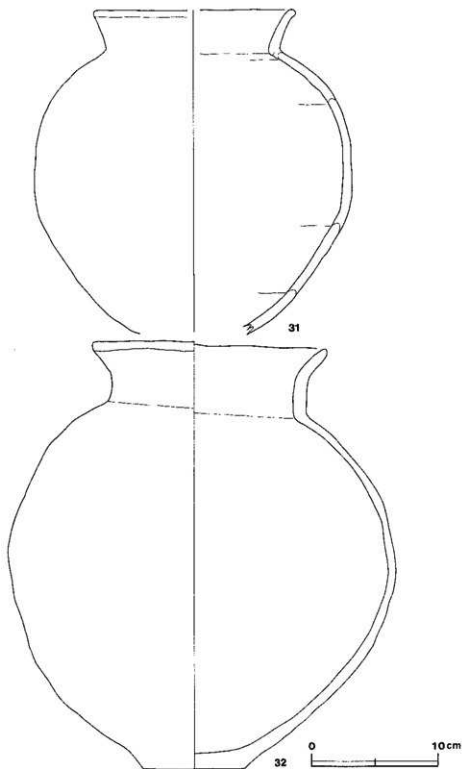
第74図 西原遺跡第3号住居跡出土遺物実例図2)



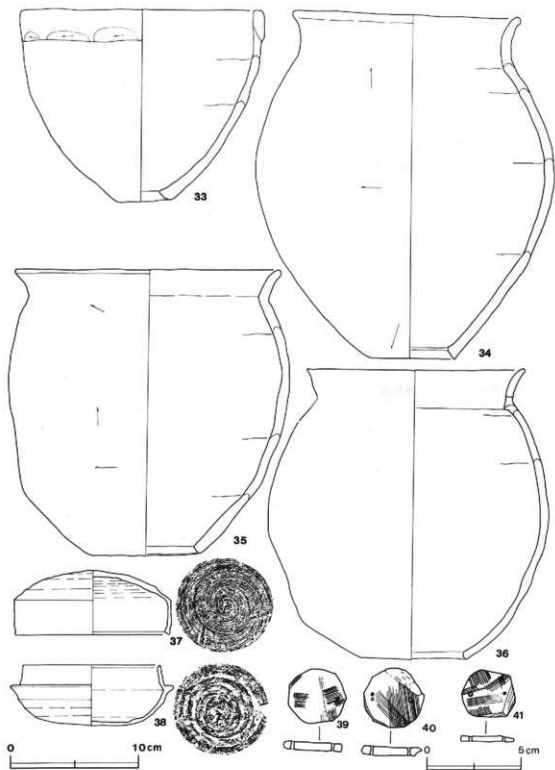
第75図 西原遺跡第3号住居跡出土物実測図(3)



第76图 西原遺跡第3号住居跡出土遺物実測図(4)



第77図 西原遺跡第3号住居跡出土遺物実測図(5)



第78図 西原遺跡第3号住居跡出土遺物実測図(6)

第4号住居跡（第79図）

本跡は、C2j6区を中心に確認された竪穴住居跡であり、住居の南東部は北東へ延びる第2号溝により切られている。南東9mに第3号住居跡が隣接している。

平面形は、長軸3.92m・短軸2.66mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-37.8°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10cmほどであり、壁溝は検出されない。床面は、竪を中心とする北西側がやや低くなっているほかは平坦で、中央部2.2m×2.2mの範囲が踏み固められかなり硬くなっている。竪は北西壁側に位置し、直径40cmの円形を呈し、4cmほど掘りくぼめられた地床炉である。焼土の堆積は薄く、炉の底面は硬く焼けていなかった。床面および屋外からビッドは検出されていない。

本跡の覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とする土層で、著しく木根により擾乱されている。焼土粒子・炭化粒子の混入は微量である。

遺物は、土師器及び土師器片64点、小石1点が出土している。土師器の器種は甕形土器・埴形土器・埴形土器である。土師器はいずれも小片で、竪に近い地点のものは覆土下位から、床面中央部のものは床面直上から出土している。出土遺物は出土状況から本跡に伴っていると思われる。

第4号住居跡出土土器解説表（第79図）

番号	器種	法量(m)	器形の特徴	手法の特徴	焼土・色調・焼成	備考
1	甕形土器 土師器	A(16.4)	口縁部はゆるくコの字状に外反する。口唇部に刻みが部分的に認められる。	口縁部内外面横ナデ。	焼。砂。赤褐色 浅灰褐色 良好	3% X
2	埴形土器 土師器	A(12.7)	口縁部は外反する。器内は体部は厚いが、口縁部は薄い。	口縁部内外面ヘラミガキ。	細砂 赤色 良好	2% Y 内外面に赤彩

しない。

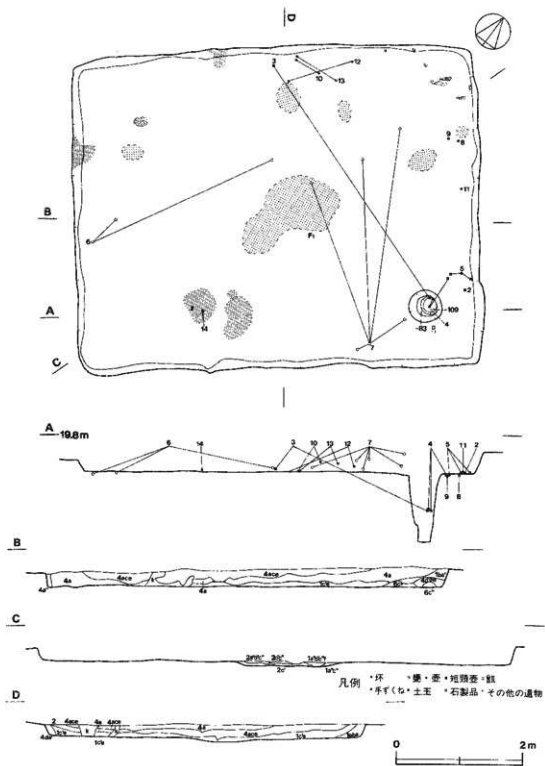
柱穴は、屋内・屋外から検出されていない。貯蔵穴は、東コーナー部に位置し、開口部の平面形が直径52cmの円形を呈している。底径は16cm、深さは109cmで、開口部から83cmのところを段をつけている。貯蔵穴の覆土は焼土粒子、炭化物を多く含む黒褐色土で、軟らかである。

本跡の覆土は、上・中層が黒褐色土、下層が暗褐色土でレンズ状に自然堆積している。床面からは、焼土城が4か所、および炭化材が検出されている。

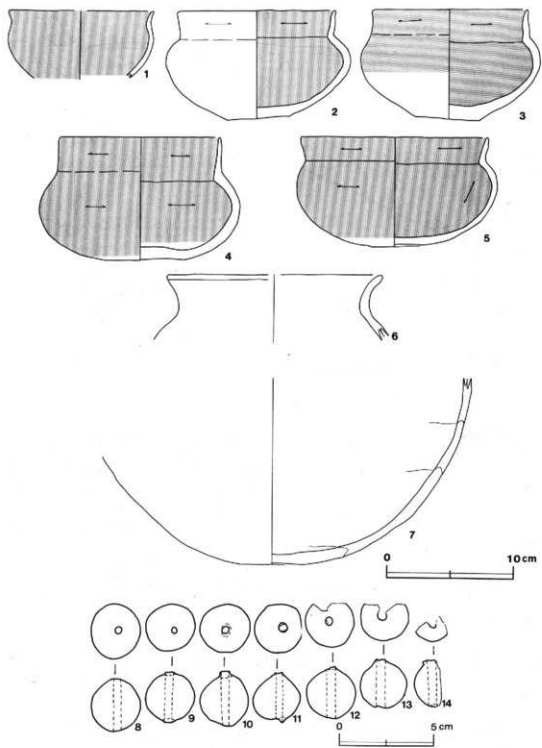
出土遺物は、土師器および土師器片41点、土玉7点である。土師器の器種は甕形土器・壺形土器・短頸壺形土器・環形土器である。短頸壺形土器は完形または完形に近い形で、貯蔵穴内から1点、貯蔵穴の北側、北東壁ぎわ床面から2点、南西壁ぎわの床面から1点出土している。他の土師器は、全体の器形を窺えるものはないが、床面または床面直上から出土している。土玉は北部床面から集中して出土している。出土遺物は出土状況から本跡に伴っているものと思われる。

第5号住居跡出土土器解説表（第81図）

番号	器種	流量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
1	環形土器 土師器	A(11.4)	口縁部は平く、外反する。体部は半球形である。	内外面ヘラミガキ。	細砂 赤色 良好	5% 赤彩、内面に斑点状刺線	
2	短頸壺形土器 土師器	A 12.4	口縁部は直立する。胴部は底部から内傾しながら大きく開き、上部に最大径を有し、くびれる。口縁部の器厚は薄い。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。底部は削り軸のへラ削り。	砂 褐色 普通（内面に二次焼成）	99% Y 内面に赤彩、内外面に斑点状刺線	
		B 8.7					
		C 4.9					
3	短頸壺形土器 土師器	A 12.2	口縁部は長く、直立し、内面に横をもち、胴部は内傾しながら立ち上がり、上部に最大径を有し、くびれる。平底である。	口縁から胴部中央までの外面ヘラミガキ。以下へラ削り後ナデ。内面ヘラミガキ。	多量の砂 赤色 普通（二次焼成）	90%（12片） Y 内外面に赤彩、内面に斑点状刺線	
		B 8.6					
		C 5.2					
4	短頸壺形土器 土師器	A 12.6	口縁は長く、直立し、口縁は実る。胴部は薄長な球形である。丸底を押しつぶした平底。胴部は四角で、口縁部は薄い。	内外面ヘラミガキ。傾き直部分近へラ削り後ナデ。内面の下部へラナデ。内面中央部に赤色で十字（幅6mm、長さ25mm）	細砂、スコリア 赤色、褐色 良好	90%（5片） Y 貯蔵穴内 内外面に赤彩	
		B 9.8					
		C 6.1					
5	短頸壺形土器 土師器	A 14.7	口縁部は外傾する。胴部は薄長な球形で、最大径を上部にもち、底部は丸底を削った平底。薄手なつくりである。	口縁部内外面と胴部外面横位のヘラミガキ。胴部内面放射状にヘラミガキ。	硬、細砂 赤色、褐色 普通（二次焼成）	99%（5片） Y 内外面に赤彩、内面に斑点状刺線	
		B 8.7					
		C 4.1					
6	甕形土器 土師器	A(16.7)	口縁部は直立きみに立ち上がり外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラナデ。内面ナデ。	硬、細砂、スコリア 褐色	5%（5片） Y	
7	壺形土器 土師器	C 5	底部は小さな平底で、胴部は球形を呈するものと思われる。	胴部外面へラ削り後ナデ。	長石、特に多量の砂 褐色 不良（二次焼成）	30%（17片） X+Y 内外面に斑点状刺線	



第80図 西原遺跡第5号住居跡実測図



第81图 西原遺跡第5号住居跡出土遺物実測図

土玉 (第81図)

土玉は、7点出土し、いずれもゆがんだ球形を呈している。8～14の3点は、一部欠損しており、孔の一方の縁には粘土がはみ出ており、孔は一方から穿たれたものと思われる。色調は浅黄橙色または黒褐色で、胎土は細砂、砂を含んでいる。焼成は良好なものが多い。法量は8が直径26～27mm・孔径3～4mm・重量17.5g、9が直径24～27mm・孔径3～4mm・重量15.5g、10が直径25～26mm・孔径4.6～6.0mm・重量15.0g、11が直径24～27mm・孔径5mm・重量14.5g、12が直径25～26mm・孔径4～5mm・重量12.0g、13が直径24～26mm・孔径4～5mm・重量10.5g、14が直径25mm・孔径4～6mm・重量3gである。

第6号住居跡 (第82図)

本跡は、D2g2区を中心に確認された竪穴住居跡で、北西7mに第7号住居跡が隣接している。平面形は、長軸2.92m・短軸2.48mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-44.2°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約38cmであり、壁溝は検出されていない。床面は平坦で、炉の東側で硬く踏み固められたところが検出された。炉は、床面中央から北西寄りに位置し、北東方向へ3基の炉が連なって双円形状に検出されている。3基を合わせた炉の長径は1.55m、短径0.85mで、炉床は床面とはほぼ同じ高さで赤色に硬く焼けゴツゴツしている。3基の炉の新旧関係は判然としない。なお、炉は住居の規模に比して大きな面積を占めているのが特色である。

ピットは3か所検出され、規模から柱穴と思われるが、明確にできなかった。P1とP2は南コーナーと北コーナーとの対角線上に位置している。P1は、平面形が直径30cmの円形を呈し、深さが32cmほどである。P1の覆土中に微量の炭化粒子を検出した。P2は、平面形が直径30cmの円形を呈し、深さが33cmほどである。P2の覆土は暗褐色土で、上層に袋形土器の底部片、下層に袋形土器片が出土している。P3は南西壁側に位置し、平面形が直径30cmの円形を呈し、深さが46cmである。P3の覆土は褐色土で、底面直上から袋形土器片が出土している。

本跡の覆土は4層から成り、上位の3層は黒褐色土でレンズ状に堆積している。最下層は暗褐色土が薄く堆積している。各層とも焼土粒子が多量に含まれている。

出土遺物は、土師器および土師器片69点、須恵器片2点、土玉1点、滑石製の勾玉1点である。土師器の器種は袋形土器・壺形土器・短頸壺形土器・坏形土器である。遺物は、西側部に集中しており、袋形土器が特に多く出土している。完形に近い袋形土器3個(1・5・7)が、西コーナー一部の覆土中位にかたまって出土し、いずれも口縁部を斜め下方に向けていた。3は胴部の上半が復元できた袋形土器で、27片が長さ2.3m・短径1.6mの範囲に散らばって、床面およびP2の覆土から出土している。出土遺物は、出土状況から本跡に伴うものと思われる。

第6号住居跡出土土器解説表(第83・84図)

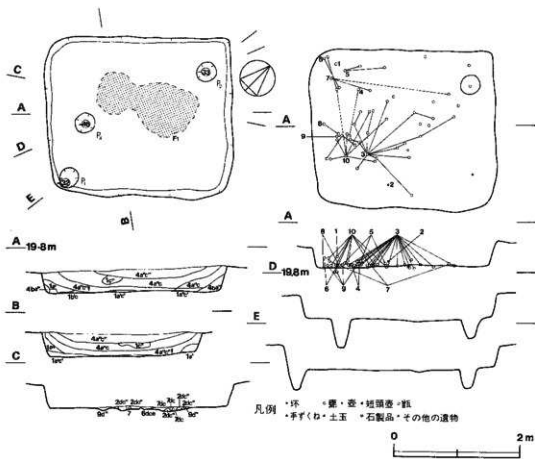
番号	器種(法量(cm))	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕形土器 土師器 A(14.5) B 26.4 C 9.8	口縁部は直立きみに立ち上がり、上位で外反する。胴部は肩の張る球形、平底である。	口縁部外面直ナテ、胴部外面ヘラズリ後1家直ナテ、内面ヘラナテ。	灰石、特に多量の砂に多い他、赤褐色普通	85% (7片) X 内面に亀
2	杯形土器 土師器 A 13.7 H 6.4 C 4.5	口縁部は反しく、外反し、胴部内面に発せしつ、胴部は内背しながら大きく開いて立ち上がる。平底である。	口縁部内外面は横位のヘラミガキ、胴部外面ヘラズリ、内面直ナテ。	褐砂、スコリア 褐色 良好	85% (6片) X + Y 口縁部内外面は赤彩
3	袋形土器 土師器 A 16.0	口縁部は外傾して立ち上がり、上位で更に大きく外反する。胴部内面に強い稜をもつ、胴部は球形を呈すると思われる。	口縁部内外面直ナテ、胴部外面横位のヘラ削り、内面横位のヘラナテ。	褐、褐砂、黑色砂 物、赤色 普通(二次焼成)	60% (27片) X + Y 内外面に斑点状刺
4	甕形土器 土師器 A(13.5)	口縁部は大きく外反する。胴部は反斜で、最大径を中位にもつ、胴部から底部へと漸次が薄くなり、段状を呈している。	口縁部内外面直ナテ、胴部外面ヘラ削り後ナテ、内面ヘラナテ。	多量の黑色砂 浅灰色、赤褐色 不良	15% (6片) Y
5	袋形土器 土師器 A 18.9	口縁部は外反し、胴部はやや反い。	口縁部内外面直ナテ、胴部外面ヘラ削り後ナテ、内面ヘラナテ。粗雑な表面。	褐、砂 褐色 良好	70% (4片) X 内外面著しく濃蒸
6	甕形土器 土師器	胴部は、球形を呈していたと思われる。	内外面ナテ、器面磨滅、輪郭位のある筈なつくり。	褐砂、スコリア 物 不良	15% (3片) X
7	甕形土器 土師器 A 17.4 B(23.8)	口縁部は弱く外反する。胴部は球形で、下半が欠損している。	口縁部外面直ナテ、胴部外面横位のヘラズリ後ナテ、内面ヘラナテ。	褐、多量の細砂、赤褐色 良好	70% (5片) X + Y 内面に斑点状刺
8	甕形土器 土師器 A(19.2)	口縁部は頸部でくの字に屈曲し、やや外傾して立ち上がり、上位で外反して水平になる。	口縁部外面直ナテ、内面ヘラナテ。	褐、細砂、赤褐色 良好(二次焼成)	15% (2片) Y
9	甕形土器 土師器 A 15.2	口縁部は頸部でくの字状に屈曲し、外反する。胴部は肩の張る長胴である。	口縁部内外面直ナテ後ナテ、胴部外面ヘラ削り後ナテ、内面直ナテ。	褐、多量の黑色砂 暗赤褐色 普通	80% (26片) Y 外面に亀
10	甕形土器 土師器 A 16.6	口縁部は頸部でくの字に屈曲し、外反する。胴部はやや長胴である。外面に粘土が付着し、器底が一定していない。	口縁部内外面直ナテ、胴部外面ヘラ削り、内面直ナテ。	褐、砂(多量) 褐色 不良(外面に二次焼成)	60% (29片) X + Y

土玉(第84図)

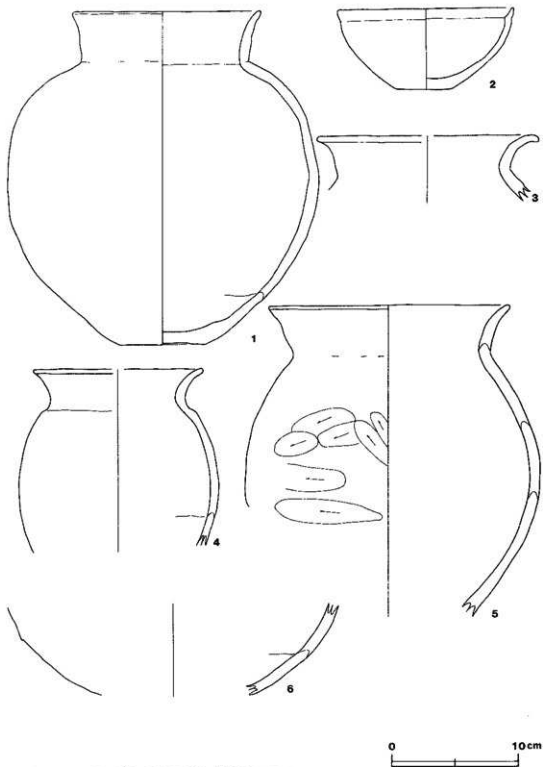
11は直径28～34mmのほぼ球形を呈し、直径5～8mmの孔が貫通している。重量は29gである。色調はにじみ橙黄色で、胎土は細砂を含み、焼成は良好である。

勾玉(第84図)

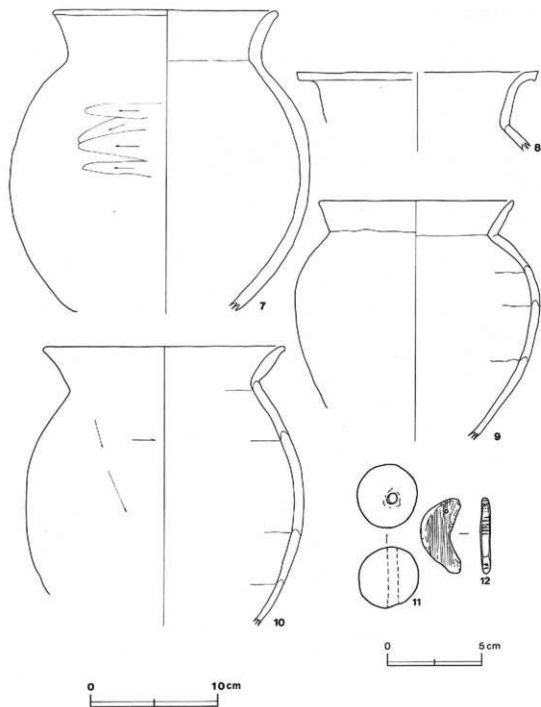
12は、滑り裂の板状のもので、法量は、長径40mm、短径21mm、厚さ4～5mm、重量6gである。長軸の一端に直径約1.5mmの孔が貫通している。表・裏面に榫痕が認められ、滑らかになっている。細線には縦位のキザミ目認められる。



第82図 西原遺跡第6号住居跡実測図



第83图 西原遺跡第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第84图 西原遺跡第6号住居跡出土遺物実測図(2)

第7号住居跡（第85回）

本跡は、D1e0区を中心に確認された竪穴住居跡で、南東6mに第6号住居跡が隣接している。本跡の南東壁に第1号土坑が重複しており、土層から判断して第1号土坑の方が新しく構築されたと考えられる。

平面形は、長軸5.27m・短軸4.39mの長方形状を呈し、長軸方向はN-72°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は36cmほどである。壁溝は検出されていない。床面はほぼ平坦で、軟らかくなっている。炉は床面中央部から北西寄りに位置し、平面形は長径30cm・短径24cmの楕円形を呈し、床面をほとんど掘りくぼめない地床炉である。炉床は赤色に硬く焼けている。炉の南西側の床が攪乱され、焼土ブロックが散乱しており、南西側にも炉が存在していたとも思われる。

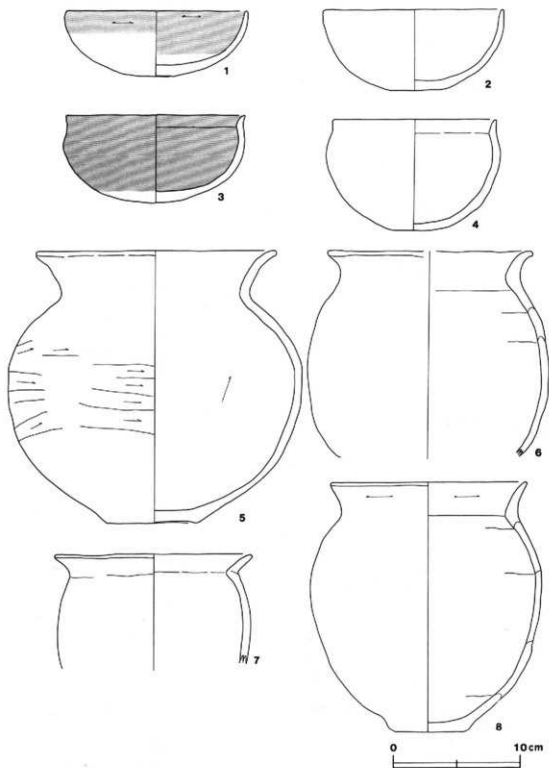
柱穴は屋内・屋外から検出されていない。貯蔵穴は、開口部の平面形が直径50cmの円形で、底面が長径37cm・短径32cmの楕円形で、深さが60cmである。貯蔵穴の周壁は、床面よりやや盛り上がっている。貯蔵穴内の覆土は、自然地積を示す3層からなり、上層は軟らかい褐色土であり、中・下層はやや締まっている暗褐色土である。

本跡の覆土は、自然地積を示す4層からなり、レンズ状に堆積している。1・2層は黒褐色土、3・4層が暗褐色土で、焼土粒子を少量含んでいる。床面の北側部に多数の炭化材と焼土域が6か所検出された。炭化材などの出土状況から本跡は火災に遭ったものと思われる。

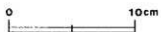
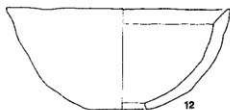
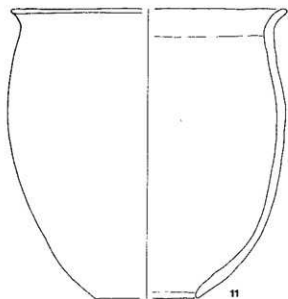
出土遺物は、土師器および土師器片24点で、器種は袋形土器・甕形土器・壺形土器・短頸壺形土器・環形土器である。遺物は壁付近では覆土中から、床面中央部では床面からの出土が多く、5の袋形土器は、中央部の床面のレベルから出土した破片に、壁ぎわの覆土中位から出土した破片が接合している。環形土器6点のうち4点は完形または完形に近い形で、貯蔵穴内底面や住居跡床面から出土している。また、小形の甕形土器の12も完形で床面から出土している。5の袋形土器は本跡の壁ぎわが一部埋もれてから投棄されたと考えられるが、出土遺物の大部分は本跡に伴うものと思われる。

第7号住居跡出土土器解説表(第86-87図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	環形土器 土師器	A 14.2 B 5.2 C 3.1	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は体部との境なく直立する。底部は丸底を一傾りした小さな平底である。	口縁部外面ヘラミガキ、体部外面ヘラ削りで尤沢あり、内面ヘラミガキ。	細砂、スコリア 褐色 普通	80% (3片) X 貯蔵穴内 赤砂 斑点状剥離
2	環形土器 土師器	A 13.9 B 6.4 C 4.1	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は体部との境なく直立する。	口縁部内外面削りナデ、体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。	細砂 赤色、浅黄褐色 良好 (二次焼成)	95% (9片) Y 底部に煤
3	環形土器 土師器	A 13.9 B 6.9	体部は内彎しながら立ち上がり、上位でややくびれる。口縁部は内巻き状で、外反する。底部内面に殺をもつ。	口縁部外面ヘラミガキ、体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラミガキ。	細砂、スコリア 褐色 普通	90% (6片) X + Y 外面に煤、内面に 斑点状剥離
4	環形土器 土師器	A 12.8 B 8.8 C 2.9	体部は球形で、口縁部は短く、直立する。底部内面に殺をもつ、底部は丸底を削った平底である。	口縁部外面削り後ナデ、体部外面ヘラ削り後ナデ、底部は粗い。	黒色砂、スコリア 褐色 普通 (二次焼成)	95% Y 外面上位に煤、 内面に斑点状剥離
5	甕形土器 土師器	A 18.6 B 21.4 C 7.4	口縁部は外反し、上位で更に外反する。胴部は球形で、底部は平底である。	口縁部内外面削りナデ、胴部外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。	黒色砂、スコリア 褐色 普通	60% (18片) X + Y 底部に煤、内面に 斑点状剥離
6	甕形土器 土師器	A (16.4)	口縁部はやや外反し、上位で大きく外反する。器内は胴部が薄く、口縁部が厚くなっている。	口縁部内外面削り後ナデ、胴部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ、外面調整は煤。	煤、多量の砂、黒 色砂 赤褐、橙、灰褐色 不良 (二次焼成)	35% (13片) X + Y 外面に煤
7	甕形土器 土師器	A 15.6	口縁部は頸部でくの字に屈曲し外反する。胴部は内彎しながら直立する。	口縁部内外面削り後ナデ、胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	黒色砂、スコリア、 赤色 良好 (二次焼成)	40% (5片) X + Y
8	甕形土器 土師器	A 15.4 B 19.8 C 6.1	口縁部は外反する。胴部は長胴である。器内は、胴部が薄く、頸部が厚まっている。	口縁部内外面削り後ナデ、体部内外面ヘラナデ。体部外面は凸凹で、雑な調整。	煤、多量の砂、黒 色砂、スコリア にふい赤褐色 不良 (二次焼成)	60% (22片) Y 外面に煤
9	甕形土器 土師器	A (21.5)	口縁部は外反する。胴部は内彎しながら直立する。	口縁部内外面削り後ナデ、胴部内外面ヘラナデ、外面は凸凹で雑な調整、内面に輪様凸痕。	多量の砂、黒色砂 褐色 不良 (二次焼成)	10% (5片) Y
10	甕形土器 土師器	A (23.6)	口縁部は頸部でくの字状に屈曲し、点線的に外反する。頸部内面に鋭い殺をもつ。	口縁部内外面削り後ナデ、胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	多量の黒砂、スコ リア 褐色 不良 (二次焼成)	20% (8片) X 内外面著しく剥離
11	甕形土器 土師器	A 21.4 B 22.9 C (8.0)	口縁部は短く、胴部からなだかに外反する。底部は大きく孔がつけられている。	口縁部外面ナデ、体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。	黒色砂、スコリア 褐色 良好	60% (25片) X - Y 外面に煤
12	甕形土器 土師器	A 17.8 B 8.1 C 4.1	スリカナ形で、底部に直径4cmの孔がある。孔は六角形状である。口縁部は内巻きで内面に殺をもつ。	口縁部内外面削り後ナデ、胴部内外面ヘラナデ。底部は粗く、雑な調整。	黒色砂、多量の砂に ふい褐色 普通 (二次焼成)	100% Y



第86図 西原遺跡第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第87図 西原遺跡第7号住居跡出土遺物実測図(2)

第8号住居跡（第88図）

本跡はD2:6区を中心に確認された竪穴住居跡で、北側11mに第5号住居跡が隣接している。

平面形は、長軸4.54m・短軸3.69mの長方形を呈し、長軸方向はN-45.5°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北東壁で26cm、南西壁で21cmであり、壁溝は検出されない。床面は平坦でやや凸凹しており、硬い部分は認められなかった。炉は北コーナーと南コーナーを結ぶ線上の北コーナー側に2基並んで検出された。北側の炉は、長径80cm、短径55cmの楕円形を呈し、深さ9cmほど掘りくぼめられた地床炉である。炉床部は一部擾乱されているが赤色に焼けている。南側の炉2は、長径80cm・短径60cmの双円形状を呈し、炉が重複していたとも考えられる。炉床部はほぼ床面と同レベルで、炉1より赤色に硬く焼けている。その他に床面が点状に赤色に焼けた所が炉1の南側と床面の南西部の2か所に検出されている。

貯蔵穴は東コーナー部に位置し、開口部の平面形は、長径65cm・短径55cmの楕円形で、底面は直径20cmの円形である。深さは50cmで、深くなるほど狭く掘られている。西側の開口部が広がっているのは擾乱のためと思われる。貯蔵穴内の覆土は、上層が暗褐色土、下層が褐色土を主体とし、レンズ状に自然堆積している。柱穴は、床面・屋外から検出されていない。

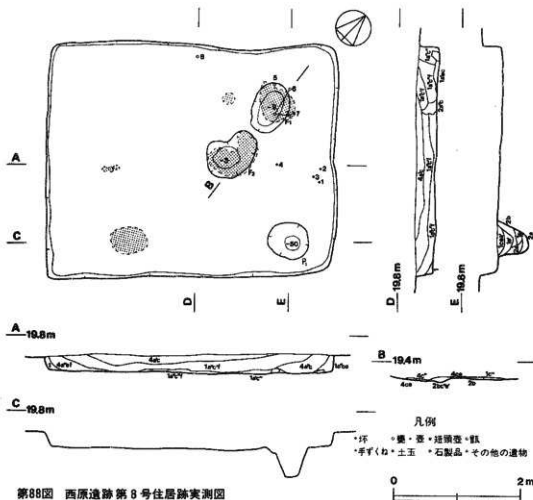
本跡の覆土は、大きく3層に分けられ、上層が黒褐色土、中・下層が黒褐色土で、レンズ状に自然堆積している。下層には多量の焼土粒子が含まれており、また南東壁ぎわに長径55cm、短径40cmの焼土城が検出されているので、本跡は火災に遭ったものと思われる。

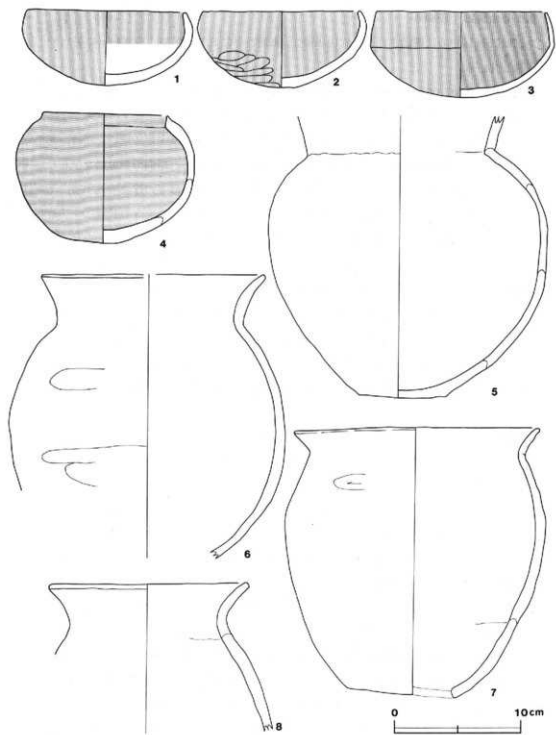
出土遺物は、土師器および土師器片14点、須恵器片1点である。土師器の器種は甕形土器・甌形土器・坏形土器であり、須恵器の器種は壺である。土師器は北コーナー部付近に集中し、完形か完形近くに復元できるものが多く出土している。北東壁ぎわの床面には、完形の坏形土器3点が口縁部を上にしてかたまって出土している。また北コーナー付近の床面から、ほぼ復元できた甌形土器1点と甕形土器2点が押しつぶされた状況でかたまって出土している。出土遺物は出土状況から本跡に伴うものと思われる。

第8号住居跡出土土器解説表（第89図）

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色澤・焼成	備考
1	坏形土器 土師器	A 12.2	体部は内凹しながら大きく開いて立ち上がり、上位で最大径を有する口縁部は内傾する。丸底である。	口縁部外面ヘラミガキ、体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラミガキ	細砂 赤色 良好（二次焼成）	100% Y 内外面に赤彩 内面に黒点状剥離
		B 5.9				
2	坏形土器 土師器	A 12.2	体部は内凹しながら大きく開いて立ち上がり、上位で最大径となる。口縁部は内傾する。底部は丸底を閉った平底。	口縁部内外面削い後ナデ、体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ	砂 赤色 良好（二次焼成）	100% Y 内外面に赤彩 内面に黒点状剥離
		B 6.0				
		C 2.0				
3	坏形土器 土師器	A 13.5	体部は内凹しながら大きく開いて立ち上がり、上位で最大径となる。口縁部は内傾する。全体的に滑子のつくりである。	口縁部内外面削ナデ、体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂 赤褐色 普通	100% Y 内外面に赤彩 外面に黒
		B 6.8				

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地味	備考
4	壺形土器 土師器	A 9.8 B 10.4	体部は球形で、口縁部は体部から上へはみ出た程度である。丸底。	口縁部内外面へラナテ。体部外面へラナテ。	砂 赤褐色 良好	100% (5片) Y 内外面に赤彩 内面に煤
5	壺形土器 土師器	A (16.3)	口縁部は外傾する。胴部は上位に最大径をもつ長筒である。胴部の厚さは4~7mmで下部が薄くなっている。	口縁部内外面へラナテ。胴部外面へラナテ。内面ナテ。	煤。多量の砂 明赤褐色 不良 (二次焼成)	80% (51片) Y 外面に煤
6	壺形土器 土師器	A 17.4	口縁部は外反し、上位で更に外反する。胴部は球形である。	口縁部内外面強い炭ナテ。胴部外面へラナテ。内面へラナテ。	煤。細砂 明赤褐色 普通 (二次焼成)	70% (20片) Y
7	瓶形土器 土師器	A 19.3 B 21.5 C 8.4	口縁部は外反する。胴部は長筒で底に大きい孔があいている。胴部は器厚が4~9mmでいびつな器形である。	口縁部内外面擦ナテ。胴部外面へラナテ。内面ナテ。胴部上縁に彫刻刀の丸刀で削ったような凹状の傷あり。	煤。多量の砂。器厚 浅赤褐色 良好	70% (25片) Y
8	壺形土器 土師器	A 15.0	口縁部は外反する。	口縁部内外面擦ナテ。胴部へラナテ。内面へラナテ。	煤。砂 位 普通 (二次焼成)	45% (7片) Y 内外面に煤





第89図 西原遺跡第8号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡（第90図）

本跡はD3hs区中心に確認された竪穴住居跡で、東側28mに5号住居跡、南側14mに第14号土坑が隣接している。

平面形は、長軸7.06m・短軸5.35mのやや角のまるまった長方形を呈し、長軸方向はN-58.3°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は25cmほどである。壁下に軟らかな部分が認められたが、泥人物が認められず壁溝と判断できなかった。床面は平坦で硬い。炉は、北東壁寄りに位置し、平面形が長径56cm・短径30cmの楕円形、深さが10cm、断面形が皿状を呈した地床炉である。炉の覆土は2層でレンズ状に堆積しており、上層は6cmほどの厚さの焼土で、下層は4cmほどの厚さの焼土粒子を多量に含む褐色土である。炉1は掘り込みをきむ長径70cm・短径60cmの楕円形の範囲が、赤色に硬く焼けている。炉床は、はじめ平坦な床面を利用した後、掘り込まれたものと思われる。炉2は、平面形が長径28cm・短径23cmの楕円形を呈し、掘り込みがなく炉床が赤色に硬く焼けている。炉3は、平面形が長径50cm・短径30cmの楕円形を呈し、炉2同様掘り込みがなく、炉床が赤色に硬く焼けている。炉4は、平面形が長径70cm・短径50cmの楕円形を呈し、炉2同様掘り込みがなく、炉床が赤色に硬く焼けている。

ピットは3か所検出され、規模や配置などから東コーナーのP1は貯蔵穴と思われるが、P2・P3は性格不明のピットである。貯蔵穴の開口部の平面形は、長径52cm・短径50cmのほぼ円形で、底面が長径30cm・短径26cmの楕円形を呈している。また深さは80cmで、深くなるほど狭く掘られ、底面は平坦になっている。貯蔵穴の覆土は暗褐色土の単一層で、人為的な堆積の状況を示している。P2は、東コーナー部の壁にそった掘り込みで、平面形が長径42cm・短径40cmの方形を呈し、深さが93cmほどである。P2の覆土は暗褐色の単一層で、ロームブロックが含まれている。P3は北東壁寄りに位置し、平面形が長径36cm・短径30cmの楕円形を呈し、深さが17cmほどである。

本跡の覆土は、大きく3層に分けられ、1部擾乱もあるが、ほぼ自然堆積の様相を示している。上層が黒褐色土、中・下層が暗褐色土で焼土粒子および炭化粒子が少量含まれている。床面には30cmほどの長さの炭化材が多数検出されており、本跡は火災に遭ったものと思われる。東コーナー部に径20cmほどの粘土塊が、壁の上から、P2の覆土上面に傾斜して検出されている。

出土遺物は、土師器および土師器片275点、土玉10点、滑石製の紡錘車1点・白玉1点・勾玉2点、砥石3点である。土師器の器種は、甕形土器・小形甕形土器・甕形土器・壺形土器・短頸甕形土器・鉢形土器・坏形土器・手捏ね土器である。土師器は、完形または完形に復元できるものが多く、西コーナー付近を除く床面全体から出土し、特に、北部に集中的に出土している。甕形土器の胴部から下を欠損したものの8点が、炉の周囲の北コーナー部床面に口縁部が上になった状態や、横になった状態で出土している。これらの甕形土器は全体的にかなり強く三次焼成を受けており、土器の中に、焼土粒子を多量に含む暗褐色土が第90図のように入っているものもある。

壺形土器2点と甔形土器2点は、炉の近くの床面に押しつぶされた状態で出土している。坏形土器は完形またはほぼ完形に復元されたものが23点で、このうちの多くは、炉北側床面に口縁を上にしてかたまって出土している。坏形土器3点が東コーナー部の粘土塊の出土した北側の床面に折り重なって出土している。土玉はほとんど完形品で、床面北側にまばらに出土している。手捏ね土器の7点は完形品で、床面中央部の南側、東西3.5m・南北1.1mの範囲の床面から覆土にかけて口縁を上や下にして出土している。勾玉2点は、それぞれ手捏ね土器とともに覆土内から出土している。紡錘車は北コーナー部、砥石は北西壁付近の覆土内から出土している。白玉は床面に精査している時に検出されたものである。祭祀に関係する遺物が比較的多く出土している。

第9号住居跡出土土器解説表(第91~96頁)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏形土器 土 師 器	A 13.1	体部は内彎しながら立ち上がり、 体部上位に最大径を有する。口 縁部は内彎する。丸底である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面 へつ削り、内面放射状にへつミ ガキ。	磁、細砂 明赤褐色 良好(二次焼成)	99% Y 内外面に赤彩
		B 5.1				
		C				
2	坏形土器 上 師 器	A 12.4	体部は内彎しながら立ち上がり、 体部上位に最大径を有する。口 縁部は内彎する。底部は小さな 平底である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面 へつ削り、内面放射状にへつミ ガキ。	細砂 赤褐色 普通	65% (6片) Y 内外面に赤彩
		B 5.3				
		C 3.3				
3	坏形土器 土 師 器	A 12.6	体部は内彎しながら立ち上がり、 体部上位に最大径を有する。口 縁部は内彎する。底部は小さな 平底である。	外面は口縁部で横ナデ。体部でへつ 削り、内面放射状にへつミ ガキ。	細砂 赤色 普通(二次焼成)	99% (6片) Y 赤彩 内面に斑点状刺繍
		B 5.1				
		C 3.0				
4	坏形土器 土 師 器	A 12.8	体部は内彎しながら立ち上がり、体 部上位に最大径を有する。口縁部 は内彎する。底部は小さな平底 である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面 へつ削り横ナデ。内面放射状に へつミガキ。体部と口縁部の器 肉は薄く均一。	多量の細砂 赤色 良好	98% (10片) X+Y 底部外面を除く全 面に赤彩
		B 5.6				
		C 3.2				
5	坏形土器 土 師 器	A 12.4	体部は内彎しながら立ち上がり、 体部上位で最大径となる。口縁部 は厚く内彎する。外面に稜をもつ 小さな平底である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面 へつ削り、内面放射状にへつミ ガキ。	細砂 小、赤色 良好	100% Y 内外面に赤彩
		B 5.2				
		C 3.9				
6	坏形土器 土 師 器	A 13.7	体部はやや外傾しながら立ち上 がり、体部上位で最大径となる 口縁部は直立ぎみに立ち上がり やや外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面 へつ削り横ナデ、内面放射状に へつミガキ。	磁、砂、雲母 明赤褐色 普通	88% (2片) Y 底部外面を除く全 面に赤彩
		B 5.6				
7	坏形土器 土 師 器	A 14.0	体部は内彎して立ち上がり大き く開く。口縁部は直ぐ、直立後 大きく外反し、外面に稜をもつ 小さな平底。	口縁部内外面横ナデ。体部外面 へつ削り、内面へつ削り内外肉 とも光沢あり。	磁、多量の細砂 にぶい赤褐色 普通(二次焼成)	99% (3片) Y 底部外面を除く全 面に赤彩
		B 5.4				
		C 4.2				
8	坏形土器 土 師 器	A 14.4	体部は内彎して立ち上がり、上 位でやややぶられる。口縁部はゆる やかに外反し、内面に稜をも つ、薄手なつくり。	口縁部内外面横ナデ。体部外面 へつ削り、内面ナデ。	多量の細砂 赤色 普通(二次焼成)	90% (6片) Y 口縁部外面と内面 に赤彩
		B 6.1				
9	坏形土器 土 師 器	A 13.4	体部は内彎して立ち上がり、上 位でやややぶられる。口縁部はや や外傾する。薄手なつくりである。	口縁部内外面横ナデ。体部 外面へつ削り、内面へつ削り、 内面へつ削り。	磁、特に多量の細砂 にぶい赤褐色 普通(二次焼成)	99% (4片) X+Y 底部外面を除く全 面に赤彩
		B 6.2				
10	坏形土器 土 師 器	A 15.1	体部は内彎して立ち上がり、上 位でやややぶられる。口縁部はゆる やかに外反し底部が突る。全体的 に薄手なつくりである。	口縁部内外面横ナデ。体部外面 へつ削り横ナデ、内面へつミガ キ。	細砂 赤褐色 普通(二次焼成)	65% (6片) Y 内外面に赤彩 内面に斑点状刺繍
		B 6.4				
		C 5.8				

番号	器種	法原(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
11	16形十器 十器部	A 14.8 B 6.4	体部は内脣して立ち上がり、上位で最大径となる。口縁部は大きく外反し内面に稜をもつ。薄手で丁寧なつくり。	外面口縁部で横ナデ、体部でへう閉り、内面ナデ。	細砂(多量) 赤色 普通(二次焼成)	90% (7片) Y 内外面に赤彩
12	環形土器 土器部	A 11.4 B 5.7 C 4.7	体部は内脣しながら立ち上がり上位で最大径となり、ややくびれる。口縁部は外傾し内面に稜をもつ。いびつである。	内外面へう閉り、底部はへう閉りで縁を調整。	黒色砂、多量の砂 赤色 普通	100% Y 底部外面を除く全面に赤彩
13	環形土器 土器部	A 14.5 B 6.4	体部は内脣して立ち上がり、上位で最大径となる。口縁部は短く、外反する。薄手で丁寧なつくりである。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へう閉り、内面ナデ。	多量の細砂 赤色 普通	95% (4片) X
14	環形土器 土器部	A 14.1 B 7.7	体部は内脣して立ち上がり、上位でややくびれる。口縁部はやや外反する。薄手なつくり。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へう閉り、内面へうナデ。	細砂 褐色 良好	90% (6片) Y 赤彩 内面に斑点状刺雕
15	16形十器 土器部	A 12.2 B 6.1 C 4.5	体部は内脣しながら立ち上がり、上位で最大径となってややくびれる。口縁部は短く、外傾し、内面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へう閉り後ナデ、内面へうナデ。	細砂、黒母 褐色 良好	100% Y 口縁部刺雕 斑点状刺雕(内面)
16	環形土器 土器部	A 14.5 B 6.9	体部は半球形で、口縁部は短く、外反する。全体的に薄手なつくりで、口唇部は平直である。	外面口縁部で横ナデ、体部でへう閉り、内面放射状にへうミガキ。	多量の細砂 赤・浅黄褐色 普通	90% (26片) Y 内外面に赤彩 外面下半に稜
17	環形土器 土器部	A 12.5 B 5.8 C 4.8	体部は内脣しながら立ち上がり、口縁部は直立して実る。底部は丸底風の平底である。厚手なつくりである。	外面へう閉り後ナデ、内面へうナデ。	多量の黒色砂 赤色 普通	100% Y 底部外面を除く全面に赤彩
18	環形土器 土器部	A 12.2 B 7.0 C 3.8	体部は内脣しながら立ち上がり、上位で最大径となりややくびれる。口縁部はやや外傾し、実る。内面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へう閉り後ナデ、内面へうナデ。	特に多量の黒色砂 褐色 普通(二次焼成)	100% Y 口唇部刺雕
19	環形土器 土器部	A 12.4 B 5.8 C 5.8	体部は内脣して立ち上がり、上位で最大径となる。口縁部は短く、直立し実る。内面に稜、外面に稜を致す。	外面へうナデ、底部でへう閉り、内面へうナデ。	黒色砂 赤色 普通(二次焼成)	98% (9片) Y 底部内外面を除き赤彩
20	環形土器 土器部	A 13.1	体部は内脣しながら立ち上がり、口縁部は直立して実り、内面に稜をもつ。厚手なつくりである。	外面の口縁部横ナデ、体部ナデ、内面へうナデ。	黒色砂、スコリア 赤色 良好	40% (4片) X 内外面に赤彩
21	環形土器 土器部	A 11.9 B 6.4 C 4.4	体部は内脣しながら立ち上がり、上位で外脣がえぐれ唇部を成す。口縁部は短く、外傾する。底部は丸底風の平底である。	口縁部内外面横ナデ、体部内外面へうナデ。底部付近へう閉り、内面に粘土が付着し、縁を調整。	黒色砂、多量の砂 赤褐色 良好	99% Y
22	環形土器 土器部	A 12.1 B 7.4 C 3.0	体部は内脣して立ち上がり、上位で最大径となるややくびれる。口縁部は短く、直立し実る。底部は丸底風平底。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へう閉り後ナデ、内面へうナデ。	多量の細砂 スコリア 赤色 普通	98% (15片) Y 厚付者。口縁部に斑点状刺雕
23	環形土器 土器部	A 9.9 B 5.1 C 4.7	体部は内脣しながら立ち上がり、口縁部は体部との境なく直立して実る。底部は丸底を平らに削る。厚手なつくり。	口縁部内外面へうミガキ、体部外面へう閉り後ナデ、内面へうナデ。	多量の細砂 黒色砂 赤色 普通	98% (3片) Y 底部外面を除く全面に赤彩
24	小形環形土器 土器部	A (13.2) B 10.3 C 6.5	体部は直立みに立ち上がり、上位で最大径ともりくびれる。口縁部は外傾し、内面に稜をもつ。平底である。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へう閉り後ナデ、内面へうナデ。	細砂 赤色 赤褐色 不良	70% (11片) X 黒色処理

番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
25	小形菱形土器上脚器	A 14.2 B 11.1 C 4.9	口縁部は短く、やや外反する。胴部は内割して立ち上がり、上位でややくびれる。	外面へラ削り後ナデ、内面口縁部で横ナデ、胴部でヘラナデ。	多量の細砂、黒色砂、赤色、良好(二次焼成)	95% Y 内外面に僅
26	小形菱形土器土脚器	A (11.8) B 7.3 C 6.0	胴部は内割しながら直立きみに立ち上がり、上位で最大径となりくびれる。口縁部は外反して、胴部内面に横をもつ。	外面ナデ、内面へラナデ。底部へラ削り。	多量の細砂、スコリア、浅黄褐色、普通(三次焼成)	75%(5片) Y 底部に僅
27	小形菱形土器上脚器	C 5.4	胴部は底部から角度を僅めながら内割し、最大径を上位にもつ平底である。	胴部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	細砂、黒色砂、浅黄褐色、良好	60%(19片) Y
28	鉢形土器上脚器	A 18.4 B 8.8	胴部は内割しながら立ち上がり口縁部も内割する。平底である。	外面へラ削り後ナデ、内面ナデ	特に多量の細砂、浅黄褐色、不良(二次焼成)	80%(14片) X 1 Y
29	手捏土器土脚器	A 6.0 B 2.9 C 5.7	土器の底部だけのような器形で、断面形が凹状を呈し、口縁部が尖っている。	底部平らにナデ調整、他は凸凹、内面に棒状土器で表地土をかき取った跡、渾身調整。	細砂、黒色、不良	100% X
30	手捏土器土脚器	A 5.8 B 2.7 C 6.7	底部より口縁部の方が小さく、断面形が凹状で口縁部が尖っている。	底部平らにナデ調整、胴部外面に凸凹にナデ、内面に指で整形したままの器な調整。	細砂、浅黄褐色、普通	100% Y
31	手捏土器土脚器	A 5.8 B 2.5 C 5.8	凹盤状で、胴部の下位が外側へややつき出ている。	底部平らにナデ調整、胴部外面は凸凹であるがナデ、内面にした表地土の上部を指でえぐっただけの器なつくり。	細砂にふい、浅褐色、普通	100% X
32	手捏土器土脚器	A 6.6 B 2.5 C 5.8	凹盤状	底部平らにナデ調整、胴部外面に凸凹で、ナデ調整。内面に指でえぐった痕跡。	細砂、スコリア、黒褐色、不良	99%(3片) X
33	手捏土器土脚器	A 6.3 B 2.6 C 6.1	凹盤状	底部一方角から平らにへラナデ調整、他は凸凹。内面に直径9mmほどの棒状工具によるナデ。	細砂、スコリア、浅褐色、不良	80%(3片) X
34	手捏土器土脚器	A 6.7 B 3.4 C 6.0	凹盤形の素地上のふちに粘土粒を積んで整形した跡がある。	底部平らにナデ調整。胴部の内外面凸凹で、ナデ調整。	細砂にふい、浅褐色、不良	100%(2片) Y
35	手捏土器土脚器	A 5.0 B 2.0 C 3.4	形がくずれ、口縁部の平面形は卵形にゆがんでいる。他の手捏お土器に比べ胴部が薄手に整形されている。	底部平らにナデ調整。胴部内外面凸凹で、ナデ調整。外面に指紋。	砂、黒色砂にふい、浅褐色、普通	100% X
36	短形土器土脚器	A 13.8 H 11.0	口縁部は直立して立ち上がり、上位でやや外反する。胴部は積長の球形である。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面へラ削り、器面に光沢あり、内面へラナデ。	多量の細砂、赤色、普通(二次焼成)	90%(2片) Y 口縁部内面と外面の上下に赤彩
37	短形土器土脚器	A 18.7	口縁部は直立きみに外反し、胴部内面に斜い横をもつ。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	長石、多量の砂、褐色、不良(三次焼成)	50%(37片) Y
38	短形土器土脚器	A 19.1	口縁部は直立きみに外反する。	口縁部内外面横ナデ、外面下位へラナデ、胴部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	黒色砂、多量の砂、褐色、不良(三次焼成)	30%(13片) Y
39	短形土器土脚器	A 14.0	口縁部は直立きみ下位から外反する。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面の上部へラ調整、下部へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	多量の砂、褐色、浅褐色、普通(三次焼成)	30%(11片) Y 内面に斑点状剥離
40	短形土器土脚器	A 13.0	口縁部は直立きみに外反する。	口縁部内外面横ナデ、器面は凸凹、胴部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	多量の細砂にふい、浅褐色、普通(三次焼成)	40%(7片) Y

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
41	袋形土器 土 師 器	A 15.3	口縁部は直立して立ち上がり、上位で外反する。	口縁部外面縦位のヘラナデ、内面深い櫛ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	多量の砂、黒色砂褐色 普通（三次焼成）	30%（13片） Y
42	袋形土器 土 師 器	A（18.7）	口縁部は直立して立ち上がり、上位で外反する。胴部にはほぼ球形を呈するものと思われる。	口縁部外面粗いハケミ調整後横ナデ、内面横ナデ。胴部外面粗いハケミ調整後ナデとヘラナデ、内面ナデ。	多量の細砂 スコリア にぶい褐色 普通（三次焼成）	68%（9片） Y 外面剥離
43	袋形土器 土 師 器	A 13.2 B 28.5 C 6.0	口縁部はやや外傾する。胴部は縦に長い筒形である。器厚が全体的に8-12mmと厚く、重量がある。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	黒色の砂、特に多量の砂、外面赤褐色 内面黒褐色 不良（三次焼成）	98%（39片） Y
44	袋形土器 土 師 器	A（19.0）	口縁部は外傾する。	口縁部内外面横ナデ。	多量の細砂 にぶい砂、黄灰色 普通（三次焼成）	4%（2片） Y 内面に縦
45	袋形土器 土 師 器	A 15.6	口縁部は大きく外反し、胴部内面に横をもつ。	口縁部内外面深い櫛ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	黒色の砂、多量の砂赤、にぶい褐色 不良（三次焼成）	70%（20片） Y
46	瓶形土器 土 師 器	A 20.5 B 13.3 C 5.3	口縁部は複合口縁である。胴部は底部からやや内傾しながら大きく開いて立ち上がる。底部に直径4cmの孔がある。	口縁部外面横ナデ、胴部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。外面は凸凹で雑なつくり。	黒色の砂、多量の砂 スコリア 明赤褐色、浅黄褐色 不良（三次焼成）	90%（21片） Y
47	袋形土器 土 師 器	A（16.4）	口縁部はゆるく外反して立ち上がり、中位から更に強く外反する。胴部は横長の球形。器厚が全体的に厚い。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	多量の砂 暗赤褐色 不良（三次焼成）	60%（24片） Y
48	瓶形土器 土 師 器	A（15.9）	底部に直径6.0cmの孔がある。	胴部外面縦位のヘラナデ、内面ナデ。	多量の細砂 明褐色 普通（二次焼成）	5%（7片）
49	瓶形土器 土 師 器	A 18.5 B 22.9 C 7.4	口縁部は短く、外傾する。胴部は内傾しながら立ち上がり、上位で最大径となる。底部に直径6.5cmの孔がある。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。	多量の細砂 浅黄褐色、黒褐色 不良（三次焼成）	95%（28片） Y
50	壺形土器 土 師 器	A 18.3 B（28.9）	口縁部はつき足しているため、胴部外面は尖帯が通っている形となっている。胴部にはほぼ球形である。	口縁部外面横ナデ、内面ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ナデ。胴部内面に輪組み痕。	多量の細砂、スコリア、赤褐色 不良（三次焼成）	70%（82片） Y

土玉（第96圖）

土玉は10点とも球形で一方から孔が穿たれている。53には2度あけた跡が認められた。色調はにぶい褐色が多く、胎土は砂を含み、焼成は良好である。法量は51が直径25.0～28.0mm・孔径5.0mm・重量19.0g、52が直径25.0～26.0mm・孔径5.0mm・重量15.0g、53が直径23.0～24.0mm・孔径3.0～5.0mm・重量13.0g、54が直径26.0mm、孔径3.0～4.0mm・重量17.5g、55が直径26.0～27.0mm・孔径4.0mm・重量18.5g、56が直径27.0mm・孔径4.0mm・重量19.0g、57が直径24.0mm・孔径4.0～5.0mm・重量13.0g、58が直径26.0～27.0mm・孔径4.0mm・重量16.0g、59が直径20.0～23.0mm・孔径4.0mm・重量11.0g、60が直径24.0mm・孔径4.0mm・重量8.5gである。

砥石（第96図）

砥石は、2点ともよく使用されたもので、いずれも石質は流紋岩である。2点とも破損後、焼成を強く受けてもろくなっている。保存のよい2点のみ図示した。61の現存する法量は、幅2.7cm・長さ8.6cm・厚さ2.8cm・重量113.0gで、長辺にそって4面を使用しており、4面とも、中央部が皿状に磨滅している。一面には断面V字状（深さ2mm）の使用痕が認められる。62の現存する法量は、幅4.2cm・長さ6.9cm・厚さ3.8cm・重量147.5gで、長辺にそった4面が使用により平らに磨滅している。

紡錘車（第96図）

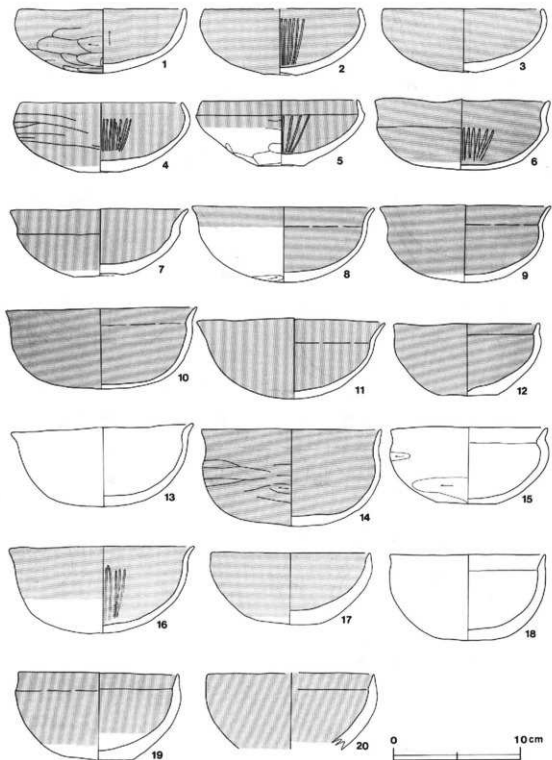
63は滑石製で、截頭円錐形を呈している。法量は、上面の直径23.0mm・下面の直径40.0mm・厚さ14.0mm・孔径6.5～7.0mm・重量31gである。上面には放射状に擦痕、下面にも擦痕、周縁には縦位の削り痕が認められ、ていねいなつくりである。

勾玉（第96図）

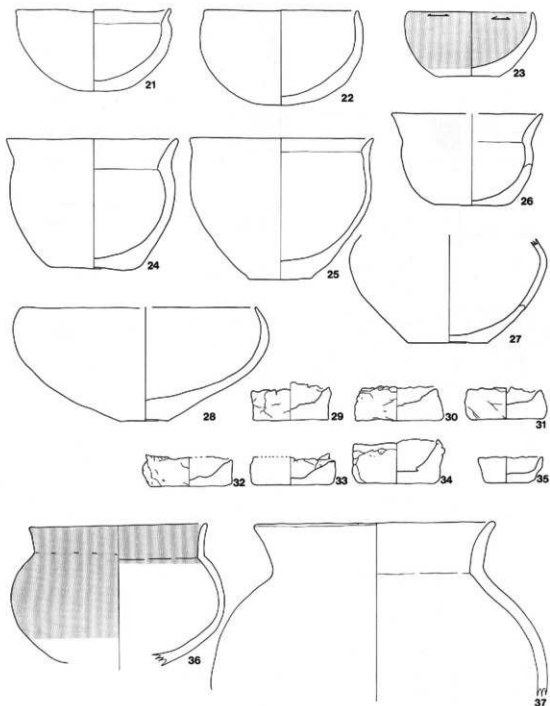
勾玉は2点とも板状の滑石製である。64は、周縁が角ばっており、法量は長径33.0mm・短径21.0mm・厚さ5.0～5.5mm・孔径1.5mm・重量8.0gである。表・裏面、側縁に擦痕が認められる。65は、自然石をそのまま使用したもののようで凸凹である。法量は長径41.0mm・短径21.0mm・厚さ6.0～8.0mm・孔径2.0mm・重量10.5gである。

白玉（第96図）

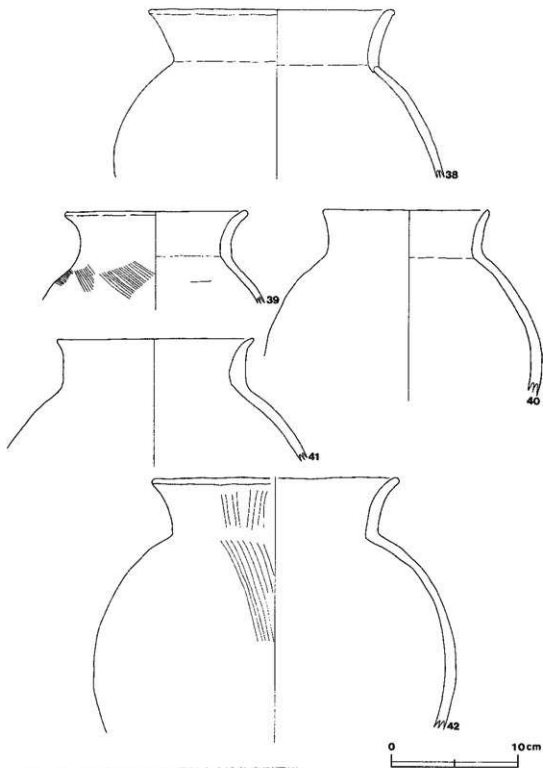
66は、滑石製で側面に横位の擦痕が認められる。白玉の一面には、截断する時、2方向から丸刀で削ったと思われる跡が認められる。法量は直径5.5mm・長さ3.5～5.0mm・孔径1.5mmである。



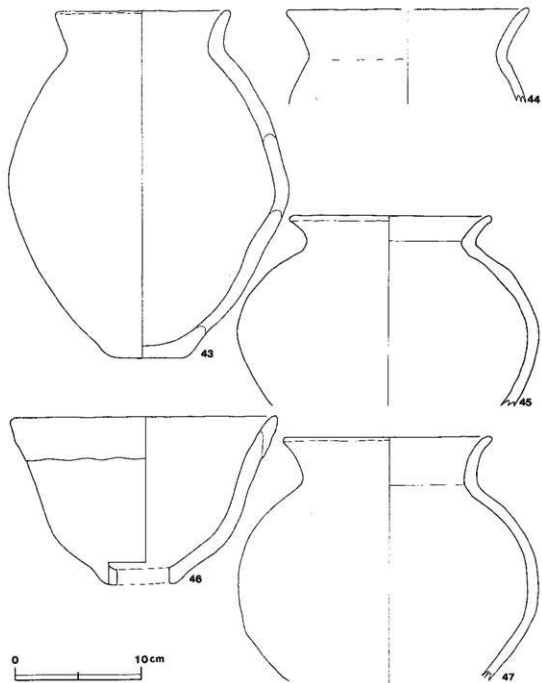
第91图 西原遺跡第9号住居跡出土遺物実測図(1)



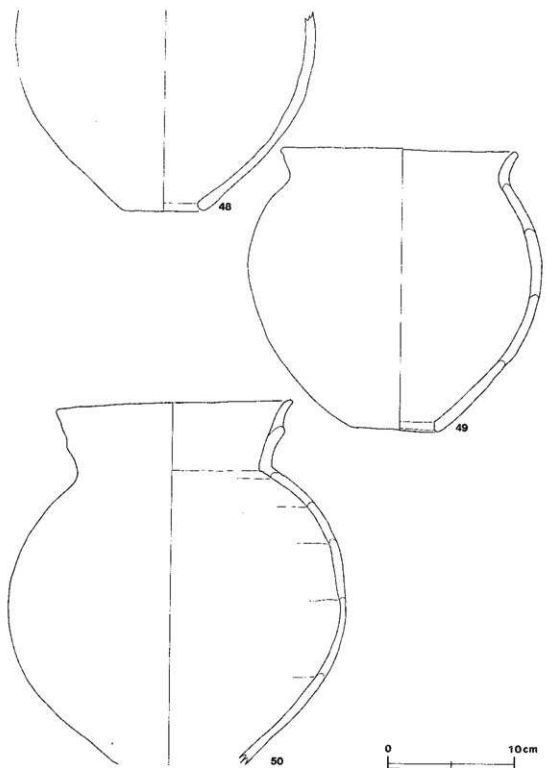
第92図 西原遺跡第9号住居跡出土遺物実測図(2)



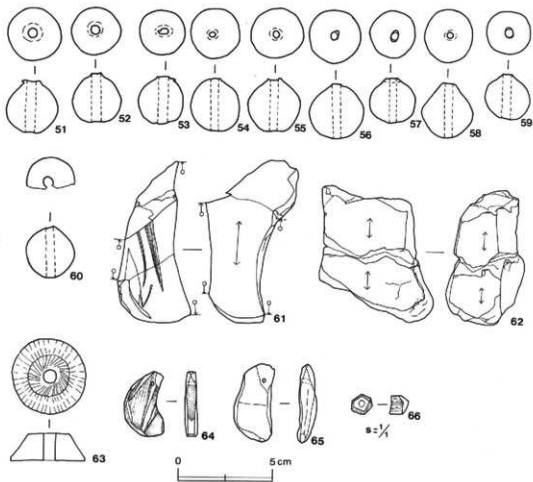
第93図 西原遺跡第9号住居跡出土遺物実測図(3)



第94図 西原遺跡第9号住居跡出土遺物実測図(4)



第95图 西原遺跡第9号住居跡出土遺物実測図(5)



第96図 西原遺跡第9号住居跡出土遺物実測図(6)

第10号住居跡 (第97図)

本跡はE3g区を中心に確認された竪穴住居跡で、南西11mに12号住居跡が隣接している。

平面形は、長軸5.04m・短軸4.10mの長方形を呈し、長軸方向はN-30°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20cmほどである。床面は平坦で硬くなっている。炉は長軸線にそって2基検出されている。いずれも平坦な床面を利用した地床炉である。炉1は北西壁寄りに位置し、平面形は、長径80cm・短径48cmの楕円形を呈している。東側の一部が赤色に硬く焼けているが、大部分は木根により擾乱されて焼土ブロックが残っていただけである。炉2は炉1の南東側に位置し、平面形が長径90cm・短径66cmの楕円形を呈し、炉床が赤色に硬く焼けている。この他に床面の中央部の南東側に、長径53cm、短径40cmの楕円形を呈した焼土が分布していた。床面は熱による変化が認められなかったので炉と判断することができなかった。

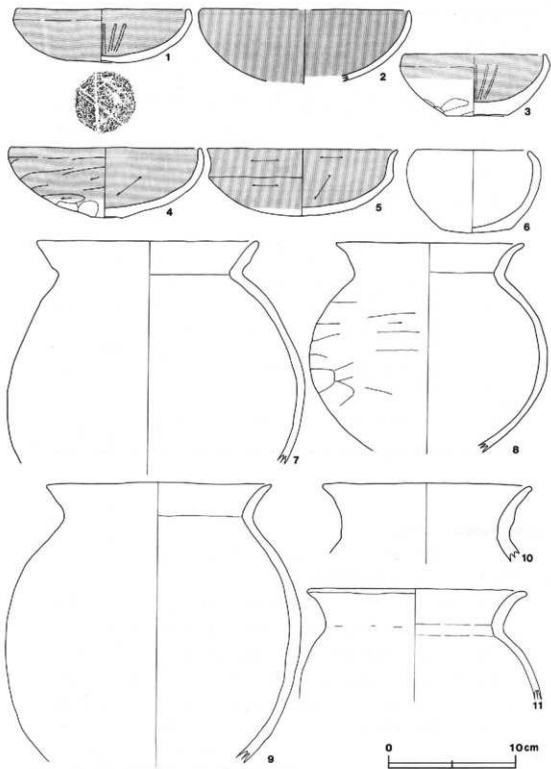
ピットは2か所検出され、規模や配置などからP1は貯蔵穴、P2は用途不明のピットである。貯蔵穴は東コーナー部に位置し、平面形は開口部が長径75cm・短径62cmの楕円形、底面が直径40cmの円形を呈し、深さ80cmで深くなるにつれ狭く掘られている。貯蔵穴の覆土は軟らかな暗褐色土で、レンズ状に堆積し、覆土中には少量の炭化物が含まれている。P2は南コーナー部に位置し、平面形は、長径36cm・短径26cmの楕円形で、深さが42cmほどである。

本跡の覆土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色土の2層からなり、レンズ状に自然堆積している。下層には炭化物が多量に含まれ、ヒシの実の炭化物も認められた。炉2の上に、長径1.7m、短径1.0mのヒョウタン形をした焼土域が検出され、この中に長さ50cmほどの炭化材が3本ほど並んで出土している。覆土や焼土域の状況から、本跡は火災に遭ったものと思われる。

出土遺物は、土師器及び土師器片282点、小石6点である。土師器の器種は、甕形土器・環形土器である。甕形土器片の出土点数は多いが、全体の器形を窺えるまでに復元できたのは1点だけで、その他、上半分が復元できたのは7点である。甕形土器は炉1と北西壁との間の床面に押しつぶされたような状況で出土している。環形土器は、4点が完形で、このうちの3点は貯蔵穴内と貯蔵穴付近の床面にまとまって出土している。これらの出土遺物は出土状況から本跡に伴うものと思われる。

第10号住居跡出土土器解説表(第98・99図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	環形土器 土師器	A 13.8	体部は深く、内脣しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短く内傾する。底部は丸底を帯り、平底としている。	外面は口縁部横ナデ、体部へラ削り、内面放射状にヘラミダキ、底部にヘラ削き。	細砂 黒・明赤褐色 普通	100% Y 底部外面を除き赤彩、外面に黒
		B 4.3				
		C 5.3				
2	環形土器 土師器	A (16.3)	体部は内脣しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短く、直立し、先端が尖る。薄手なつくりである。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へラ削り、内面へラナデ。	多量の細砂 赤色 普通	30% (8片) X+Y 内面に黒点状刺線
		A 11.3 B 4.9 C 4.8	体部は内脣しながら立ち上がり、口縁部は短く、内傾する。底部は平底で、木炭痕がある。	外面は口縁部上位が横ナデ、以下体部上位までへラミダキ、以下へラ削り、内面放射状にヘラミダキ。	緻密 橙・赤色 良好	80% X 貯蔵穴内 体部外面を除き赤彩 内面に黒点状刺線
3	環形土器 土師器	A 15.2	体部は内脣しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短く、内傾する。底部は小さな平底である。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へラ削り、内面放射状に黒ミダキ。	多量の細砂、赤褐色 普通	90% Y 外面下平を除き赤彩
		B 5.6				
		C 2.5				
4	環形土器 土師器	A 14.8	体部は内脣しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部に直立後、わずかに外反し、外面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へラ削り、内面放射状にヘラミダキ。	細砂 明赤褐色・棕色 普通 (二次焼成)	70% (2片) Y 底部外面を除き赤彩 内面に黒点状刺線
		B 5.4				
5	環形土器 土師器	A 9.0	体部は半球形で、深い。口縁部は短く、内傾する。底部は丸底を帯り平底としている。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へラ削り、内面へラミダキ。	細砂、多量の砂 明褐色 普通	100% X 内面に黒点状刺線
		B 6.6				
		C 5.4				



第98図 西原遺跡第10号住居跡出土遺物実測図(1)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
7	甕形土器 土師器	A 17.3	口縁部はくの字に外傾し、中位が肥厚している。胴部は下部が欠損しているが球形を呈すると思われる。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ナデ。器厚は一定せず難なつくり。	黒、黒色砂 棕色 普通	30% (20片) Y
8	甕形土器 土師器	A (14.7)	口縁部は頸部でくの字に外傾し、上位で更に外傾する。胴部は球形である。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へう削り、内面へうナデ。	多量の細砂 にふいぶ棕色 良好	50% (18片) 貯蔵穴内X+Y 焼点鉄灰燻
9	甕形土器 土師器	A 17.5	口縁部は外反し、頸部でやや突る。胴部はほぼ球形である。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へう削り横ナデ。内面ナデ。器厚は一定せず難なつくり。	細砂、スコリア 粒、赤棕色 普通 (二次焼成)	50% (21片) X+Y 焼点鉄灰燻
10	甕形土器 土師器	A 16.6	口縁部は直立後、外反する。口縁部はとところ肥厚している。	口縁部内外面横ナデ。	細砂、雲母 棕色 良好	15% (4片) X+Y
11	甕形土器 土師器	A 17.3	口縁部は直立後、外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へう削り、内面ナデ。	多量の細砂、雲母 棕色 普通	30% (7片) Y
12	甕形土器 土師器	A 15.9	口縁部は直立し後、外反する。頸部内面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケメ調整横ナデ。内面ナデ。	長石 棕色 普通 (二次焼成)	40% (14片) Y 内面に焼点鉄灰燻
13	甕形土器 土師器	A (17.6)	口縁部は直立後外反する。	外面の頸部から上ハケメ調整。以下へう削り。内面ナデ。	黑色砂 明赤棕色 普通 (二次焼成)	20% (8片) Y
14	甕形土器 土師器	B (14.7) C 6.0	胴部は横長な球形になると思われる。底部は小さな平底である。	胴部外面へう削り、内面ナデ。器厚は一定せず難なつくり。	砂、特に多量の黒色砂 明赤棕色 不良	40% (17片) X-Y
15	甕形土器 土師器	A (16.8)	口縁部は大きく外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ナデ。	細砂、雲母 棕色 普通 (二次焼成)	10% (3片) Y

第11号住居跡 (第100区)

本跡はE3gs区を中心に確認された竪穴住居跡で、調査区域の南東端に位置し、西12mに第10号住居跡、南西7mに第3号溝が隣接している。

平面形は、長軸6.54m・短軸6.53mの正方形状を呈し、長軸方向はN-48.4°-Wを指している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は37cmほどである。壁溝が壁下を全周し南コーナー部では三角形状に張り出している。壁溝の規模は幅が20~28cm、底面の幅が7~12cm、深さが17~23cmである。床面は平坦で、壁近くは軟らかいが、全体的に硬くなっており、東コーナー部の貯蔵穴のまわりはやや高くなっている。炉は地床炉で、床面中央から北東壁に向かって縦に3基が連続して検出された。南東側から北西側へ炉1、炉2、炉3とした。炉1は、長径100cm・短径70cmの楕円形を呈し、深さが6cmほどで底面が凸凹である。炉1の覆土は上層が厚さ3cmほどの黒褐色土で、多量の炭化粒子と焼土粒子が含まれている。覆土下層は暗赤褐色土で、焼土粒子が多量に含